



IEHE Report 86
Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

第36回東北大学高等教育フォーラム
新時代の大学教育を考える [19] 報告書

大学入試政策を問う — 教育行政と教育現場の「対話」 —

令和 4 (2022) 年 11 月

東北大学高度教養教育・学生支援機構
国立大学アドミッションセンター連絡会議

第 36 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [19]）

大学入試政策を問う
——教育行政と教育現場の「対話」——

- ◇ 日 時 : 令和 4 年 5 月 18 日（水）13:00～17:00
◇ 会 場 : 東北大学百周年記念会館 川内萩ホール（及びオンライン配信）
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 40
◇ 主 催 : 東北大学高度教養教育・学生支援機構
◇ 共 催 : 国立大学アドミッションセンター連絡会議

プログラム

- | | | |
|-------------|--|----------------|
| 司 会 | 東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授 | 久保 沙織 |
| 開 会 の 辞 | 東北大学総長 | 大野 英男 |
| 来 賓 挨 拶 | 文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長 | 平野 博紀 氏 |
| 基調講演 1 | 教育の現場と政策と研究と——やはり「教育は現場が命」だ——
国立教育政策研究所所長 | 浅田 和伸 氏 |
| 基調講演 2 | 大学入試のコンプライアンス
——未履修，入試ミス，そして，コロナ対策——
東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 | 倉元 直樹 氏 |
| | (休憩) | |
| 現状報告 1 | 地方公立高校の現場から
山形県立東桜学館中学校・高等学校教諭 | 延沢 恵理子 氏 |
| 現状報告 2 | 入試をめぐる行政と現場との対話——高校入試と大学入試を比較して——
東京都立八王子東高等学校校長 | 宮本 久也 氏 |
| | (休憩) | |
| 討 議
討議司会 | 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授
東北大学高度教養教育・学生支援機構特任教授 | 宮本 友弘
阿部 和久 |
| 閉 会 の 辞 | 東北大学理事・副学長 | 滝澤 博胤 |

大学入試政策を問う ——教育行政と教育現場の「対話」——

目 次

第36回東北大学高等教育フォーラム企画主旨	1
開会の辞	3
来賓挨拶	5
第Ⅰ部 基調講演	
基調講演者紹介	9
基調講演 1 : 教育の現場と政策と研究と ——やはり「教育は現場が命」だ—— 国立教育政策研究所所長 浅田 和伸 氏	11
資料	20
基調講演 2 : 大学入試のコンプライアンス ——未履修，入試ミス，そして，コロナ対策—— 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 倉元 直樹 氏	25
資料	35
第Ⅱ部 現状報告	
現状報告者紹介	41
現状報告 1 : 地方公立高校の現場から 山形県立東桜学館中学校・高等学校教諭 延沢 恵理子 氏	43
資料	49
現状報告 2 : 入試をめぐる行政と現場との対話 ——高校入試と大学入試を比較して—— 東京都立八王子東高等学校校長 宮本 久也 氏	55
資料	60

第Ⅲ部	討 議	——パネルディスカッション——	63
閉会の辞			81
講評			
講評 1 :	第 36 回東北大学高等教育フォーラムに参加して	一戸 利則 学長補佐 (前 青森県立八戸高等学校校長)	83
講評 2 :	教育行政と教育現場の「対話」について	立野 浩 教諭	87
講評 3 :	第 36 回東北大学高等教育フォーラムに参加して	高橋 賢 校長	90
講評 4 :	第 36 回東北大学高等教育フォーラムに参加して	佐藤 幸士 教諭	94
講評 5 :	「対話」の必要性について感じたこと	石黒 吉寛 指導主事	96
講評 6 :	教育現場からみた大学入試 そして対話	橋爪 清成 教頭	99
アンケート・参加者統計			
第 36 回東北大学高等教育フォーラムアンケート			103
アンケート自由記述			104
参加者統計			120

第 36 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨



高大接続改革の方針転換とコロナ禍で揺れた令和 3 年度入試が終わり、1 年あまりが経過した。高校では息つく間もなく、令和 4 年度から平成 30 年告示の新しい学習指導要領の下での学びが始まろうとしている。大学入試も指導要領の改訂に応じた変更が行われる。新学習指導要領対応の入試は令和 7 年度入試が最初だが、各大学では検討が始まっている。大学は「2 年前予告」の基準を目安に新しい入試制度を準備している。高校から見るとそれでは遅すぎるが、大学が改革のための情報を集めるには時間を要するのも事実だ。

大学入学者選抜制度が変わるたびに高校も大学も対応に苦慮してきた。時には、相手側の無理解や無策に憤ることもあっただろうが、高大連携の旗印の下、多かれ少なかれ「対話」が重ねられてきた。全てに納得がいくかどうかはともかく、以前よりは互いの状況への理

解が深化しつつあるのではないだろうか。

今回のフォーラムは、その「対話」を教育行政と大学入試の現場で行おうという試みである。現場感覚では意義が見出せなかったり、実現不可能と思われるような教育政策が実施されることがある。それは行政が現場の実情を理解していないことが原因なのか、それとも現場が政策の意図をつかみ損ねているのか。

基調講演者の浅田和伸氏は文部科学省のキャリア官僚から品川区の公立中学校長に転身した経歴を持つ。そのときの姿勢、経験、考え方は「教育は現場が命だ」という校長当時の日誌を集めた書籍にまとめられて公刊されている。文部科学省に戻った後、大臣官房審議官を経て大学入試の現場も経験した。高大接続改革で揺れる時期に、独立行政法人大学入試センター理事という現場の立場から、国語・数学の記述式問題の導入や英語民間試験

の利用の実現という難題に正面から立ち向かった。行政と現場の双方を熟知している。出身地は香川県の離島であり、地方の状況や厳しさも痛いほど経験してきた人物である。もう1人の基調講演者東北大学教授の倉元直樹氏とは大学の同期の関係にある。互いに付度なしの深い「対話」を期待したい。

高校現場からの話題提供者には地方の高校の第一線で走り続ける行動派の延沢恵理子氏、高校現場と教育行政を知り尽くす宮本久也氏に登壇をお願いした。4本の講演を題材として、高校および大学の先生方、関係する方々の多くの参加と忌憚なき活発な議論を期待している。

なお、本企画は国立大学アドミッションセンター連絡会議との共催である。

本報告書は、フォーラムの録音記録に修正を加えた原稿、「招待参加者」としてフォーラムに参加し、フロアの立場からフォーラムに対してお寄せいただいた講評、および、アンケート・参加者統計から成る。招待参加者は、東北地方6県の高等学校進路指導研究会進学指導部会等を通じ、各県1名ずつ選ばれた方々である。

本報告書は、録音記録から起こした原稿に対し、発言者が校正を加え、最終的に編集責任者が表現の修正を加えたものである。招待参加者の原稿については、体裁の統一に関わる部分を除いて、表現の修正は行っていない。

編集過程で生じた不具合に関しては、全て編集者の責任である。

(編集担当：東北大学 高度教養教育・学生
支援機構高等教育開発部門入試開発室
准教授 久保沙織)

開 会 の 辞

東北大学総長

大野 英男

久保沙織准教授（司会）：

皆様、こんにちは。本日は、ご来場、オンラインのそれぞれで、全国から多数の皆様にご参加をいただき、誠にありがとうございます。予定の時刻となりましたので、第36回東北大学高等教育フォーラム「大学入試政策を問う——教育行政と教育現場の『対話』——」を始めさせていただきます。ご案内のとおり、本フォーラムは東北大学と国立大学アドミッションセンター連絡会議の共催でございます。本日は、東北大学高度教養教育・学生支援機構の久保沙織が総会司会を担当させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

開会に当たりまして、主催者を代表し、大野英男東北大学総長よりご挨拶を申し上げます。

大野英男総長：

ただいまご紹介いただきました東北大学総長の久保沙織でございます。開会に当たって一言ご挨拶を申し上げます。

このフォーラムは今回で通算36回目となりますが、昨年に引き続き「国立大学アドミッションセンター連絡会議」との共催でお送りします。再びお力添えをいただきましたことに感謝いたします。また、来賓としてご挨拶をいただきます文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長の平野博紀様をはじめ、お忙しい中、基調講演、現状報告をお引き受けくださった先生方に深く感謝を申し上げます。

このフォーラムは、年2回開催で足かけ19年目になります。春のフォーラムは、高大接続、入試関連の企画を実施しています。一昨年、初めて「来場参加」と「オンライン参加」を組み合わせたハイブリッド方式を取り



入れました。そのおかげをもちまして、多くの皆様にご参加いただけるようになり、大変うれしく思っています。

さて、今回のテーマは、「大学入試改革を問う——教育行政と教育現場の『対話』——」となっております。随分思い切ったテーマにしたなと思いましたが、それというのも、浅田和伸氏を基調講演者としてお迎えしたことから発想したと伺っております。

浅田氏は、文部科学省のキャリア官僚として教育行政の中心を歩んでこられた方ですが、その経歴の中で、品川区の公立中学校の校長を3年間お務めになりました。現在は、国立教育政策研究所の所長という国の教育政策のシンクタンクともいえるべき研究機関のトップにおられます。高大接続改革が進行する難しい時期には、大学入試センターの理事を務められた経歴もお持ちですので、まさに「行政」、「研究」、「教育現場」を俯瞰してお考えになってこられたことをお聞きするのが楽しみです。

もう一人の基調講演者は、本学の倉元直樹教授です。東北大学の入試をインターフェイスとして、長年にわたって東北大学における高校とのつなぎ役を務めてきております。東

北大学から見た大学，そして高校，その 2 つの関係性における教育行政の役割についてお話を申し上げます。

高校現場からは，山形県立東桜学館中学校・高等学校の延沢恵理子先生，そして，東京都立八王子東高等学校校長，宮本久也先生にご登壇をいただきます。

延沢先生は，山形県における公立進学校の進路指導の経験が豊富でいらっしゃいます。現在は新設の中高一貫校の生徒を中学から持ち上がりで指導しておられ，受験生側からの視点でのお話をお伺いする予定です。

一方，宮本先生は，東京都教育委員会での経験も長く，高大接続改革の時期には，全国高等学校長協会会長を務められていたことから，以前もご登壇をいただいたことがございます。教育行政と高校現場の双方をよく知る立場から，高校入試と大学入試との比較を伺えるものと思います。

国立大学は，今年から新たに 6 年間の第 4 期中期目標・中期計画期間に入りました。本学東北大学では，「世界トップクラスに比肩する研究大学」となる中で，教育面でも幅広い教養と深い専門性を身につけた国際感覚を持った人材を養成することを目標に掲げています。入学においても，「オンラインと対面を融合した高大接続プログラムを機動的に展開する」ことと，エビデンスに基づく「データ駆動型の研究」，そしてその成果の発信などに取り組んでいく所存であり，本フォーラムをその実践の一つと位置づけております。

ご参加の皆様方のご協力により，今後 6 年間ににおける東北大学の教育改革の礎となる実りのあるフォーラムになることを期待いたしますとともに，皆様にとりましても，全国の高大接続に対しての理解，考え方を深めていただく一助になればと思います。

以上，簡単ではございますが，開会のご挨拶とさせていただきます。今日はどうぞよろしく願いいたします。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

大野総長，ありがとうございました。

来 賓 挨 拶

文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長 平野 博紀 氏

久保沙織准教授（司会）：

続きまして、来賓としてご出席いただいております、文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室、平野博紀室長からご挨拶を頂戴いたします。平野室長は、本日オンラインでの参加となっております。では、平野室長よりしくお願いいたします。

平野博紀室長：

ただいまご紹介にあずかりました、文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長の平野博紀でございます。第 20 回国立大学アドミッションセンター連絡会議総会行事の開催に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

まず、本来であれば、仙台に赴き皆様に直接ご挨拶を申し上げるべきところですが、コロナ禍の状況もございまして、モニター画面を通じてのご挨拶となりますことをご理解賜ればと存じます。

本日、フォーラムが多数の方々のご参加を得て開催されることにつきまして、心よりお喜びを申し上げます。例年であれば、5月26日から開催される全国大学入学者選抜研究連絡協議会と併せて連絡会議の行事が企画されてきたところ、コロナの影響もあって、昨年度同様、東北大学高等教育フォーラムとの共催として、公開シンポジウムという形になったと伺っております。

また、東北大学、大野総長をはじめといたしまして、本フォーラムの開催にご尽力いただいた東北大学高度教養教育・学生支援機構や国立大学アドミッションセンター連絡会議の関係各位の皆様に対しまして深く敬意を表するとともに、本日ご参加いただきました皆様におかれましては、日頃より大学入試の円

滑な実施及びその工夫・改善に多大なご尽力をいただき、この場を借りて改めて御礼を申し上げます。

さて、昨年度実施された令和4年度大学入学者選抜においては、オミクロン株が拡大する中での入試ということに加えて、通信機器を用いた不正行為などが生じ、各大学において非常にご苦勞が多かったものというふうに存じます。関係者の皆様におかれては、受験生第一との立場に立って、受験機会の確保や安全対策の徹底等、適切にご対応くださったことに、この場を借りて御礼を申し上げます。ありがとうございました。

現在、文部科学省では、大学入学者選抜協議会において、より円滑な入試を実施するために対応が必要な課題について検討しているところであり、幅広い関係者や当事者のご意見を取り入れながら、受験生が安心して受験できるよう、その環境の整備に努めてまいりたいと思っております。

このような中、本日「大学入試政策を問う——教育行政と教育現場の『対話』——」をテーマに実施される今回のフォーラムは、先ほど総長先生から多彩なパネリストについてご紹介ございましたけれども、教育行政、高校、大学といった様々な立場からの意見を伺うことができ、また、今後の入試のあり方を考えるということが出来る貴重な機会であるというふうに私どもとしても感じているところでございます。

本フォーラムにおける大学と高校がそれぞれの立場というものをより深く理解する試みにより、我が国の大学入学者の選抜の改善が一層推進されることを祈念いたしまして、簡単ではございますけれども、私からのご挨拶

とさせていただきます。ありがとうございました。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

ありがとうございました。

ここでお知らせとお願いがございます。まず、本日の進行についてのお知らせです。来場参加の皆様はお手元の封筒に、オンライン参加の皆様は事前にメールにてご案内させていただいたオンライン参加者用ページに配付資料がございます。配付資料のプログラムをご覧ください。



本日は3部構成となっており、第1部の基調講演では国立教育政策研究所の浅田先生、東北大学の倉元先生からそれぞれ40分程度お話をいただきます。第2部は、現状報告として、山形県立東桜学館中学校・高等学校の延沢先生、東京都立八王子東高等学校の宮本先生より、それぞれ20分程度お話をいただきます。その後、第3部では4人の先生方に再びご登壇いただき、基調講演、現状報告を踏まえての討議を行います。第1部終了後に15分程度、第2部終了後に20分程度の休憩を挟み、本フォーラムの終了は17時頃を予定しております。なお、基調講演、現状報告でご講演いただきます先生方の詳しいプロフィールにつきましては、配付資料に含まれておりますので、ご覧いただければと思います。

次に、皆様へのお願いです。このたびのフォーラムでは、討議のための質問票及び事後アンケートについてウェブ上でご記入いただくようご用意いたしました。まず、討議のための質問票についてご説明させていただきます。来場参加の皆様は、「第36回東北大学高等教育フォーラム討議質問票」という配付資料に記載されているQRコードを読み取り、当該ウェブページにアクセスしてください。オンライン参加の皆様は、事前にご案内させていただいたオンライン参加者用ページより「討議質問票へ」を選択してください。現在投影されているスライドに表示されているQRコードからも質問票のウェブページへアクセスしていただくことができます。第3部の討議に反映させていただきますので、ご記入は第2部終了後の15時40分までに行っていただくようお願いいたします。なお、基調講演、現状報告に対するご質問やご意見は、15時40分までの間であればお一人につき何度でもご記入いただくことが可能です。二度目以降続けて入力する場合には、「別の回答を送信」と表示されることがありますが、そちらを選択していただいても構いません。また、大変恐れ入りますが、討議のためのご質問、ご意見の受付は、今回はウェブからのみとなりますので、ご理解のほどお願い申し上げます。

続いて、フォーラム終了後のアンケートへのご協力をお願いします。来場参加の皆様は、QRコードを読み取り、ウェブ上でご回答いただく方法と、用紙に直接ご記入いただく方法のいずれかをご選択いただけます。用紙にご記入いただいた場合には、受付に回収箱を設置しておりますので、お帰りの際にご提出ください。オンライン参加の皆様は、事前にご案内させていただいたオンライン参加者用ページより「アンケートへ」を選択してください。アンケートへのご回答は、フォーラム終了後をお願いいたします。

なお，今年も参加された皆様には本フォーラムの内容等を記載した報告書を後ほどお送りすることにしております。皆様のご協力のもと，本日は有意義な会となりますよう努めさせていただきますので，どうぞよろしくお願い申し上げます。

第 I 部 基調講演

基調講演者紹介

基調講演者 1

浅田 和伸（あさだ かずのぶ）氏

1962 年香川県生まれ

〔教員歴〕

東京都品川区立大崎中学校校長（3 年間）

〔主な著書、研究業績〕

『教育は現場が命だ 文科省出身の中学校長日誌』（悠光堂）2019

『子どもといっしょに成長しよう 3 日で気が楽になる「親」の本』（ジアース教育新社）
2021

〔その他の特記事項〕

現職：文部科学省国立教育政策研究所長

前職：文部科学省総合教育政策局長

元職：独立行政法人大学入試センター理事，文部科学省大臣官房審議官（初等中等教育局
担当），同（高等教育局担当）等

基調講演者 2

倉元 直樹（くらもと なおき）氏

1961 年北海道生まれ

〔教員歴〕

大学入試センター研究開発部 助手	(1990 年 12 月 ～ 1999 年 3 月)
東北大学アドミッションセンター 助教授	(1999 年 4 月 ～ 2004 年 3 月)
東北大学高等教育開発推進センター 准教授	(2004 年 4 月 ～ 2014 年 3 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授	(2014 年 4 月 ～ 2015 年 9 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授	(2015 年 10 月 ～ 現在に至る)

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（テスト学，大学入試学）

〔主な著書、研究業績〕

日本テスト学会編（2007）．テスト・スタンダード——日本のテストの将来に向けて——，金子書房（共同執筆）

倉元直樹編（2020）．「大学入試学」の誕生，東北大学大学入試研究シリーズ 第 1 巻，金子書房．

倉元直樹編（2020）．大学入試センター試験から大学入学共通テストへ，東北大学大学入試研究シリーズ 第 2 巻，金子書房．

倉元直樹・宮本友弘・久保沙織（2022）．コロナ禍の下での大学入学者選抜を振り返る——主として 2021（令和 3）年度入試に関連して——，高度教養教育・学生支援機構紀要，第 8 号，95-107．

倉元直樹監修（2022）．コロナ禍に挑む大学入試 緊急対応編，東北大学大学入試研究シリーズ 第 6 巻，金子書房．

〔学会活動等〕

日本テスト学会，日本教育心理学会等
日本テスト学会理事（2005 年より）

〔その他の特記事項〕

全国大学入学者選抜研究連絡協議会企画委員会委員（2010 年 5 月より [継続中]）

日本行動計量学会 林知己夫賞（優秀賞）受賞（第 27 号）（2007 年）

日本教育心理学会 城戸奨励賞受賞（第 37 号）（1995 年）

基調講演 1：教育の現場と政策と研究と ——やはり「教育は現場が命」だ——

国立教育政策研究所*

浅田 和伸 所長

〔講師紹介〕

久保沙織准教授（司会）：

それでは、早速、第1部の基調講演に移らせていただきます。基調講演1、演題は「教育の現場と政策と研究と——やはり『教育は現場が命』だ——」です。国立教育政策研究所所長、浅田和伸先生、よろしくお願いいたします。

浅田和伸所長：

皆さん、こんにちは。文部科学省国立教育政策研究所の浅田です。正直、荷の重いテーマを引き受けてしまいました。このフォーラムを企画されている東北大の倉元先生は、普段は倉元さんと呼んでいますが、実は大学の同級生です。仕事の上でも何かとお世話になってきました。私は大変気の弱い性格で、子どものときから損ばかりしているのですが、今回もうまく断りきれなかったんですね。去年の秋、まさにうちの研究所の仕事にご協力いただいたときに、この相談を受けたと記憶しています。断りにくいタイミングだと分かっているわけですね。そのときは、5月なら随分先だし、私ももっと身軽な立場になっているんじゃないかと予想していましたので、まあいいか、どうにかなるだろうと受けてしまいました。ところが、何ということでしょう、文部科学省の現役の職員のまま、この日を迎えてしまいました。

役人は役を受け持つ人間です。役を、つまり立場をわかまえるべき人間です。本シンポジウムのご案内には、これは倉元さんの希望、願望でしょうが、「互いに忖度なしの深い議



論を期待したい」なんて書いてありました。倉元さんは忖度しないでしょうが、私は公的な立場をわかまえつつ、可能な範囲でお話させていただきます。

準備してきた内容は大体次のようなものです。高大接続改革、特に大学入学共通テストにおける記述式問題の導入及び「共通テストの枠組みにおいて」という枕詞つきで準備が進んでいた英語民間資格・検定試験の活用をめぐる一連の経緯については、大学入試のあり方に関する検討会議で検証がなされました。その経緯について、その時々私がどういうポジションにいたかということも交えながら、改めて振り返ってみます。

少しだけ自己紹介をします。昨年、令和3年の1月から今の仕事をしています。もともとは瀬戸内海、小豆島の隣にある、豊かな島という漢字を書いて「てしま」と読む僻地の離島の出身です。家は田畑と養鶏をやっていました。今でも母が実家におります。今年は、豊島を含む瀬戸内の島々を舞台に、3年に一度開催される「瀬戸内トリエンナーレ」、瀬戸内国際芸術祭の年です。春夏秋の三季にわ

* 2022年5月現在

たり開催され、春の期間がちょうど今日まででした。夏は8月5日から始まります。機会がありましたら、ぜひ豊島にもお立ち寄りいただければうれしいです。

大学では文学部で心理学を専攻し、ねずみに迷路を覚えさせたりしていました。大学時代の同級生で最も著名な方として、倉元直樹さんという方がいます。昭和60年、1985年に文部省に就職し、以後、放送大学学園、三重県教育委員会の指導課長、中国北京にある日本大使館の一等書記官、大臣秘書官、文科省高等教育局の専門教育課長や高等教育企画課長、東京都内の公立中学校長、内閣官房の教育再生実行会議担当室長、文科省の大臣官房審議官、それから大学入試センターの理事を挟んで、総合教育政策局長などを務めてきました。最近、本も2冊出しましたので、お読みいただければ幸いです。

本シンポジウムの案内文にこうありました。「現場感覚では意義が見出せなかったり、実現不可能と思われるような教育政策が実施されることがある。それは行政が現場の実情を理解していないことが原因なのか、それとも現場が政策の意図をつかみ損ねているのか。」私の立場でどうコメントすればいいんでしょうか。事柄にもよるのかもしれませんが、少なくとも大学入試改革についていえば、そんな単純なことではなかったんじゃないのかなという思いも胸のあたりにあります。ただ、表現するのが難しいですし、分かってもらうのも難しいだろうなと感じます。

今回のフォーラムの大きなテーマは「教育行政と教育現場の『対話』」です。せっかくの大学でのフォーラムですから、私自身の演題はあえて「現場と政策と研究と」と三者にさせていただきました。その三者がちゃんとつながるようになるというのが私の願いです。

平成21年度、2009年度から3年間、自分でどうしても学校現場で仕事をしたいと上に

直談判し、東京都品川区立大崎中学校で校長を務めました。その前から、現場と行政がつながっていない、行政が信頼されていない、頼りにされていないという問題意識、危機感がありました。加えて、とても残念ですが、教育学などの学術研究の世界も、やはり現場や行政とうまくつながっているとは言えないと感じます。もちろんつながるほうがいいに決まっていますが、なぜつながることができないのか、どうすればつなげることができるのか。それはそう簡単なことではないとも思います。教育には、こうあるべきというべき論がとても多いと私は感じていますが、べき論を言って解決するなら誰も苦勞しません。そうではなく、お互いの必要性和信頼と敬意がなければつながらないし、長続きもしないでしょう。

5ページから8ページは、文部科学省の資料を入れてあります。一部、5ページと6ページの赤枠だけは私がつけたものです。5ページは、教育再生実行会議の第四次提言から大学入学共通テスト実施方針、記述式と英語成績提供システムの導入見送り、そして検討会議の提言までを大雑把に一枚にまとめたものです。このうち記述式と英語について指摘されていた主な問題としては、資料に書かれている以外のことも少し補足しますが、記述式については、そもそもの出題の仕方、採点の基準、方法、時間、正確性、仮に採点に誤りがあった場合の対応などがありました。英語民間資格・検定試験については、それぞれ異なる試験等の結果をどうやって使うのか、地理的・経済的な負担や公平性、受験上の配慮、学習指導要領との整合性、実施主体が行うほかの事業との関係などの課題が認識されていました。

検討会議で検証、提言がなされたことは、私の立場、文科省の立場ではうつむきながら言わなくてはなりませんが、結果としては本当によかったと思います。少なくとも近々ま

た同じようなことが繰り返されることのないようにという歯止めになるでしょう。意思決定のあり方について挙げられている「議論の透明性，データやエビデンスの重視，多様な意見聴取」，「実現可能性の確認」などの必要性は，今後もずっと，何回でも繰り返し強調しなくてはいけないものです。本当はこういうことを法律で基本ルールとして決めてしまってもいいのではないかと思うくらいに大事なことです。

7 ページと 8 ページは，中教審への諮問から実行会議，また中教審，高大接続システム改革会議，そして実施方針へとつながる一連の議論，検討の流れを 2 枚にまとめた資料です。中教審答申後の高大接続改革実行プランから後が 8 ページです。

9 ページからは，今回の講演のために私が作った資料です。事柄としては，5 ページ及び 7，8 ページと重複するのですが，もう少し丁寧に振り返るために，概ね 1 年ごとに主な出来事をまとめました。文科省の資料には表れませんが，実際には一連の改革は政府与党で進められてきたものですから，特に自民党の教育再生実行本部の動きを付記したページもあります。一番右側には，その時期に私がどこにいたかを記載しています。

まず，9 ページは，2012 年，平成 24 年です。高大接続改革は，民主党政権下の平成 24 年 8 月末になされた中教審への諮問に始まります。たまたま私はその月から高等教育局の筆頭課である高等教育企画課の課長を拝命しました。そのときには諮問の準備はもうほぼでき上がっていましたが，ぎりぎりですりだけ関わることができました。中教審への諮問理由説明の文章の中に，「本来，大学入学者選抜も教育の一プロセス」です，そういう意識でやってほしいんですという趣旨の言葉を，これは校長のときから強く感じていたことですが，私の考えで入れてもらった記憶があります。大学で入学者選抜に関わる皆さ

んには，単に受験生を選別する，落とすための道具ではなく，教育的な視点や配慮を持ってあたっていただきたいと今でも願っています。どうぞよろしくお願いします。

この諮問を受け，中教審では新たに会長直属の高大接続特別部会を設置し，議論を開始しました。その状況が大きく変わったのが，年末の政権交代です。私は何をしていたかというと，11 月に民主党政権下で時の大臣が審議会の判断を覆して 3 大学の設置を認可されないという件があり，私は担当課長として，かなりの期間，ほぼ徹夜に近い状態でこの問題にかかりきりになっていました。その結果，みるみるうちに 5kg のダイエットに成功しました。

そうこうするうちに，12 月に政権交代となりました。2013 年，平成 25 年 1 月，自公政権による第二次安倍内閣の下で，総理直属の教育再生実行会議が発足します。与党となった自民党でも新たな教育再生実行本部が動き出します。1 月 24 日に開かれた第 1 回の教育再生実行会議で，文部科学大臣兼教育再生担当大臣から当面の審議テーマがたくさん示されています。野党時代から温めてこられた政策を新たな政権で一気に実現したいという勢いだったと思います。その中に「大学入学試験のあり方」も含まれていました。このため，高大接続改革については，中教審での議論を一旦中断し，先に教育再生実行会議でご議論いただいてから，それを受けてまた中教審で議論するというサンドイッチのような形を取るようになりました。

教育再生実行会議は，第 1 回のときに示されたテーマについて，矢継ぎ早に提言を打ち出していきます。1 月に会議ができて，翌 2 月に第一次提言，2 か月後の 4 月に第二次提言，翌 5 月に第三次提言です。次にテーマになったのが「高大接続・大学入試のあり方」でした。この年の 6 月から 10 月，第 9 回から第 14 回の会議で議論がなされました。そ

の初回、第9回会議には中教審の高大接続特別部会の部会長で中教審の会長でもあった方が実行会議に出席され、中教審でのそれまでの審議状況を報告し、議論をつないでいます。

一方、自民党の教育再生実行本部も、教育再生実行会議の動きに先んじて精力的に議論され、4月には英語教育等を内容とする第一次提言、5月には大学・入試の抜本改革等を内容とする第二次提言をまとめています。政府の教育再生実行会議は、6月からの議論の結果を、10月に高大接続・大学入学者選抜に関する第四次提言として出されました。ここでは、大学入試センター試験に代えて新たな試験を導入すること、外国語などでは外部検定試験の活用を検討することなどが示されています。今回の一連の施策の方向づけとなる大変重要なものでした。

そして、議論は再び中教審に戻るようになります。前のページがいっぱいになったのでここに書きましたが、ボールが戻ってきた中教審の高大接続特別部会は、2013年11月に再開後初めての会議を開いています。その際、同部会のある委員の方から「教育再生実行会議が言ってきたことに全面的に従わなければいけないのか」と、第四次提言に疑義を呈するご発言もありました。部会長はそのときは「必ずしもそうではない」とお答えになりましたが、実際には第四次提言の延長線上で平成26年12月の答申へとつながっていったと思います。

私は7月に高等教育局から大臣官房に異動しました。12月にまとめられた中教審の高大接続答申では、「センター試験を廃止し、新テストを新たに実施する」こと、新テストでは「記述式を導入する」こととされています。また、英語については、四技能をバランスよく評価するための方策として「民間の資格・検定試験の活用」に言及されています。

高大接続答申が平成26年12月22日。そして年末年始を挟んで1か月もしない翌平成

27年1月16日には高大接続改革実行プランが大臣決定として定められました。そのねらいは、高大接続改革を着実に実行する観点から、文科省として重点施策とスケジュールを対外的に明示することにあつたと思います。答申は答申にすぎませんが、この実行プランによって文科省としてやりますと宣言したわけです。この実行プランで、新テストは平成32年度、これは改元によって令和2年度になりましたが、2020年度からの実施を目指すというスケジュールが示されました。実際このスケジュールどおり、2020年度である2021年、令和3年1月に初めての大学入学共通テストが行われました。

同時に、新テストについては、なお様々に検討すべき課題があることから、「専門家会議を立ち上げ……検討を行い」、翌「平成27年度中を目途に」、つまり約1年で「検討結果を取りまとめ」とされました。これを受けて、今度は高大接続システム改革会議が新たに設けられました。スケジュールを掲げた上で、それに向けて大車輪で検討するという形です。

余談ですが、2020年度は東京でオリンピック・パラリンピックが開催される予定の年でした。まあ常識的に考えて、新テストのスケジュールとは関係ないと思いますが。私はこの年、大臣官房総務課長から、8月には内閣官房審議官、教育再生実行会議担当室長になり、第九次提言に向けてのテーマ設定、メンバーの改選から翌年6月の提言までを担当することになりました。

先ほどの実行プランで検討の期限とされた「平成27年度中」の最後の月、平成28年3月に高大接続システム改革会議が最終報告をまとめています。ここでは、新テストに「記述式を導入することが有効」としつつ、なお、その「導入に当たっては、作問・採点・実施方法等について乗り越えるべき課題も存在していることから……実証的・専門的な検討を

丁寧に進める」とされています。要すれば、この時点までにはまだ乗り越えられなかった課題が残っていたということです。英語四技能の評価についても、この時点でも「民間との連携のあり方を検討する」でした。

そして、5月からはさらにその「実証的・専門的な検討」のための新たな会議が設けられます。この継ぎ足し継ぎ足しの検討の経緯にも、いかに難しい課題が多かったかということが表れていると思います。

私は内閣官房で教育再生実行会議を担当する室長でしたが、4月からそれに加えて文科省で初等中等教育局を担当する審議官の兼務発令も受けました。ただ、5月の提言が済むまでは、実行会議事務局の責任者としての仕事を優先しないわけにいかないということは最初からお断りしていて、実際、初中局の審議官の部屋で仕事ができるようになったのは6月からでした。私は自分から中学校での仕事を志願したくらい学校が好きですが、実は初等中等教育局に配属されたことがそれまで一度もなく、やっと初めての初中局だと喜んだもののつかの間、わずか半年で12月には高等教育局の担当に替わりました。

当時、高等教育局は獣医学部の問題などが燃え盛っていて非常に忙しく、審議官の私が隣の部屋の局長と会うことさえとても難しく、夜中の2時、3時頃になってやっとお互い疲れ果てた状態で二言三言言葉を交わすような状況でした。

しかし、時は止まってくれません。ほかの人もそうだったのではないかと想像しますが、想像で物を言うのはやめておきます。私自身は非常に強い危機感を持っていましたし、考え、悩み、焦り、こっそり人に相談に行ったりもしました。ですが、それ以上のことを言う時期ではないと思います。先にも述べた大きな問題などのほかにも、東京23区内での大学の定員増の抑制などさまざまな件があり、精神的にもとても苦しい時期でした。

いろいろありましたが、私は7月11日から文科省を離れ大学入試センターで仕事をさせていただくことになりました。その2日後に、文科省が3年半後に迫る大学入学共通テストの実施方針を策定、公表しました。なお、実施方針を正式に決定する前には、5月に案を公表して、パブリック・コメント（意見募集）の手続きを踏んでいます。また、ご参考ですが、6月に自民党教育再生実行本部の提言検証特別部会が英語教育に係る検討状況をまとめています。この7月の実施方針で、新テストの名称、実施時期、記述式問題を出題すること、英語四技能について「共通テストの枠組みにおいて、現に民間事業者等により広く実施され、一定の評価が定着している資格・検定試験を活用する」ことが正式に決まりました。その認定を大学入試センターが担うことになりましたが、それについても私としては、今度は大学入試センターの立場で、できること、できないことを文部科学省に対して強く主張し、やり合った記憶があります。できもしないことを無責任に引き受けるわけにはいかないというのは、この件に限らず、私自身の責任感として持ち続けているつもりです。

5ページの資料にあるような懸念は、私も強く認識していました。しかし、やると決まった以上は、できる限り、予想される課題、問題、混乱を最小限に抑えなくてはいけない、極力ゼロに近づけたい、取り返しのつかないような事態は何としても避けねばならぬ、そういう気持ち、覚悟でいました。一緒に仕事をした仲間たちも、恐らく同じ気持ちを抱きながら、苦しい中で懸命にやってくれていたと思います。

実施時期が決まれば、遡ってやるべきことと期限が決まってきます。11月に大学入試英語成績提供システムの参加要件を公表し、またこの年と翌年の2回、初めての記述式を含む試行調査（プレテスト）も行いました。

年表には表れませんが、記述式答案の読み取りのための機器の導入なども並行して進めていました。平成30年、2018年8月の実施方針（追加分）というのは、英語成績提供システムの運用、特例などに関するものです。11月には2回目の試行調査（プレテスト）を行いました。

そして、新テスト実施の前年度、令和元年、2019年です。私はこの年の1月、大学入試センター試験の本試験が終わり、続いて翌週に追・再試験を実施するというちょうどその隙間の時期に、つまりセンター試験の真っ最中に、大学入試センターから文部科学省に異動になりました。乱暴な人事だなと思いましたが、何かほかの事情があったのでしょうか。半年ほど法科大学院に関する法律改正を担当し、その後7月から総合教育政策局長を1年半、そして令和3年1月から今の国立教育政策研究所長を務めさせていただいています。

令和元年の6月に文科省は、大学入学共通テストの実施大綱、大学入試英語成績提供システムの運営大綱を策定しました。新テスト実施の1年半前です。9月に萩生田前大臣、現経済産業大臣が文部科学大臣兼教育再生担当大臣に就任されました。私はそれ以前から、内閣官房副長官のときなどにもご説明に上がったことがあります。教育や教師について大変ご理解の深い方だという印象を持っていました。先週5月11日に法改正が成立し正式に決まった教員免許更新制の廃止なども、萩生田大臣のリーダーシップあってのことだと思います。

高大接続改革についても、その萩生田大臣の下で状況が大きく動いたのは、皆さんご存知のとおりです。11月に大学入試英語成績提供システムの導入を、12月に記述式問題の導入を、それぞれ見送ることが大臣のご決断によって決まりました。そして昨年、令和3年、2021年の1月に、大学入試センター試験から名称が変わった初めての大学入学共

通テストが実施されました。その頃やその前の時期は、新型コロナウイルス感染症のため、大学入試英語成績提供システムで使われる予定であった民間資格・検定試験の多くは実施ができず、あるいは会場数や人数、回数が大幅に縮小されていました。もしも当初の予定どおり突き進んでいたら、その面でも大きな混乱が生じていたはずでした。7月に一連の事態の検証等を行う大学入試のあり方に関する検討会議が提言をおまとめになりました。以上が、主な経緯のおさらいです。

ここからは、いくつかの材料を引きつつ、可能な範囲で振り返りを試みたいと思います。17ページは「検討会議」提言からの抜粋です。恥ずかしくなるくらい当たり前のことが言われています。「意思決定にあたっては……関係者との協議を踏まえることを基本とし、実証的なデータやエビデンスに基づき、専門的・技術的な知見や幅広い関係者、当事者の意見に耳を傾け……負担と……成果の比較衡量も加味した慎重な検討……が重要」、「可能な限り透明性を確保し、国民の理解を得ながら結論を導き出す」、「理念や結論が過度に先行し、実務的な課題の解決に向けた検討が不十分にならないようにする必要がある」、「実務的な実現可能性を常に確認し、課題の解消が難しいと判断される場合は工程を見直したり……必要な場合は理念まで再度遡って検討したりする」などです。

つい先日、私も大学入試センターでお仕えた山本前理事長のインタビュー記事ですが、それが新聞に掲載されていたので、一部を紹介させていただきます。冒頭にある2013年6月6日というのは、今日のレジュメでいえば10ページ、教育再生実行会議で高大接続、大学入学者選抜についての議論が始まったのがまさに6月6日に開催された第9回会議からです。その日の朝刊ですから、会議が開かれる前にそういう記事が出たということです。後段の記述式や英語民間資格・

検定試験についてのご認識は、一緒に仕事をしてきた者として私もよく理解できるつもりです。

私自身の考え、認識などは、今の立場では慎重にお話ししなくてはいけないと思いますが、ごくわずかに教育情報誌などで既書いて公表されているものもあります。今回、この講演の準備をするにあたって、もう少しないかと過去の原稿等を探したのですが、やはりほとんどありませんでした。当時も慎重だったのだと思います。

19 ページは高等教育企画課長のときのもので。教育再生実行会議に触れて、「一部の記者は『大胆な』『抜本的な』改革を煽りたがるが、このテーマは拙速を避け丁寧に議論するのが子どもたちへの責任だと思う」と書いています。

20 ページは総務課長のときに書いたものです。中教審の高大接続答申について、「影響が大きいだけに、十分な検討と準備が必要だ。『一か八か』で突っ込むことはできない」としています。一か八かで突っ込むわけにいかない。当然でしょう。結果的にそれが避けられたことに、正直ほっとしています。

そこから 5 年も飛んでしまいます。21 ページからの 2 枚は、記述式、英語民間資格・検定試験とも見送りが決まった後、令和 2 年に、その年の春にコロナ下で突如大きな課題になり、私が主担当で対応した秋季入学への移行の問題に関連して書いたものです。秋季入学への移行の件で私が強く意識し、また同僚・部下にも言い続けたのは、こういう大きな問題を何となくの議論にしておけないということでした。何となくではなく、どういうメリットや課題があるのかをできる限り理解した上で考えていただく必要がある。そのために正確な情報を積極的に出す。後になって、実はこんな問題もあったのか、というようなことは何としても避けなければいけないと考えたからです。

率直に言って、周囲では、私よりはるかに力をお持ちの方々の中にも、様々なご意見、お考えがありました。ですが、21 ページに書いたような姿勢をぐらぐらせずに貫くことができたのは、私が局長として腹を決め、少なくとも実働部隊に対しては実質的に指揮をすることができたからだと思います。

続きです。高大接続改革の時期に東大で副学長をしておられた石井洋二郎先生が著書で、英語民間資格・検定試験の問題についての箇所でご書かれています。「『言うべき人が、言うべきことを、言うべきときに言う』ことがいかに大事か」、「『あの人、あのことを、あのときに言っていれば』一連の混乱はここまで深刻な状況には至らなかったであろうし、その後の成り行きも大きく変わったであろう」。私も、何の件についてということではなく、あくまで一般論として言わせていただきますが、言うべき人が、言うべきことを、言うべきときに言うことの大切さ、同時に難しさ、そして言うには覚悟と力が必要だということ、強く感じています。

もう一つ、2 枚続きの原稿です。昨年 7 月の検討会議提言について書いたものです。前半の 23 ページは提言の要点です。今後の意思決定にあたり留意する必要がある観点として、①議論の透明性、データやエビデンスの重視、多様な意見聴取、②実現可能性の確認、工程の柔軟な見直し、③高等学校教育から大学教育までの全体を視野に入れた検討の必要性が挙げられています。後半に、表現を丸めたり抑えたりしているところもありますが、こう書いています、「これらはどれも極めて当たり前のことだ」。私も高大接続及び高等教育局担当の審議官なんて仕事も半年くらいやっていますし、その前後にも、飛び飛びではありますが、高大接続改革の動きを時には近くから、時には遠くから見える立場にいました。それだけに危機感も強かったですし、その時々状況下でできる限り善処したつも

りですが、結局、外から見れば一体何をして
いたんだと映るでしょうし、私を含め文科省
の事務方はこんな当たり前のことも分からな
かったのかと阿呆に見えることでしょう。そ
のご批判は後世のため、後輩たちのためにも、
恥として受けねばならないと思います。胸に
たまる思い。昔、古文で習った徒然草に「お
ぼしき事言はぬは腹ふくるるわざなれば」と
いう一節がありましたが、今はそんな心境で
しょうか。

これはあくまで一つのご参考です。文部省
の5年先輩でいらした岡本薫さんが2003年
に出された著書でこんなことを書かれていま
す。私は昭和60年、1985年に文部省に入り、
1年目から担当したのが、当時、中曽根総理
の下で内閣に置かれていた臨時教育審議会へ
の対応でした。そのときにも、いわゆる教育
の自由化をめぐる激しい議論もありましたし、
大学や大学入学者選抜についての議論もあり
ました。その後40年近くこの世界にいます
が、教育をめぐる議論の状況や傾向は、岡本
さんが嘆きながら指摘された状況から今もあ
まり変わっていないように感じます。

例えば「目的・手段や原因・結果に関する
論理的な思考ができていない」、「全ての子ども
に必要なことと、それ以外のことが区別され
ていない」。どうでしょうか。こういう教育
をめぐる大きな状況を変えていかないとい
けないんだろうなと思います。そのためには、
教育に関する研究もとても大事だし、教育の
現場や政策ともお互いの信頼関係や敬意によ
って、より強固なつながりをつくっていく必
要があるでしょう。そして、より説得力のある
議論を提供していけるようにする必要があります
なと感じます。

以上、あくまでも私から見えた範囲に限っ
てのことになりますが、概略を振り返ってみ
ました。ほんの少しでも何かの参考になれば
いいんですが、ならなかったらごめんなさ
い。

最後のスライドはおまけです。せっかく大
学の教育関係のフォーラムでお話しさせてい
ただくので、ひょっとすると、お聞きいただ
いている方や関係者の中に、文科省の仕事に
関心をお持ちの方がおられるかもしれませ
ん。私がどういう気持ちでこの仕事をしてき
たか。もちろん短い言葉で言えるようなもの
ではありませんが、その一端を、実は明日
19日に出る「教職研修」という月刊誌に書
かせていただきました。発売日前ですが、そ
の一部をこの場でご紹介することについては
編集長のご了解を得ています。恥ずかしいの
で声に出しては読みません。どうか黙読して
ください。もう一つ、資料はありませんが、
先月ある新聞に、かつて特捜のエース、鬼検
事と呼ばれ、法務省の官房長をしておられた
平成3年、1991年に突然、これからは福祉
の道へ行く、ボランティアを広めると言って
退職され、さわやか福祉財団をつくられた堀
田力さんのお話が出ていました。こんなこと
をおっしゃっています。「いわゆる出世コー
スに乗っていたので、『訳が分からん』と思
われた方が多かったようです。でも、私とし
てはもう限界、自分が自分らしくあるために
は辞めるしかない、このまま続けていたら腐
ってしまう、そんな切実な気持ちでした。」

「悪い政治家をとっ捕まえたいと思っている
人間が、官房長時代にはおかしい陳情を言っ
てくる政治家にも『おかしい』とはっきり言
えない。これ以上は無理。辞めて今後の日本
に必要なボランティアの普及に次の生きがい
を見いだそうと考えたのです。」そうなん
ですね。自分が自分らしくあるためには辞める
しかない、このままいたら腐ってしまう。そ
う思われたそうです。私は、途中で学校に飛
び出したりもしましたが、結局、堀田さんよ
りも長くこの世界にいます。今でも自分が自
分らしくあるだろうか、腐ってしまっていない
だろうかと、そういうことも考えます。
もちろん、腐ってたまるかと自分では思って

います。

教員もそうですが，国家公務員を志す若者が減っていることも課題になっています。忙しさももちろんどうにかしないといけないですが，一番の問題は時間ではないというのが私の意見です。例えば震災が起きて被災した方々を救うために徹夜になったからといって不平を言う人がいるでしょうか。必要だと自分で納得できれば，きつくても踏ん張れます。心が折れそうになるのは，一体誰のためにこんなきつい苦しい思いをしているのかが自分で納得，得心できないときではないかと私は感じます。教員もそうですが，公のために仕事をする，それは本来，とても大事なことです。志を持った人に来ていただきたいです。志を持ってそういう世界に入ってくる若い人たちが，やりがいを感じながら，よい仕事ができるように，我々もさらに努力していかなくてはいけないと強く感じています。蛇足が長くなりました。

以上で私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

久保沙織准教授（司会）：

浅田先生，ありがとうございました。冒頭で申しあげましたとおり，ご質問等につきましては，来場参加の皆様はお手元の QR コードから，オンライン参加の皆様はオンライン参加者用ページよりウェブ上での入力をお願いいたします。

令和4年（2022年）5月18日
第36回東北大学高等教育フォーラム

教育の現場と政策と研究と
ーやはり「教育は現場が命」だー



浅田 和伸
国立教育政策研究所

1

<主な内容>

1. 大学入試のあり方に関する検討会議
2. 高大接続改革の議論・検討の流れ
3. 教育の現場と政策と研究と
4. 当たり前のことを、当たり前……



浅田和伸 文部科学省 国立教育政策研究所長（令和3年1月より）

- ・香川県豊島出身 …… 今年には3年に1度の「神戸国際芸術祭」
- ・東大文学部心理學専修課程 …… 同級生に香元通氏も
- ・昭和60（1985）年文部省へ／三重県教委課長、公立中学校長、
- ・内閣府教育再生実行会議担当室長、文科省大臣官房審議官、
- ・大学入試センター理事長、文部科学省総合教育政策局長等
- ・著書：『教育は現場が命だ 文科省出身の中学校長日誌』（悠光堂）
- 『子どもといっしょに成長しよう 3日で乳が染になる
- 「魂」の本』（ジャース教育新社）

2

本シンポジウムの案内から

今回のフォーラムは、その「対話」を教育行政と大学入試の現場で行おうという試みである。現場感覚では意義が見いだせなかったり、実現不可能と思われるような教育政策が実施されることがある。それは行政が現場の実情を理解していないことが原因なのか、それとも現場が政策の意図をつかみ損ねているのか。

基調講演者の浅田和伸氏は文部科学省のキャリア官僚から品川区の公立中学校に転身した経歴を持つ。（中略）文部科学省に戻った後、大臣官房審議官を経て大学入試の現場も経験した。高大接続改革で揺れる時期に、独立行政法人大学入試センター理事という現場の立場から、国語・数学の記述式問題の導入や英語民間試験の利用の実現という難題に正面から立ち向かった。（中略）もう1人の基調講演者東北大学の倉元直樹氏とは大学の同期の関係にある。互いに付度なしの深い「対話」を期待したい。

3

現場と政策と研究と

私が学校現場で仕事をしたいと考えた理由の一つは、学校現場と教育行政、教育界と他の世界がつながっていないという問題意識だから、こういう形で発信の機会をいただけるのはありがたい。

自分は、学校現場と教育行政が上手くつながっていない、文科省が学校現場から頼りにされていないという問題意識を持って学校現場にきた。同様に教育省の研究も学校現場とつながっていないのではないか。学校現場から頼りにされていないのではないかな。

ある教育関係の情報誌から近況を聞かれ、文科省への注文として「『学校は忙しい』と分かったようなことを言いながらどんどん仕事を増やさないでほしい」とコメントした。学校の仕事量全体を見る人間が文科省の中にいるべきだ、というのが私の意見だ。

……『教育は現場が命だ 文科省出身の中学校長日誌』（悠光堂）No.1、No.11、No.59

4

大学入試改革について

教育再生実行会議第4次提言（『高等教育と大学入試の今後のあり方について』（平成28年12月11日））

大学入試改革は、高等学校教育を基盤として、各大学のアドミッションポリシーの下、能力・態度・適性を基盤に、大学での教育に円滑につなげていくことが必要。このため、大学入試のみを問題にするのではなく、高等学校教育、大学教育、大学入試のあり方について、一体的な改革を行う必要がある。

大学入試改革は、各大学のアドミッションポリシーに基づき、能力・態度・適性を基盤に、大学での教育に円滑につなげていくことが必要。このため、大学入試のみを問題にするのではなく、高等学校教育、大学教育、大学入試のあり方について、一体的な改革を行う必要がある。

文科科学省における主な取組

- 中央教育審議会審議（平成26年12月）、高大接続システム改革会議最終報告（平成28年3月）等に基づき、大学入試改革の改革を推進
- 受験生の「学力の3要素」について、**知識・技能・態度・適性**の4要素に改定
- 大学入試改革の方向性（平成29年7月13日）
- 知識・技能を十分習得しているかの評価を行う「マウスタート試験」の導入
- 英語の「読む」「書く」「話す」「聞く」の4技能を適切に評価するため、英語テストの活用を推進
- 英語の「読む」「書く」「話す」「聞く」の4技能を適切に評価するため、英語テストの活用を推進
- 英語の「読む」「書く」「話す」「聞く」の4技能を適切に評価するため、英語テストの活用を推進

マウスタート試験の工夫・改善

- ① 知識・技能を十分習得しているかの評価を行う「マウスタート試験」の導入
- ② 英語の「読む」「書く」「話す」「聞く」の4技能を適切に評価するため、英語テストの活用を推進
- ③ 英語の「読む」「書く」「話す」「聞く」の4技能を適切に評価するため、英語テストの活用を推進

令和元年11月・12月 安心・定着できる環境づくりの準備が十分でないことから、共通テストにおける英語成績評価システム「記述式問題の導入」を推進

大学入試のあり方に関する検討会議

令和元年12月27日 総論 ●英語・技能評価や記述式問題導入の大学入試のあり方について議論を継続

令和3年7月8日 提議 ●記述式問題の導入や英語能力の向上について、共通テストの活用も導入するのではなく、各大学が個別に試みを行い、その成果を共有

※ 令和3年7月30日付で、大学入試改革実施方針が正式に決定

5

「大学入試のあり方に関する検討会議」提議（令和3年7月8日） 第1章 大学入試改革のあり方と改善の方向性

1. 大学入試改革のあり方

提議① 大学入試改革のあり方

- ・各大学が主体的に実施 …… 一定のルールをガイドラインとして定めることも重要
- ・卒業認定・学位授与の方針、教育課程編成、実施の方針と連動した入学受け入れの方針の策定の必要性
- ・提議② 提議③ 提議④ 提議⑤ 提議⑥ 提議⑦ 提議⑧ 提議⑨ 提議⑩ 提議⑪ 提議⑫ 提議⑬ 提議⑭ 提議⑮ 提議⑯ 提議⑰ 提議⑱ 提議⑲ 提議⑳ 提議㉑ 提議㉒ 提議㉓ 提議㉔ 提議㉕ 提議㉖ 提議㉗ 提議㉘ 提議㉙ 提議㉚ 提議㉛ 提議㉜ 提議㉝ 提議㉞ 提議㉟ 提議㊱ 提議㊲ 提議㊳ 提議㊴ 提議㊵ 提議㊶ 提議㊷ 提議㊸ 提議㊹ 提議㊺ 提議㊻ 提議㊼ 提議㊽ 提議㊾ 提議㊿

2. これまでの議論を踏まえた大学入試改革のあり方

提議① 提議② 提議③ 提議④ 提議⑤ 提議⑥ 提議⑦ 提議⑧ 提議⑨ 提議⑩ 提議⑪ 提議⑫ 提議⑬ 提議⑭ 提議⑮ 提議⑯ 提議⑰ 提議⑱ 提議⑲ 提議⑳ 提議㉑ 提議㉒ 提議㉓ 提議㉔ 提議㉕ 提議㉖ 提議㉗ 提議㉘ 提議㉙ 提議㉚ 提議㉛ 提議㉜ 提議㉝ 提議㉞ 提議㉟ 提議㊱ 提議㊲ 提議㊳ 提議㊴ 提議㊵ 提議㊶ 提議㊷ 提議㊸ 提議㊹ 提議㊺ 提議㊻ 提議㊼ 提議㊽ 提議㊾ 提議㊿

3. コロナ禍での大学入試改革をめぐる状況変化

提議① 提議② 提議③ 提議④ 提議⑤ 提議⑥ 提議⑦ 提議⑧ 提議⑨ 提議⑩ 提議⑪ 提議⑫ 提議⑬ 提議⑭ 提議⑮ 提議⑯ 提議⑰ 提議⑱ 提議⑲ 提議⑳ 提議㉑ 提議㉒ 提議㉓ 提議㉔ 提議㉕ 提議㉖ 提議㉗ 提議㉘ 提議㉙ 提議㉚ 提議㉛ 提議㉜ 提議㉝ 提議㉞ 提議㉟ 提議㊱ 提議㊲ 提議㊳ 提議㊴ 提議㊵ 提議㊶ 提議㊷ 提議㊸ 提議㊹ 提議㊺ 提議㊻ 提議㊼ 提議㊽ 提議㊾ 提議㊿

4. 入試システム全体に目配りした統合的な検討の重要性

提議① 提議② 提議③ 提議④ 提議⑤ 提議⑥ 提議⑦ 提議⑧ 提議⑨ 提議⑩ 提議⑪ 提議⑫ 提議⑬ 提議⑭ 提議⑮ 提議⑯ 提議⑰ 提議⑱ 提議⑲ 提議⑳ 提議㉑ 提議㉒ 提議㉓ 提議㉔ 提議㉕ 提議㉖ 提議㉗ 提議㉘ 提議㉙ 提議㉚ 提議㉛ 提議㉜ 提議㉝ 提議㉞ 提議㉟ 提議㊱ 提議㊲ 提議㊳ 提議㊴ 提議㊵ 提議㊶ 提議㊷ 提議㊸ 提議㊹ 提議㊺ 提議㊻ 提議㊼ 提議㊽ 提議㊾ 提議㊿

6

基調公演 浅田和伸（国立教育政策研究所）

[illegible][illegible]

	文科省等	自民党	茂田
2012 (H24)	〔野田内閣〕 08.28 <u>中央教育審議会</u>に高大接続改革諮問 〈諮問理由説明より〉 本来、大学入学者選抜も教育の一プロセスであり、児童・生徒・学生がこれからの時代に必要とされる力をしっかりと身に付けることを後押しするものであるべきです。 →09～高大接続特別会 12〔第二次安倍内閣〕	10教育再生実行本部発足 11中間とりまとめ	（3月まで公立中学校長） 08.01 高等教育企画課長 （11、3次大学不認可問題）

	文科省等	自民党	茂田
2013 (H25)	01教育再生実行会議発足 『第1回会議大臣発言』 当面の審議内容については、まず1番目にいじめ問題への対応、2番目に教育委員会の抜本的な見直し、3番目に大学のあり方の抜本的な見直し、4番目にグローバル化に対応した教育などについて検討を進めていた。その後、5番目に6・3・3・4のあり方、6番目に<u>大学入学試験のあり方</u>についても検討していたと発言していると考えております。 ― ① 第一次大提言（いじめ）、04 第二次大提言（教育委員会制度）、 ― 第三次大提言（大学教育、グローバル化）（H24.67 第2次大提言（第9号）） 06～10 第9～14回で「<u>高大接続・大学入試の在り方に関する討議</u>」 （第9号で<u>中教審特別部会</u>の審議状況等を説明） 10第四次提言（高大接続、大学入学者選抜） 『<u>新たな試験（達成度テスト（発展レベル）（抜粋）</u>）を導入」 『外国語、職業分野等の<u>外部検定試験の活用を検討</u>』 ⇒再び中教審へ（11～高大接続特別部会再開）	01新たな教育再生 実行本部 04第一次提言 （<u>英語教育の抜本的 改善等</u>） 05第二次提言 （<u>大学・入試の抜 本改善等</u>）	高等教育企画課長

	文科省等	茂田
2014 (H26)	(2013.11再開後の高大接続特別部会では、委員から「教育再生実行会議が言ってきたことに全面的に従わなければならないのか」との発言も) 12 中教審高大接続改革答申 「大学入試センター試験を廃止し（中略）<u>新テスト</u>、大学入学希望者学力評価テスト（仮称）を<u>新に実施する</u>」 （新テストの）「解答方式については（中略）<u>記述式を導入する</u>」 （新テストの）「特に英語については、四技能を総合的に評価できる問題の出題（例えば記述式問題など）や民間の資格・検定試験の活用により（中略）バランスよく評価する」 ⇒2015年1月「高大接続改革実行プラン」へ	高等教育企画課長 07大臣官房総務課長

	文科省等	浅田
2015 (H27)	〇1 文科省「<u>高大接続改革実行プラン</u>」（大臣決定） 「<u>高大接続改革を着実に実行する観点から（中略）重点施策とスケジュールを明示し、体系的かつ集中的な施策展開を図ることを目的として（中略）策定</u>」「<u>大学入学者希望学力評価テスト（仮称）</u>」については平成32年度からの実施を目指し、専門家の知見を活用しつつ、一体的な検討を行う。」「<u>新テストに関する専門家会議を立ち上げ（中略）「教科型」「含教科・科目型」「総合型」等の具体的な枠組み、（中略）記述式問題の導入方法、CBT方式の導入方法（中略）などについて検討を行い、結論を得る。</u>【平成27年中を目途に専門家会議の検討結果を取りまとめる】」 →03～2016.03高大接続システム改革会議	大臣官房総務課長 08内閣官庁教育再生 実行会議担当室長

基調公演 浅田和伸（国立教育政策研究所）

文科省等		浅田
2016 (H28)	03高次接続システム改革会議最終報告 「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を創設し、各大学の利活用を促進する。 （新テストに）「記述式問題を導入することが有効」／「記述式問題の導入に当たっては、作問・採点・実施方法等について乗り越えるべき課題も存在していることから、今後、記述式導入の具体化に向けて、以下のような論点ごとに実証的・専門的な検討を丁寧に進める。」 （新テストについて）「英語については、「書くこと」や「話すこと」を含む四技能について（中略）評価する。また、民間との連携の在り方を検討する」 →05～「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」検討・準備グループ	04内閣官房実行会議担当室長に大臣官房審議官（高大接続及び初等中等教育局担当）を併任 05第九次提言 06大臣官房審議官（高大接続及び初等中等教育局担当）のみに 12大臣官房審議官（高大接続及び初等教育局担当）

13

文科省等		自民党	浅田
2017 (H29)	05「実施方針（案）」パブコメ 07.13文科省「大学入学共通テスト実施方針」 「テストの名称は「大学入学共通テスト」とする」 「実施開始年度：平成32年度（平成33年度入学者選抜）」 「記述式問題を出題する」 「（英語の）4技能を適切に評価するため、共通テストの枠組みにおいて、現に民間事業者等により広く実施され、一定の評価が定着している資格・検定試験を活用する」「資格検定試験のうち（中略）必要な水準及び要件を満たしているものを大学入試センターが認定」 11大学入試センター「大学入試英語成績提供システム参加要件」 11大学入学共通テスト試行調査（プレテスト）。（第1回）	06教育再生実行本部提言検証特別部会 英語教育に係る検討状況 「『学ぶ』英語から『使える』英語へ～民間の力を活用し、素早くコミュニケーションできる英語教育の実現～」	大臣官房審議官（高大接続及び高等教育局担当） 07.11大学入試センター理事

14

文科省等		自民党	浅田
2018 (H30)	08文科省「大学入学共通テスト実施方針（追加）」策定 11大学入学共通テスト試行調査（プレテスト）。（第2回）	06教育再生実行本部提言検証特別部会 英語教育の議論のとりまとめ 「『日本型英語』から『グローバルイングリッシュ』へ～民間の力を活用した英語教育の実現～」	大学入試センター理事

15

文科省等		浅田
2019 (R1)	06 文科省「大学入学共通テスト実施大綱」「大学入試英語成績提供システム運営大綱」策定 09〔共生田文科科学大臣〕 11.01英語四技能評価のための民間資格・検定試験導入延期 12.17大学入学共通テストにおける記述式問題導入見送り	01文科省戦略官（法科大学院に関する法改正を担当（6月成立）） 07総合教育政策局長
2020 (R3)	01大学入学共通テスト（初回）実施 07 大学入試のあり方に関する検討会議提言	01国立教育政策研究所長

16

「検討会議」提言（2021年7月）	
●国における大学入学選抜に係る意思決定に当たっては、大学・高等学校関係者との協議を踏まえることを基本とし、実証的なデータやエビデンスに基づき、専門的・技術的な知見や幅広い関係者、当事者の意見に耳を傾けつつ、見直しに伴う負担と得られる成果の比較衡量も加味した慎重な検討を行うことが重要である。その際、（中略）詳細な実態調査や、関連の研究成果等の把握を行い、それらを踏まえること、施策決定後にも実証的なデータ等に基づいた改善を行えるよう、あらかじめ施策の成果検証の計画を含めた検討を行うことも重要である。また、個別の試験実務を踏まえた議論を行う場合は、機密保持の必要性から一定の制約は生じ得るものの、全体の検討過程については可能な限り透明性を確保し、国民の理解を得ながら結論を導き出すことが重要である。 ●意思決定に当たっては、理念や結論が過度に先行し、実務的な課題の解決に向けた検討が不十分にならないようにする必要がある。的確な現状分析に基づいて改革の理念や方向性を定めた上で検討を進めるとともに、実務的な実現可能性を常に確認し、課題の解消が難しいと判断される場合は工程を見直したり、他の方策の適否を検討したり、必要な場合は理念まで再度通って検討したりするなど柔軟な姿勢で臨む必要がある。	

17

山本廣基前大学入試センター理事長（令和4年5月2日朝日新聞19面）	
2013年6月6日の朝です。新聞を見るなり、何だこれかと思いました。横見出しで「ベーンと「センター試験廃止へ」。職員に聞いても、全然知らないと言います。 〔注：日本経済新聞が教育再生実行会議の検討内容を報じた記事〕 こんなの、どうやってやるのかと思っていました。 萩生田大臣と国会内で会い、民間試験活用について、ちゃんとできるか聞かれました。（中略） 記述式も、見送り発表の前に、自己採点の結果がセンターによる採点とぶれるなどの問題点を伝えていました。〔注：令和元年（2019年）「見送り」発表前〕 民間試験と記述式を見送ったのは英断だったと思います。理想は描いても実現できるかという検証ができていなかった。制度設計の専門家や方針に批判的な研究者の声を軽んじていた。	

18

基調公演 浅田和伸（国立教育政策研究所）

「文科省日誌」2013年9月16日号（高等教育企画課長）

（8月）23日（中略）午後、教育再生実行会議。今回も高大接続、大学入試の在り方について。一部の記者は「大胆な」「抜本的な」改革を煽りながら、このテーマは、拙速を避け丁寧に議論するのが子供達への責任だと思う。

……『週刊教育資料』No1267＝2013年9月16日号（教育公論社）連載
「前中学校長浅田課長の文科省日誌」（第53回）

19

「教職研修」2015年4月号（総務課長）

「一所懸命」を応援する高大接続改革

昨年（2014年）末に史教審が「高大接続」改革の答申をまとめた。これは単なる入試の手直しではない。高校教育、大学教育、大学入学者選抜の三者を一体的に改革しようというものだ。（中略）二度とない青春の時期を、これからの時代に本当に必要な力を身につけるための勉強も、また他のことも、両方ともちゃんと伸ばせる時期にしてやろうよ、というのが今回の高大接続改革のねらいだと私は考えている。（中略）もちろん、影響が大きいだけに、十分な検討と準備が必要だ。「一か八か」で突っ込むことはできない。文科省も関係各界の英知を集めて必死でやらなければ実現できないだろう。

……『教職研修』2015年4月号（教育開発研究所）連載「校長はホネで教育を語ろう」（第34回）

20

「月刊プリンシパル」2020年8月号（総合教育政策局長）1/2

言うべきことを言うべきときに言う

「秋季入学への移行」の件も担当です。（中略）当初から私が意識したのは、こういう大事な問題を「何となく」の議論にはいけないということです。何となく賛成とか反対とかではなく、どういうメリットや課題があるのかをできる限り理解した上で考えていただく必要があります。そのために正確な情報を積極的に出すよう努めました。後になって「実はこんな問題もあったのか」というようなことにしたくなかったからです。それは担当として責任を果たしたことになるのではないかと考えたからです。（中略）

（続く）

21

「月刊プリンシパル」2020年8月号（総合教育政策局長）2/2

（続き）

昨年まで東大で理事・副学長を務められた石井洋二郎氏が今年出された『危機に立つ東大』（ちくま新書）という本にこんな記載があります。

「『言うべき人が、言うべきことを、言うべきときに言う』ことがいかに大事か。」「『あの人、あのことを、あのときに言っていれば』一連の混乱はここまで深刻な状況には至らなかったであろうし、その後の成り行きも大きく変わったであろう」。

取り上げられている大学入試の問題などは、私も近い場所にいるので、複雑な思いがあります。

……『月刊プリンシパル』2020年8月号（学事出版）連載「教育情報ななめ読み」（第10回）

22

「文科省日誌」2021年8月2・9日号（国研所長）（1/2）

愚かに見えるだろうな

7月8日、「大学入試のあり方に関する検討会議」が1年半の審議を基に取りまとめた「提言」を萩生田大臣に提出した。

「提言」では、大学入学者選抜に求められる原則として、①当該大学での学修・卒業に必要な能力・適性等の判定、②受験機会・選抜方法における公平性・公正性の確保、③高等学校教育と大学教育を接続する教育の一環としての実施の3点を改めて整理・確認している。

その上で、これまでの経緯の検討から得られる教訓を踏まえ、今後の大学入学者選抜に係る意思決定に当たり留意する必要がある観点として、①議論の透明性、データやエビデンスの重視、多様な意見聴取、②実現可能性の確認、工程の柔軟な見直し、③高等学校教育から大学教育までの全体を視野に入れた検討の必要性の3点を挙げる。

（続く）

23

「文科省日誌」2021年8月2・9日号（国研所長）（2/2）

（続き）

これらはどれも極めて当たり前のことだ。例えば原則の③は、議論の始点となった平成24年8月下旬の中央教育審議会への諮問の際にも明確に示した。私はその月から高等教育企画課長に兼任し、ギリギリでこの諮問に関わることができたので、よく覚えている。

一連の高大接続改革に、飛び飛びにはあるが関わりを持ってきた身としては、その時々状況下でできる限り善処したつもりだが、外から見れば、文科省の事務方はこんなことも分からなかったのかと阿呆に見えるだろう。胸に溜まる思いが無いではないが、恨むべきは自分の無力か。

……『週刊教育資料』No1622＝2021年8月2・9日号（教育公論社）連載
「元中学校長浅田所長の文科省日誌」（第46回）

24

〈参考〉 日本で教育の議論がかみ合わない理由（岡本薫さん）

①目的・手段や原因・結果に関する論理的な思考ができていない

②全ての子供に必要なことと、それ以外のことが区別されていない

③皆が同じ気持ちを共有できるはずだという幻想

④何でも心や意識のせいにする など

……『教育論議を「かみ合わせる」ための35のカギ』（岡本薫著、明治図書出版）

25

〈最近の原稿から……〉 誰のために働くか

いつの時代かと采られるかもしれないが、産廃の棄て場にされた僻地の離島で、「役人は強い者（もん）の味方じゃ」と嫌っていた父の子だった私は、仮に自分が役所にいる間にどうしても止めなくてはいけない危機的な事態が起されば、たとえ薄紙程度の力しかなくても、異を唱えられる立場にいるなら体を張らねばと覚悟していた。何度かはそれに少し類することもしてきたつもりだが、元々念頭にあったのは遙かに重大な場面のことだ。

ロシアによるウクライナ侵攻のニュースは、いったん大きな力が動き出すとどうにも止められなくなる戦争の現実を突き付ける。

半藤一利氏は『15歳の東京大空襲』（ちくまプリマー新書）で、中学生の時に空襲後の悲惨な焼け跡に立ち、これからは「絶対」という言葉を使うまいと誓い、以後、口にも筆にもしたことがないと言っている。確かに、「絶対に……」などと言えるのは、ある意味、気楽な状況だからなのかもしれない。

「何よりも人間を尊重し、生きていることの重みをいつくしむこと、それ以外に戦争をとめる最良の行動はありません」とも言う。

ウクライナも、また他の地域での武力紛争も、決して対岸の火事と考えるべきでない。

……『教職研修』2022年6月号 「新・教育直言」（第32回）より

26

基調講演 2：大学入試のコンプライアンス ——未履修，入試ミス，そして，コロナ対策——

東北大学高度教養教育・学生支援機構

倉元 直樹 教授

〔講師紹介〕

久保沙織准教授（司会）：

続いて，基調講演 2 に移ります。「大学入試のコンプライアンス——未履修，入試ミス，そして，コロナ対策——」と題して，東北大学教授，倉元直樹先生，よろしくお願いいたします。

倉元直樹教授：

ご紹介にあずかりました倉元でございます。よろしくお願いいたします。

まず，自分の話を開始する前に，浅田さんの，・・・浅田さんと呼ばせていただきますけれども，・・・お話を伺って，やっぱり若いときに，元気なときに，先のことも考えずにいろんな時間を共有した・・・正直そんなに親しかったわけでもないと思うんですけれども・・・仲間はありがたいなと思った次第です。さらに私自身は，「お前はそんな『研究者』と呼ばれるようなことやっているのか」と言われる向きもあろうかと思いますが，研究者，学者の端くれとしては，言いたいことが思うように言える立場で気楽に來たんだなあ，ということを思った次第です。同じ年でありながら，髪の毛の色にそれが出ているのかもしれない。

一つだけ，浅田さんが，本来，正確を旨とするべきご発言の中で，不正確だなと思ったことがございますので，訂正させていただきます。浅田さんとは学部ではなく，教養時代の同級生だったのですが，同期の中で一番著名なのは，当然，私ではございません。それは，浅田さん，と言いたいところですが，在学当時



にあるメジャーなスポーツで日本代表に選出された同期の仲間がおりまして，彼は，ほぼ毎日，テレビに出ております。

東北大学高等教育フォーラム

それでは話を始めさせていただきます。

「大学入試のコンプライアンス——未履修，入試ミス，そして，コロナ対策——」とつけました。こんな構成でお話をさせていただく予定でございます。最初に，基調講演という立場でありながら企画者の一人でもありますので，フォーラムに関してお話をさせていただこうと思います。総長のご挨拶の中にもありましたように足かけ 19 年にわたって実施をしてきているところですが，様々なテーマのくくりがあったなと感じております。

最初は，大学教育へのつながりの話を取り上げていたのですが，正直，それほど参加者数が増えずにございました。その後，直接，大学入試を取り上げることにした時期がございまして，そのときから，かなり多くの方に参加していただけるようになったかと思います。資料にはアクシデント対応等と書いてありま

すけれども、そういった話は、ちょうど震災があった時期ですね。それから、高大接続改革をテーマにしてやってきたのですが、また、今、一つ転換期かなと思っています。なかなか定まてはいないのですが、その時その時のテーマに応じて話を組み立ててきたように思います。

昨年度から、国立大学アドミッションミッションセンター連絡会議との共催が始まりました。実は、先ほど平野大学入試室長にご挨拶をいただきましたが、これは国立大学アドミッションセンター連絡会議としてのご来賓なんですね。フォーラムは基本的には現場の中で高校と大学の話を取り上げてきたのですが、昨年度から文部科学省からご来賓をいただけるようになってきた。これは改めて新しいきっかけかな、ということ考えた次第です。つまり、大学入試の話を考えるときには、本来は教育行政の話というのは抜きにはできないはず。今まで取り上げてこなかったのですが、これをきっかけに新たなフェーズに入っていければ、ということを目指しました。

わが国における大学入学者選抜制度の構造

昨年の秋、先ほど浅田さんがお話しされたとおりの経緯ですが、・・・「気が弱い」というのは知らなかったので申し訳なかったのですが、・・・正直、よくこの話を受けてくれたな、と思いました。そのときに、やはり、未履修問題について改めて考えたいと思いました。未履修問題については後でまた詳しく触れますけれども、もう一つ、この話を組み立てる軸になるのがコンプライアンスという概念じゃないかなということを書いて、今日の話の構想した次第でございます。

最初に、これは意外と大事なことで私は思っています。資料には、「日本の大学入学者選抜制度の構造」と書いてあります。これ、世界的には大学入試ということばそのものが

違和感を与えるような表現でございまして、というのは、必ずしも入学者選抜というのは試験によって成立しているというわけではないということです。ただ、大学入試ということばに端的に表れているように、日本の大学入学者選抜は試験によって成立をするというのが基本的な常識でございました。過去形です。現在、いわゆる推薦入学・・・ことばが変わりましたね、学校推薦型選抜ですか・・・、それから総合型選抜を合わせると、私立大学では5割を超えて久しい状況ですので、必ずしも試験という方法によって選抜が行われているわけではないということで、必ずしも当てはまらない状況ではないかと思えます。

ただ、もう一つ大事なことは、個別の大学、これが入学許可の主体、責任と権限を持つということです。すなわち、最終的に「この受験生を入学させなさい」というようなことを他所から言われてそうする、ということはありません。個別の大学がそれぞれ自分のところで教育する学生を選ぶのだ、ということが、非常に大事な基本的な日本の入学者選抜制度の構造になっているわけです。

それでは、教育行政との関係はどうかというと、基本的には大学入学者選抜実施要項という、毎年、高等教育局長名で出される通達を通じ行政指導を受けているということになるかと思います。

国立大学の場合は、その間に一般社団法人国立大学協会というのが挟まります。一般社団法人ということで、改めて見てみると公益法人でもないんだな、という組織なのですが、大学入学者選抜実施要項には「国立大学の入学者選抜の日程等は、国立大学協会の定める実施要領に基づき実施される」と書いてあります。前期日程試験は2月25、26日ですか、後期日程試験は3月12日という、この日程は非常に重要でして、これによって受験生が混乱することがないように配慮されていると

ということですね。ただ、それ以外にも方針がありまして、その方針は各大学の意思決定に影響を与えるということなので、国立大学としては国立大学協会の方針に沿って入試を実施することになるかと思います。ですので、大学入試の実施というのは行政と個別大学の共同作業ということが言えると思います。

これは非常に大事な役割分担で、基本的には、だからこそ上手く回っているというところがあるのではないかと思います。それはコロナ禍の対策というところで見ることができるというように考えています。後でお話をいたします。

コンプライアンスと大学入試

さて、話は変わりまして、コンプライアンスという概念ですけれども、自宅にありました古い広辞苑ですね、91年発行でしたが、これには載っておりませんでした。比較的最近に出てきたことばだと思います。企業や組織が法令や倫理といった社会的規範から逸脱することなく適切に事業を遂行すること、となっています。このことばは、・・・もし私が勘違いしているのでなければ、・・・2000年、2004年にある自動車会社が「リコール隠し」という、社会的に非常に注目を浴びた問題を起こしたことがきっかけになって広まったようです。ここから、実際に行われていることの内実が法律や規則に則っているか、ということに対して社会が注目するようになってきた、すなわち、「コンプライアンス」ということばに表されるような形で評価されるようになってきたのではないかな、という印象を持っています。ここで大事なことは、社会的規範といった概念が含まれていることで、コンプライアンスとはいわゆる四角四面な規則と同じではないんだろうと思います。ただ、そこで意識が非常に大きく変わってきたのかなと思います。

入試に関して言いますと、2001年に2つ

大きな入試ミス関連の問題が起こっております。ちょっと宣伝になってしまいますけれども、「東北大学大学入試研究シリーズ」の最初の刊ですね。『大学入試学』の誕生」というところに詳しく出ておりますので、ぜひ、ご覧いただければと思います。最近、コンプライアンス概念は、大学入試の関係者の中には意識として非常によく根づいていると思います。ここ最近では、2018年に作題ミスで大きな社会問題になり、そのほかに医学部の不正入試が大きな話題になりましたけれども、前者と後者は若干違うかなと思います。前者はあくまでもミスなんですね、意図しない間違い。後者は意図的なものが含まれているというような違いになるかと思うのですが、やはりこういうことはやってはいけないんだということです。ミスや不正があつてはいけないし、何か問題があったときにはきちんと情報を開示しなければいけない、という自覚が入試関係者には以前と比べると非常に強くあるように思います。

大学入試におけるコロナ対応の文化差

さて、話は戻って、コロナ禍の対応に見る日本型入試というところなんですけど、私が日本型大学入試、日本型入試とつけているのは、決してマイナスのイメージではありません。日本のやり方って、コロナの対応においてはある意味非常に良かったんじゃないかな、と個人的には思っているところです。

もう一度、入試に関して確認をしますと、最終的な責任と権限は個別大学にあります。文部科学省は緩やかな行政指導で入試を適正化するということをなさっています。さらに、近年になってコンプライアンスの意識が定着をしているということから、ある意味、規則、ないしは、これが正しいという社会的規範に反したことはできない、というのが現場の意識としてはっきりあるんだろうなと思います。

昨年、独立行政法人大学入試センターが毎

年行われているシンポジウム「COVID-19の災禍と世界の大学入試」というイベントが行われました。実は、私、これには非常に深く関わっておりまして、昨年行いましたフォーラム「検証 コロナ禍の下での大学入試」、そこにお集まりいただいた招待参加者という立場の先生方、各国の研究者に・・・これから出す本の原稿をいただいているんですが、・・・その方々にご協力いただいて実施したシンポジウムでございます。そこで、要は、各国の、日本だと令和3年度入試で行われたコロナに対する対策の特徴を見て取ることができたんですね。

例えば、アメリカ。アメリカは非常にコストを重視しています。場合によっては、大学入学者選抜自体を調整・・・というのは、今年は入試をやらないとか、あるいは、定員を極端に絞るとかということ・・・をやっていたようなんです。ヨーロッパですね、イギリスの例だったんですが、毎年行われているテストが中止になりました。もちろん、感染状況が日本と比べてどれくらい深刻か、という問題があるとは思いますが、例年と異なる選抜、日本流にいうと、テストの成績の代わりにいわゆる調査書に基づく選抜みたいなことをやったわけですね。実は、我々の同僚で、討議司会を担当する阿部先生がフランスに詳しいものですから、フランスを調べてもらったところ、イギリスとほぼ変わらないような状況でございました。

もう一つ、フィンランド、昨今話題に上っていますけれども、実はフィンランドの入試って、ヨーロッパに比べると日本に近いんですね。共通テストがあって個別試験がある、そういうタイプのものなんですけれども、フィンランドでは、一律に共通テストと個別試験の比率を決めているそうなんです。大学ごとにではないんですね。それを変更するということになって、それに対して受験生の方から様々な問題が提起されたというようなこと

でした。

韓国の事例も発表されたんですけども、ある意味日本よりも徹底した感染対策でした。日程の調整も行われました。例年どおりの日程からずらして試験を行うというようなことだったのですが、基本的には例年どおりの内容で実施するということでした。これも、私どもの同僚の南助教が中国に関して調べたのですが、中国もほぼ似たような感じであったということです。

では、我々日本はどうだったかというと、中国、韓国とほぼ同じような原則に則って実施をしたということになるのではないかと思います。先ほど平野室長のご挨拶の中にもありましたけれども、受験生がやっぱり第一である。受験生を慮る特別対応、これを実施した。もちろん、受ける側から見るといろいろ不具合、問題があったと思いますけれども、とにかく可能な限り例年どおりに受験をしてもらう形で対応したわけです。ただ、コロナですから、特別対応に例年以上の労力、コストがかかるわけです。そこは度外視する、特別だから、というところでございます。これは、おそらく受験生が入試に対して準備してくることを前提として、その努力をないがしろにするようなことがあってはいけない、というコンセンサスが社会の中にあるということなんだと思います。いろいろご意見はあるかもしれませんが、令和3年度入試に関して言うと、コロナの悪影響というのは、その結果、最小限に留められたのではないかと思います。

「成功の秘訣」と資料に書きましたけれども、やはり、文部科学省からの通達というのが、我々実施をする側としては非常に頼りになりました。具体的な話ですね。例えば、筆記試験を行うときに受験生同士どのくらい離れていればいいのか、あるいは、面接を行うときにどんな条件が必要なのか、換気はこうだ・・・、というようなことに関して、具体

的な数字が入って指示が下りてくるわけです。それを個別大学で適切に判断しろと言われると、これはちょっとどうにもならなかったと思います。我々、東北大学は結構恵まれておりまして、感染症の専門家もかなりおるんですけれども、各大学に揃っているわけではございません。また、専門家の中でも意見が食い違うということもあるわけです。そういったことまで、全て個別大学で判断しろ、と言われると、おそらく入試を実施できなかったと思うんですね。そこをきちんと指示していただいたことによって、最終的には大学入試によるクラスターの発生みたいなのは1件も起こらなかった。その上で、事件になるような、・・・ちょっと今年のことがあるので今の表現は語弊があったかもしれませんが、・・・問題は起こらなかった。背景には、受験生を大事にする、という共通の価値観と、やっぱり、コンプライアンスですね。決められた規則を守ると、感染を防止する、同時に試験の実施を問題なくやるというところの共通意識があったのかなと思います。

ただ、最後に一点ですね、現場的な感覚でいくと、正直、危なかったなと思います。それはコロナに対してというよりも、様々な普段とは違う負荷、制限を受けた中で入試をやらなければいけなかったということで、入試ミスリスクが大きかったんじゃないかと思います。ただ、今日はこのテーマではございませんので、簡単に触れるだけにしておきます。

令和4年度入試に見る「ほころび」の構図

それが、令和4年度入試ではちょっと連携にほころびが出てしまった。これは、実は、ここに書いてある前段がありまして、今の時期より少し後ぐらいに、毎年、大学入学者選抜実施要項が通達されるのですが、去年は来なかったんですね。6月になってから特別対応がその中に盛り込まれたことによって、そ

こまで準備していた日程に対してかなりの組み替えを余儀なくされた。例年ですと、6月の頭に「選抜要項」という、その年の入試の概要のようなものを出すのですが、それが遅れたことに加えて、様々な検討をしていかなければいけなかった。これは受験生にとって大変大きな不利益になったと思います。「いつになったら、今年の入試が分かるんだ？」というようなことになった。

極めつけは年末、入試本番を控えた時期に意思決定が二転三転したという話です。まずは、濃厚接触者、オミクロン株が流行したことによって、「オミクロン株関係者の受験は認めず追試験に」という通達が12月24日に来ました。これは現場的には相当困ったな、という話でありました。というのは、追試験って、やはり「例外」なんですよ。追試験があるからいいだろう、というような感じに見えてしまった。

実は、世間もそう受け取ったということで、この通達は3日で撤回になりました。ただ、ここで、「総理大臣からの指示があった」という報道がなされました。そして、今度は逆に振れます。受験なし、一切、共通テスト、個別試験もなしでも、最後で一人も残さず選抜を行います、という話が出た。できる範囲をはるかに超えているな、という印象でした。

表層的な問題点としてはタイミングです。「受験生保護の大原則」と呼んでいますが、最初の通達はそれに反しているというふうに世間は受け取った。追試験という特別対応に依存したことも問題だった。さらに、入試本番直前のタイミングに外部からの介入で朝令暮改になった。最後は特別措置が過度なところまで行ってしまった。「一人も残さず」と言われると、これはちょっとやりようがないんです、正直に言うと。そもそもアドミッション・ポリシーというものがあって、それに基づいて選抜をしていますので、際限なき特別措置を行うと、その他の受験生に対して不

公平になってしまう。

ただ、よく見ていただけると、最終的に文科省から来た通達は、・・・前のページにありましたが、・・・各大学の判断ですよ、今年限りの措置ですよ。そして、具体的に「こうしろ」ということは書いていなくて、まず相談窓口を設けてください。これは対応できる内容です。現実的なところに落としていただけたかなと思います。

表層的な問題点はこれなんですけど、構造的な問題点は、やはり文部科学省の外から「こうしなさい」という指示があったことだと思います。この発端が未履修問題にあるんじゃないか、というのは、これは私の仮説です。無意識のまま放置すると同じ問題が繰り返されるだろう、ということです。ある種の転換が必要な時期なんじゃないかと思うわけです。そして、この問題をひも解くキー概念がコンプライアンスということになるのではないかな。ということで、未履修問題の話をさせていただきます。

未履修問題とその背景

未履修問題というのは、後ろに資料がついていますが、高等学校等が学習指導要領では必履修の教科・科目を開講せずに生徒に履修させていなかった問題、のことです。2006年の10月、という時期が、多分、大事だと思います。必履修だった世界史、新科目の情報等で履修漏れが多発していて、卒業要件を満たせない、法的には卒業認定不能という高校生が多発した、という問題です。

発端は富山県だったんですが、非常に広範にわたって違反が発覚しました。むしろ、違反なしというのは例外だったぐらいのことですね。というのはどういうことかということ、長年の慣習だったからなんです。学習指導要領必履修、これとこれは履修するようになると決められていますが、それを大綱的に運用してきたことが問題だったのですね。非常に大胆

に無視をした例がなかったわけではないのですが、多くは1つ、2つの科目に履修漏れがあったといったところでした。これを厳格に当てはめると、おそらく私自身も高校卒業資格を問われてしまうのではないかな、というぐらひの話です。つまり、教育には文字通り「法令遵守」という意味でのコンプライアンスの概念が、このときにはなかったのではないかなと思う次第です。

ただ、どういう形で学校が運営されてきたかということ、以前から飽和状態だったわけなんです。それを現場の運用で調整していたんだけど、社会規範が変化した、ということですね。同じ行為が現場の運用ではなくて、コンプライアンス違反と捉えられるようになったんじゃないかな、ということです。

「資料2」は、日本教育心理学会という学会で行ったシンポジウムですが、当時、全く注目されなかった。50人ぐらいの参加者、・・・いや、そんなにいなかったですね。十数人ですね、・・・だったと思うんです。私はこれを「時間シンポ」と呼んでいました。2001年の話です。当時は「ゆとり教育 VS 学力低下」という構図の中で、学校に時間の余裕がない、もう溢れてしまっているのではないかな、という問題提起をした。要は、賄える以上のことを要求されてきたのは昔からだったのだと思います。

ただ、時代はコンプライアンスに流れていた。未履修問題の社会問題化というのは時代の必然であつたんだろうな、というふうに思います。果たして、高校は加害者だったのか、被害者だったのか。これは、後でまた触れたいと思います。

未履修問題の構図ですね。資料1は東京新聞の報道ですけれども、これは私のコメントを取り上げてくれて、非常に嬉しかったのですが、残念ながら例外的な報道でした。飽和したカリキュラムが前提にあるんだ、という事実を申し上げたのですが、多くの報道は、

いろんな学者さんのご意見を引っ張ってきて、高校のコンプライアンス違反という文脈で世論が形成されました。

そして、最終的に、この問題は、文部科学省の中で決着をすることができませんでした。「過去の年度は不問にする」、また、「当該年度に関しては、70 単位時間を限度に補習する」というのは、当時の総理大臣からの指示で救済がなされたということでした。

実は、最後どうやって決着したかは、もうずっと、忘れていたんですよ。最近になって、ある方に指摘されて、「なるほど、そういうことだったのか」と思い出したという次第です。

未履修問題の影響

その結果、何が起こってきたかというのが次の話です。東北大学の立場からの見方なのですが、ずっと、私、このデータが不思議だったのです。

こちらをご覧ください。東北大学における東北地方からの合格者の地域別の割合を、こうやって年を追ってグラフにしていきます。2000 年度というのは私どもで AO 入試というのを始めた年なので、そこを起点にしています。東北地方出身者のシェアが大体 40% 前後。この時期はちょっと増えてきて 45%、これは多分 AO 入試という制度の特質があるかなと思うのです。

ところが、この年に未履修問題が発覚します。そして、その後、こういう状況なんですね。このピンクが東北地方です。黄色で示しているのは関東地方です。今は、実は、東北地方の出身者よりも関東地方の出身者のほうが多いというのが東北大学です。最後、ちょっとここは東北地方、ここ 2 年ぐらい上がっているのですが、おそらくコロナ禍で地元志向と言われています・・・その影響じゃないかと思います。根本的な解決じゃないんじゃないかなと思っています。

AO 入試、ちょっとここでは説明を省略しますけれども、東北地方の受験生に有利です。というのは、何か不公平なことをやっているという意味ではなくて、後でも述べますが、入試が情報戦になっているからです。どうしても、東北大学に関心がある高校は地元が多いので、AO 入試で合格する学生はそういったところから多く入ってくる。合格率が高いわけではないです。AO 入試が拡大している時期なのに、ということを見ると、一般選抜で見ると、より極端な傾向です。もう 3 割を切っているんですね、東北地方の出身者は。

では、彼らがどこに行ったのかということですが、結論から言います。彼らが望むようなところには、行けていないんです。

これは、私どもの同僚の末永特任教授が調べたものですが、2016 年に私大の定員管理の厳格化政策というのがありました。目的は地方大学等への進学奨励だったんですが、この分析結果が、結構衝撃的でした。有名私大、難関国公立ともに首都圏の高校が実績を伸ばし、地方が後退していることが顕著に見えたからです。こちらに結果を示しています。北海道、東北という地域が難関国公立大学・・・東北大学も含まれますけれども・・・に行けなくなったというのがここに出てきます。有名私大になると、こんな状況です。北関東の方が相当厳しいダメージを受けているんですけれども、東北がなぜダメージが小さいかというと、もともと行けていないから。それが分かっています。逆に、首都圏の学校が実績を伸ばしています。相対的に。

背景にある要因、直接的な環境としては、少子化の進行と学校規模の縮小というがあると思います。高校教員のマンパワーは、これはやっぱり学校規模に依存するというのがございます。これが非常に、今、東北各県小さくなっています。例えばトップの進学校でも 6 クラスという県があります。これが、多分、東京だと 8 クラス、10 クラスという

のは当たり前。一方、東北の中では比較的恵まれている地元宮城県でも、仙台市内のトップクラスの進学校で何とか8クラスを保っているような状況です。さらに、学校規模だけではなくて、進学校と言われていた学校の中に必ずしも進学を目的にしない生徒も入ってくる。そうすると、様々なニーズに教員が対応しなければいけない。さらに、申し上げにくいんですけども、都道府県による高校の経営政策にも、正直、課題があるんじゃないかなと思って見えています。民間の教育リソース、地方にはございません。全てを学校に依存しているという状況の中で、このコンプライアンスはきつかったんじゃないかなと思います。人的・知的・時間的なリソースの配分の自由度が限られてしまったわけです。

高校生の大学選択行動と進路指導体制

大学入試政策も背景にあります。伝統的な大学入試の多様化政策は、先ほども申しましたように大学入試を情報戦化します。非常に様々な要因について考えて、それらによって受験生の受験行動が左右される傾向が生じてくる。その中で、実は、高校は、相当に進路指導、キャリア教育を充実させてきた経緯があるんじゃないかなと思っています。

これについては残念ながら時系列的なデータがないので、私のところにいる中国からの留学生と共同で、・・・彼女が調査実施を担当したのですけれども・・・国際比較をしたところ、明らかになったことです。ちなみに、中国は現在、日本よりもずっと画一的な入試制度が問題になっています、いわゆる「高考」という、1,100万人の受験生ですか、毎年受ける試験、その試験一発で進学先がほぼ決まるという制度です。これを多様化しようという政策が始まったところです。

日本は大学に向けた進路指導体制が非常に充実している。中国と比べると、ということ、いくつかデータがあります。一つは、例

えば大学からのアプローチですね。いわゆる「入試広報」と大学では呼びますけれども、オープンキャンパス、それからホームページ等、要は大学からの情報発信をかなりしていきまして、そこから自分の進路を考えて、行くべき大学、さらには入試制度を考えるというような仕組みになっている。

もう一つは、相談相手です。「進路に関して誰に相談しますか」ということを聞きました。これは指標化しているので分かりにくいのですが、「2」というのが「年に1, 2回相談する」、「3」というのが「時々」、「4」が「頻繁に」という指標です。「頻繁に進路の話をしている」というのもどうかな、と思うので、結果は適度なところに落ち着いています。どちらの国もやはり一番の相談相手はお母さんですね、母親というのがメインの相談相手で、進路に関する相談を「時々する」わけです。実は、中国では、そのほかは、友人、父親、兄弟姉妹というところが高い。つまり、基本的には大学進学は家族の問題だ、というわけです。それに対して、日本は高校教師が2番目に来ています。中国、ほとんどが「年に1, 2回」というのと比べて見ると、実は非常に差がある状況が分かってきた。しかし、この事実は、例えば、先ほど浅田さんがお話をされた高大接続改革政策の中で勘案されたかということ、無視されたに等しかった。

高校は加害者だったのか？

再び申し上げます。高校は加害者だったのか、被害者だったのか。コンプライアンスという観点からは加害者と認定されたわけですね。したがって、為政者からは、処罰、矯正の対象というふうにイメージされたのではないかと感じます。ただ、カリキュラムが飽和状態、そのほかのことも含めて学校の活動が飽和状態であることを考えると、本来は何らかの形で手を差し伸べるべき相手だったんじゃないかなと思うわけです、それは今でも変

わらないと思います。私にはその前のことはよく分からないので、未履修問題から大学入試に関わる教育問題の政治決着が始まったように見えています。高大接続改革は、善意であつたんだろうと思いますけれども、当事者を置き去りにした発想だったように思います。その中で、文部科学省のイニシアチブはどうだったのかな、ということと思うわけです。

改めて未履修問題、背景には伝統的な文教政策があると思います。その結果、現場が飽和状態になっていると。正直、何とか現場で運用してくださいという発想だったし、現場もそう考えてきたんだけど、それがコンプライアンス違反という形で捉えられるようになった。今、多分教育政策と現場の課題をそういった観点から整理する時期なんじゃないかなと思います。

別な観点としては、大学入学者選抜の背景には矛盾する理念があるな、と私はいつも思っています。一つは、臨時教育審議会から恐らく始まっている個性尊重の原則、一人ひとりがその場を幸せに過ごすことができる。もう一つは、その以前の高度経済成長のときに始まったと思われる人材育成の観点ですね。将来の社会を育てる人材をどういうふうに育成、教育するのか。これは、現在、かなりねじれたロジックで用いられているように感じます。本来、個性尊重の原則に則っているでしょう、と見える政策が、マンパワー政策の文脈で語られている気がします。

時間もないですし、このぐらいにしておきます。

行政、現場、研究の役割

行政の方は、文教予算の確保、獲得というところが非常に大きなお仕事でもあり、我々からはなかなか本当に見えない苦労があるんだろうなと思います。そこでは財政当局が納得する新機軸、新事業というのをやはり常に考えていく必要があるんだろうと思います。

その結果、事業内容が膨れるわけです。現場がやることが盛り沢山になってくるわけですよ。従来は、それを大綱的に運用してくださいということで、ある意味、・・・すみません、これはもしかしたら語弊があるかもしれないけれども・・・黙認されてきた。ところが、今、時代の規範が変わった。コンプライアンスの時代です。運用ではなく違反と見られる場合がある。これは社会規範ですから、そのときの社会の価値観、正直、報道のされ方というのが大きいのかな、と思いますけれども、それによつては当初の認識と違う理解をされてしまう。結果的にリソースのない、弱いところにしわ寄せが行くという構造ではないかなと、東北大学のデータを見ても思うわけです。

未履修問題の余波、最終的に自分たちの中で決着できなかったということが、もしかするとコンプライアンスを軽視している役所という、・・・私は偏見だと思いますけれども、・・・そういう見方が外部にできてしまったのかもしれない。これは払拭しなきゃいけないと思います、我々も。行政と現場、そして、今日、話にはきちんと入れられていないんですが、研究というのがやはり非常に機能的に協働して、初めて教育という営みが成り立っていくのだと思います。決して現場から行政を敵視することがあつてはならないと考えています。

ただ、大学入試というのは二重性がある。大学入試は当事者の問題でありながら誰でも語れる、というところなんです。外からの介入というのは、やはり現場が分かっているということでは、どうしても問題が生じやすいんじゃないかと思います。現場を熟知した行政主体の判断、これが重要になってくると思います。

とりあえず、これは浅田さんもおっしゃっていたと思います。総量の見積り、引き算の発想というのがこれは重要じゃないかな、と。

新規事業をただ入れるだけではコンプライアンスの破綻が起こる。ということは、何かを足したら何かを引くという決断が必要になっているんじゃないでしょうか。

ただ、再確認をします。大学入試の主体は個別大学です。おそらく、最終的には憲法の論議にもなるような重要な仕組みだと思っています。実際、大学入試が高校教育に影響を与えているというのは事実でしょう。ということは、この問題の緩和ということに関しては、個別大学の役割も重要なんじゃないかと思っています。

個別大学の入試における今後の指針としては、高校に求めること、これ以上は高校に求められないので大学で育成すること、というのをそれぞれの責任で仕分けをしていくことでしょう。アドミッション・ポリシーという形でそれを明示していく。それに従って選抜方法ができてくるわけです。

新しい指導要領が今年から施行されています。その下で学んだ受験生が入試の時期になるのは令和 7 年度入試です。2 年前予告ということであれば、・・・2 年前だと遅過ぎるという話もあるのでありますが、・・・今年度中に個別大学は行動を決めて発表しなければいけない。そこが一つの試金石になってくるのかな、というふうに思っている次第でございます。

ちょっと延びてしまいました。大変申し訳ありません。以上でございます。ご清聴どうもありがとうございました。

久保沙織准教授（司会）：

倉元先生、ありがとうございました。ご質問等につきましては、ウェブ上での入力をお願いいたします。

ここで休憩とさせていただきます。予定より休憩時間が短くなってしまいますが、今から 8 分程度休憩を挟ませていただき、第 2 部は 5 分繰り下げ、14 時 55 分から開始とさせ

ていただきます。なお、お手洗をご利用の際には、密集・密接を避けるようご配慮いただきますよう、よろしくお願いいたします。



大学入試のコンプライアンス

ー未履修、入試ミス、そして、コロナ対策ー

東北大学高度教養教育・学生支援機構
倉元 直樹



本講演の構成

- ・はじめに
- ・日本の大学入学者選抜制度の構造
- ・入試ミスとコンプライアンス
- ・コロナ禍への対応に見る日本型入試
- ・未履修問題を振り返る
- ・未履修問題の波及効果
- ・活力ある近未来の制度に向けて



はじめに (1)

- ・春の**東北大学高等教育フォーラム**を振り返る
 - ・草創期（2004年～）：高大接続の模索（第1～6回）
 - ・定着期（2008年～）：大学入試を主に（第8～12回）
 - ・転換期（2012年～）：アクシデント対応等（第14～20回）
 - ・改革対応期（2015年～）：高大接続改革（第22～30回）
 - ・？？？（2019年～）：入試設計、コロナ・・・（第32回～）
- ・**国立大学アドミッションセンター連絡会議**との共催



はじめに (2)

- ・**文部科学省から来賓** ← 殻を破る契機
 - ・教育行政：高大接続に関わる重要なアクター
 - ・大学入試における**教育行政の役割**を議論したい
- ・2つの条件
 - ・**浅田和伸氏**のお話を伺いたい
 - ・**未履修問題**（2006年）について改めて考えたい
 - **コンプライアンス**という概念を基軸にできるのでは？



日本の大学入学者選抜制度の構造 (1)

- ・日本の大学入学者選抜制度
 - ・大学入試：入学者選抜が**選抜試験**によって成立
 - ← 現在は必ずしも当てはまらない状況
 - ・**個別大学**が入学許可の主体、責任と権限を持つ
 - ← 極めて**重要な基本構造**
- ・教育行政と個別大学の大学入試
 - ・大学入学者選抜実施要項を通じた**行政指導**



日本の大学入学者選抜制度の構造 (2)

- ・**国立大学と一般社団法人国立大学協会**
 - ・国立大学の入学者選抜の**日程等**は、国立大学協会の定める実施要領に基づき実施される
 - ・前期日程試験、後期日程試験等の日程は重要
 - ・**国大協の方針**は各大学の意思決定に影響を与える
- ・大学入試の実施は**行政と個別大学**の共同作業
 - ・事例：コロナ対策の国際比較 ← 後述

入試ミスとコンプライアンス (1)

- **コンプライアンス**（法令遵守）
 - 企業や組織が**法令**や**倫理**といった社会的規範から逸脱することなく適切に事業を遂行すること
 - 1991年発行の広辞苑（第4版）には非掲載
- 社会的に注目されたきっかけ？
 - 2000年、2004年の**リコール隠し問題**
 - ← 実体が法律、規則に沿っているか、社会的注目

入試ミスとコンプライアンス (2)

- 入試ミスとコンプライアンス
 - 2001年に2つの**大きな入試ミス関連問題**が発覚、社会問題化（「大学入試学」の誕生、第10章）
 - 大学入試関係者の意識には大きな影響？
 - 最近では2018年の作題ミス、医学部不正入試が大きな話題
- 入試における適切な**情報開示**と**説明責任**の自覚

コロナ禍への対応に見る日本型入試 (1)

- 確認：日本型大学入試の特徴について
 - 最終的な責任と権限は**個別大学**にある
 - 文部科学省は**緩やかな行政指導**で入試を適正化
 - 近年になって**コンプライアンスの意識**が定着
- コロナ禍の下での大学入試に見る日本の特徴
 - ← 大学入試センターシンポジウム2021「COVID-19の災禍と世界の大学入試」

コロナ禍への対応に見る日本型入試 (2)

- 米国：**コスト重視** → 入学者選抜自体を調整
- 英国：テストの中止 → **例年と異なる選抜**
 - フランスでもほぼ同様の対応
- フィンランド：共通テストと個別試験の**比率変更**
- 韓国：感染対策、日程調整、**例年通りの実施**
 - 中国でもほぼ同様の対応

コロナ禍への対応に見る日本型入試 (3)

- 日本の対応：中国、韓国とほぼ同様の原則
 1. 受験生を慮る**特別対応** → **コストは度外視**
 2. 受験生の準備に対応して、**例年通りの実施**を
- 令和3年度入試ではコロナの影響は最小限
- 成功の秘訣：文部科学省と個別大学及び大学入試センターとの間の**絶妙な連携**
 - ← 背景に**共通の価値観**と**コンプライアンスの意識**

コロナ禍への対応に見る日本型入試 (4)

- 令和3年度入試への文部科学省の対応
 1. 日程調整、**特別対応**（追試験等）の指示
 2. 試験場における**感染防止対策**の指示
 - ← 具体的で明快、余計な心配なく実施可能に
- 個別大学及び大学入試センターの動き
 1. 非常事態への**コストを度外視**した真摯な特別対応
 2. ただし、**入試ミスのリスク**とはトレードオフ

コロナ禍への対応に見る日本型入試 (5)

- 令和4年度入試における連携のほころび
- 特に令和3年末から**オミクロン株**による第5波
 1. 濃厚接触者の受験を認めず追試験に (12/24)
 2. **撤回**、陰性であれば受験可能に (12/27)
 - ← 岸田**首相からの指示**、との報道
 3. 受験なしでも合否判定特別措置の指示 (1/11)
 - ← **各大学**の判断、**今年限り**の措置、**相談窓口**の設置

コロナ禍への対応に見る日本型入試 (6)

- 令和4年度コロナ対応における表層の問題点
 1. **タイミング**：大学入学共通テスト (1/15-16) 直前
 2. **受験生保護の大原則**の軽視 ← 最初の通達
 3. 追試験に対する依存 ← 追試験はあくまで例外
 4. **朝令暮改** ← 首相とはいえ、**外部からの介入**
 5. **過度な特別措置** ← 妥協の芸術からの逸脱
- 最終的には配慮の行き届いた通達に

コロナ禍への対応に見る日本型入試 (7)

- 第5派オミクロン株への対応に潜む構造的な問題点
 - 何故、**好意で打った施策**が裏目に出たのか？
 - 何故、**首相が文部科学省に直接介入**したのか？
- **発端は未履修問題**にある ← 私的仮説
 - 無意識のまま放置すると同じ問題が繰り返される
 - 長年の教育行政と教育現場の関係には**転換が必要**
 - この問題をひも解くキー概念が**コンプライアンス**

未履修問題を振り返る (1)

- **未履修問題**とは？（資料1参照）
高等学校等が、学習指導要領では**必修修の教科・科目**を開講せず、生徒に履修させていなかった問題。
2006年10月に発覚して大きな社会問題となった。
- 概要
 - 必修だった世界史、新科目情報等で履修漏れ多発
 - **卒業要件**を満たせない ← 法的には**卒業認定不能**

未履修問題を振り返る (2)

- 未履修問題が社会問題化した背景
 1. **広範**に渡って違反が発覚
富山県が発端 → 全国に波及、違反なしは例外？
 2. **長年の慣習**：学習指導要領の**大綱的運用**
遡って調査すると、私自身も高校卒業資格を問われる？
 3. 教育の実態と**コンプライアンス概念不在**の体質
 - 学校教育は以前から**飽和状態** → 現場運用で調整
 - 社会規範は変化 → **コンプライアンス重視**にシフト

未履修問題を振り返る (3)

- すでに飽和していた**学校の時間**（資料2参照）
 - 日本教育心理学会第63回総会 **時間シンポ**
 - ゆとり教育 vs. 学力低下 の構図の中で
 - ← 全く注目を浴びずに終わった (2001年)
 - 慣習の放置 + **コンプライアンス重視**への流れ
 - 未履修科目の社会問題化は**時代の必然**？
- 高校は加害者だったのか？ 被害者だったのか？

未履修問題を振り返る (4)

- 未履修問題の構図（再び資料1参照）
 - 東京新聞：飽和したカリキュラムを組上に（例外）
 - 他の報道はコンプライアンス（法令遵守）の文脈
 - 受験シフトに傾いた高校が悪いという世論形成
- 未履修問題の帰結 → **政治決着**
 - 過去の年度は不問、70単位時間を限度に補習
 - 安倍首相からの指示**で救済措置を文科省が実施

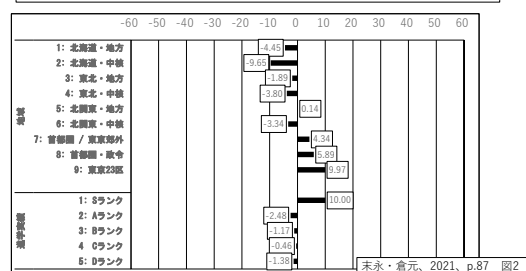
未履修問題の波及効果 (1)

- 2008（平成20）年度入試を境に起こった変化
 - 東北大学における**東北地方の出身者合格比率**の低下（2007年度：45.6% → 2020年度：33.7%）
 - 東北大学ではその時期にAO入試比率を拡大
 - ← 結果的に東北地方の受験生に有利な改革なのに
 - 一般選抜**を見るとより一層、極端な傾向（2007年度：42.1% → 2020年度：28.1%）
 - 地元から東北大学へ入学できなくなってきた

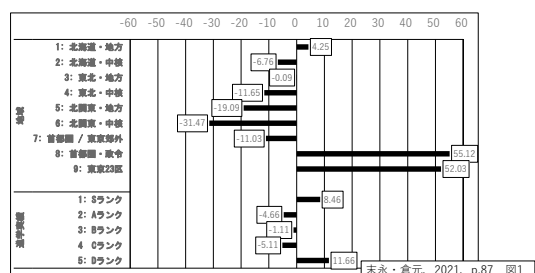
未履修問題の波及効果 (2)

- 東北地方の東北大クラスの**受験生はどこへ？**
 - 推測：根本的な**志望先の転換**を迫られたのでは？
 - 参考：**私大定員管理厳格化**の影響（末永・倉元、2022、<http://adchan.ihe.tohoku.ac.jp/report/>）
 - 2016年私大定員管理の厳格化政策
 - ← 目的は地方大学等への進学奨励
 - 分析結果：有名私大、難関国公立大とともに**首都圏**の高校が実績を伸ばし、**地方は後退**

厳格化前後における難関国公立大学合格者数の増減



厳格化前後における有名私立大学合格者数の増減



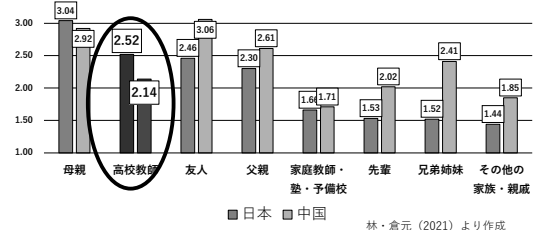
未履修問題の波及効果 (3)

- 背景にある複合的要因 (1)：直接的な環境
 - 地方における**少子化の進行と学校規模の縮小**
 - 高校教員のマンパワーは学校規模に依存
 - 進路多様化**の中での進学ニーズへの対応
 - 都道府県による高等学校経営政策等にも課題
 - 民間教育リソースの偏在と家庭の経済力
 - 地方の高校では**全てを学校に依存**
 - 乏しい人的・知的・時間的リソースの配分の自由度は？

未履修問題の波及効果 (4)

- 背景にある複合的要因 (2)：大学入試政策
 1. 伝統的な大学入試の**多様化政策**
 - **大学入試の情報戦化** → 受験戦略の多様化・複雑化
 2. **高校におけるキャリア教育の進化と充実**
 - 日本の高校の努力と変化は中国との国際比較で明らかに
 - 中国：現在、画一的な入試制度が問題 → 多様化へ
 - 日本：大学に向けた**進路指導体制**の充実
(林・倉元、2021、2022、先述のURLに掲載)

大学進学に関する相談頻度



未履修問題の波及効果 (5)

- 高校は**加害者**だったのか？ **被害者**だったのか？
 - コンプライアンスの観点からは加害者
 - 加害者 → **処罰**、**矯正**の対象と認定
 - 飽和状態 → 本来は**手を差し伸べるべき相手**？
- 未履修問題から始まった教育問題の政治決着
 - 唐突な高大接続改革 ← **当事者不在**の発想
 - **文部科学省のイニシアティブ**はどうだったのか？

未履修問題の波及効果 (6)

- 改めて未履修問題とは？
 - 背景：伝統的な文教政策 ⇒ 現場の飽和状態
 - 時代の状況：**運用がコンプライアンス違反**に
 - **教育政策と現場の課題**を整理するきっかけに
- 大学入学者選抜の背景にある**矛盾する理念**
 - **個性尊重の原則** vs. **人材育成** ← 均衡点は？
 - 一つ一つの施策は、どこに立脚しているのか？

活力ある近未来の制度に向けて (1)

- 文教予算の確保、獲得
 - 財政当局が納得する**新機軸**と**新事業**の必要性
← 現場の前線からはなかなか見えない苦労
- 結果的に**膨れる事業内容**
 - 従来は大綱的な運用 → **現場での調整**は黙認
 - コンプライアンスの時代 → 運用ではなく**違反**
 - 結果的に**リソースのない、弱いところ**にしわ寄せが

活力ある近未来の制度に向けて (2)

- 未履修問題の余波
 - コンプライアンス軽視の役所という**偏見** ← 払しょくへ
 - **大学入試の二重性** ← 善意の介入でも問題有
 - **現場を熟知した行政主体**の判断は重要
- 総量の見積もり、引き算の発想の重要性
 - 飽和状態に新規事業 → コンプライアンスの破綻
 - 今後は、**何かを足す** ⇒ **何かを引く**が必要では？

活力ある近未来の制度に向けて (3)



- 再確認：大学入試の主体は個別大学
 - 大学入試が高校教育に影響を与える ← 事実
 - 飽和状態の緩和には、**個別大学の役割**も重要
- 個別大学の入試における今後の指針
 - **高校に求めること、大学で育成すること**の仕分け
 - ← 個別大学は**アドミッション・ポリシー**で明示
 - 新指導要領の下での令和7年度入試が試金石

第Ⅱ部 現状報告

現状報告者紹介

現状報告者 1

延沢 恵理子（のべさわ えりこ）氏

1972 年宮城県生まれ

〔教員歴〕

山形県立谷地高等学校教諭（7 年間）
山形県立楯岡高等学校教諭（7 年間）
山形県立新庄北高等学校教諭（7 年間）
山形県立東桜学館高等学校教諭（1 年間）
山形県立東桜学館中学校教諭（3 年間）
山形県立東桜学館高等学校教諭（現職）（3 年目）

〔主な教育活動〕

高校 3 年次主任（中高一貫校 2 期生を 6 年間担当）
28 年間の教員生活で 23 年進路指導（中学では進路指導主事と学年主任を兼務）を担当
国語科
現在は、かるた部顧問（弓道部・放送部・文芸部・吹奏楽部顧問を経験）
東日本大震災被災地支援高校生有志ボランティア「StandingTogether」顧問（2011 年～）

〔その他の特記事項〕

全国女性進路指導研究会 事務局
山形県若手・中堅進学指導研究会 事務局
環日本海進学指導ネットワーク大会世話人会 事務局
山形県高等学校国語学習指導改善研究会 事務局
もがみ国語の会 事務局
日本国語教育学会山形県支部常任理事
あらましメソッド推進 arama 会会員
SDGs for school 認定エデュケーター

現状報告者 2

宮本 久也（みやもと ひさや）

1957 年和歌山県生まれ

〔職歴〕

都立高校教諭 （2 校，16 年間）
東京都教育委員会で指導事務に従事 （16 年間）
東京都教職員研修センター研究担当統括指導主事
教育庁指導部主任指導主事（高校改革担当）
教育庁学務部入学選抜担当副参事
教育庁指導部高等学校教育指導課長
教育庁指導部指導企画課長 等を歴任
東京都立西高等学校 統括校長 （6 年間）
東京都立八王子東高等学校 統括校長（現職）（5 年目）

〔主な役職〕

全国高等学校長協会会長 （2015～17）
全国普通科高校長会理事長 （2015～17）
文部科学省 中央教育審議会初等中等教育分科会臨時委員 （2015～17）
教育課程部会委員，教員養成部会委員，高等学校部会委員
文部科学省「高大接続システム改革会議」委員 （2015）
文部科学省 大学入学共通テスト検討・準備グループ委員 （2016～17）
大学入試センター運営審議委員 （2015～18）
公益財団法人 Tazaki 財団 理事 （2017～ ）
一般財団法人 三菱みらい育成財団 アドバイザリーボード委員 （2021～ ）

〔主な著書〕

共著 『検証 迷走する英語入試』 岩波ブックレット 2018
共著 『変革期の大学入試』 金子書房 2020

現状報告 1：地方公立高校の現場から

山形県立東桜学館中学校・高等学校

延沢 恵理子 教諭

【講師紹介】

久保沙織准教授（司会）：

これより第2部、現状報告に入らせていただきます。現状報告1「地方公立高校の現場から」、山形県立東桜学館中学校・高等学校教諭、延沢恵理子先生、よろしくお願いいたします。

延沢恵理子教諭：

よろしくお願いします。山形県立東桜学館高校の延沢と申します。このたびは、このような場を与えていただきまして、誠にありがとうございます。演題は「地方公立高校の現場から」というふうになっていますけれども、全ての地方公立高校の状況を掌握できるわけもなく、甚だ偏ったお話になりますけれども、私が体験した高大接続改革についてご報告させていただきます。今回の皆様の話のお肴くらいになればいいなと思っているところです。

本校は、山形県初の併設型公立中高一貫校で、開校7年目を迎えております。私は2期生の学年主任として6年間持ち上がってきたところです。もともとは宮城の人間で、震災後、災害でなくなるものって何だろうという問いにぶつかりました。人の心に残したものだけなんじゃないかなというふうに思い当たって、ちょっとおこがましいんですけども、子どもたちの心に何を残したらいいかというふうに考えたときに、自分の力不足をすごく痛感しました。そこで自分に力をつけるために、このような進路指導と、高校国語教育の筋トレの場を設けてまいりました。こんな拡散型の私が、高大接続改革を通して何



を考えたかということで、本日のメニューはこのようなっております。

初めに、高大接続改革にどんなふうに対応したのかということからお話したいと思います。正直なところ、平成25年の教育再生実行会議でも、平成26年の中教審の答申を読んだときも、「上のほうで何か言っとるなあ」という感じで受け止めていました。それが平成27年1月にめちゃめちゃタイトな工程表つきの実行プランが出て、これですね。初めて、「今度こそ本気っぽいぞ」と感じました。27年の頭に出して、29年にはプレテストをやるというスピード感なので、CBTなどもその専門家レベルである程度実現の見込みが立っているんだろうというふうに思っていました。受験が変わるというのは一大事です。でも、どこからも具体的な情報が出てきませんでした。まさにリビングの象で、問題があるのに見ないふりするしかない、大き過ぎて全体像が見えないという状況でした。

多くの先生方は、話題にはしていたんですけども、情報が出てきてから考えようというスタンスだったと思います。当時から研究会仲間を持っていた私は、仲間と一緒に情報

収集と意見交換を通して、見えないものを見る化していくことにしました。そのために、できるだけ一次情報にアクセスしようと考えました。地元の大学さんの入試センターの先生方、文科省の方、それから高大接続システム会議の参加者に直接会ってお話を伺いました。そして、お話を伺うほど、作問者の努力によって長い年月をかけてここまでブラッシュアップされてきたセンター試験 30 年の歴史をぶっ壊してまでつくる新テストで測りたい思考力の正体って何なんだろうというふうに思いました。その正体が知りたくて、今回の改革の考え方の背景を理解するには見たほうがいいよと言われた「Most likely to succeed」で、アメリカのチャータースクールである HTH（ハイテックハイ）のオール PBL の授業を知り、PBL の設計についての講座や問いづくりの会、HTH で学んだ元留学生を囲む勉強会をして、当時中学校 2 年生だった自分の生徒たちに英語で劇をつくる PBL もどきを経験させたりもしました。学習者主体とか、個別最適化の学びとは具体的にどういうものなのかということを考えていくと、人手不足を ICT 活用で補いながら学習を進めるブレンディッド・ラーニングにも関心が湧きました。アメリカのブレンディッドスクールがエビデンスベースで学校運営している姿に刺激を受けて、高校版 IR も試し始めました。

一方で、大学入試がどのように設計されているのか、入試の舞台裏を学ぶ会も実施してきました。大学の求めていることや入試設計の考え方に触れ、私たちの思い込みを壊す機会を得ることができました。そして、教科としては、それまで実施してきた作問研究会を新テストを想定した作問の会にして、可能性と着地点を探る勉強会を実施してきました。これが 27 年 1 月から改革が頓挫するまで、見えないものを何度か見ようとして拡散しなくなりながら、闇雲に手を伸ばした私の無駄と

遠回りの足跡です。

学校の中では、経済的な負担も発生しておりました。e-ポートフォリオがないと出願できない大学が出るかもしれないということで、Classi の契約をせざるを得ませんでした。情報を集めていたので、「不要になるはずだから要らない」と言ったのですが、予測では万一には勝てませんでした。英語検定試験や GTEC の受験も進んで、低学年からのスピーキング対策もオンラインで実施していました。

対話型の授業を増やそうとしていますけれども、対話には時間がかかります。記述もやらなくちゃいけないということで、今までやってきているものはあるんですけども、また違った形で考えなければいけないというふうに思いました。プラスはあってもマイナスがないので、授業進度に問題が出てきます。また、新テスト対応の問題集を採用することになるのですが、対応できている業者が少ない中から選ばなければならないというような状況もありました。

これらのかなり拡散気味の学びの中で気づいたことについてお話します。裁量権を与えると、子どもたちは生き生きと活動して、自分たちはできるというふうに自己有用感や集団としての達成感を持つことができました。一方で、その後、自分たちを信頼し過ぎて他人の意見を聞かないという状況も出てきて、自分が OK でも、他人からも OK をもらえるように行動しなければならないと指導してバランスを取る必要がありました。独自性の発揮は心を元気にしますが、行き過ぎは学びの基礎である自分以外の者に心を開くという部分が弱まります。また、共通性の指導は、他者とのつながりを生み、自分一人では思いもしなかった世界の獲得につながりますが、時に窮屈さを感じます。その両方のどちらが欠けてもいい学びにはなりません。よく、チョーク&トークの授業は古くて、PBL や探究的な学びが新しくていいものという言説に出会

うようになりましたが、形が違って見えるだけで、大事なのは手段ではなくて、学びの価値を知り、自分を今よりもより良くするために学び行動しようとする、こういうマインドを育てられたらいいのかなというふうに感じました。

また、入試研究の中で、多面的評価をするという話題が出てきていましたが、評価の物差しを増やすということは、どの物差しでも点数が取れないといけないということなので、多様性を図っているようで、逆に一芸に秀でたタイプは合格しにくくなるんだなということに気がつきました。しかも、入試センターが強い大学さんは、GPAを中心にPDCAを回しているの、入学後の成績の良い生徒を合格させられる入試に年々変化していることに気づきました。

私が教員になったばかりの頃と比べると、推薦やAO入試で意欲や人柄だけでは合格しにくくなったと感じていましたが、そもそもいくら目の前の生徒の努力や良さを評価してほしいという親心を我々高校教員が抱いたとしても、大学進学後の学習についていける基礎力が前提です。学力以外の指標もというふうには言うものの、学力不問だったらもはや大学ではありません。私たち自身、人を育てるということは、寄り添うことだけではないんだなということを考えなければならないのではないかというふうに思います。

高大接続改革で、そもそも高校は何を変えなければならなかったのでしょうか。高大接続の必要性を説く言説として、「義務教育までの成果をつなぐ」という表現があって、小中はうまくいっているけれども高校が駄目みたいなことが書かれてあって衝撃を受けました。私は3年間中学籍で働いてきたんですけども、中学生は高校生と比べて抽象度の高い思考に耐えられません。だから、活動的な授業を仕組みないと、集中力が持たずに授業が成立しにくいのです。高校になってやっと

抽象度の高い思考ができるようになったのに、具体重視、活動重視の授業では、思考の抽象度が上げられません。学びは具体と抽象の往還が必要であって、具体だけでは見えないことがあります。計算や漢字などの基礎力を軽視する傾向が進んだおかげで、高校教育にしろ寄せが来ている現実もあります。そもそも発達段階の違う小中の指導論理を高校教育に持ち込むことの危惧を感じています。中高一貫を経験して、中高的接続をスロープにすることで、経験すべきステップが経験できないというのはマイナスなのではないかと感じている部分もあります。生徒たちを見ますと、理不尽なことにとっても弱いのです。高校生にもなって、あの人が理不尽なことをしたというふうに訴えてきます。これから出会う人は皆自分に寄り添ってくれるはずだという思考は、現実がそうならなかったとき彼らを苦しめるのではないのでしょうか。

世の中の教育熱心な大人たちは、散々自分を抑えてきて大人になってから自分らしさに辿り着いたことをすっかり忘れて、先回りして自分が苦しんだ経験を子どもにさせまいとします。でも、自分と他人と向き合う苦しい時期をすっ飛ばして、自分らしさなんて分かるのでしょうか。自分を抑えることもできない子どもたちに自分らしさを求めることは、忍耐力や自己コントロールの力を奪います。

「先生、自分らしくとか好きなことって聞かれるけど、私は自分が分からないんです」と真剣に悩んで相談しに来る生徒たちにたくさん出会ってきました。大人のいう「頑張ることが前提の自分らしさ」と、子どもたちが思う「頑張らなくても備わっているのが自分らしさ」というずれも感じます。ここ数年その自分らしさが自分に備わっていないことを嘆き、将来を不安視して震えている子どもたちに、前を向かせることに腐心してきました。そして、百歩譲って、高校は何を間違ってきたのでしょうか。合格至上主義で人を育てる

視点を失っていないかということを経験して自己点検する必要性は感じています。行事の精選の名のもとに、多様な子が活躍する場やリーダー育成の場が失われたり、入試を意識するあまり入試受けする主体性や探究テーマを指導したり、効率を重視するあまり入試に関係ない科目は勉強させないということもあるかもしれません。

ただ、こちらをご覧ください。ちょっと言い訳をさせていただきたいんですけども、昨年の共通テストのベネッセさんのデータネットを利用した生徒のうち、5教科7科目受験をしている生徒の割合です。東北以外の地方も似たようなものなんですけど、地方では7、8割の生徒が5教科7科目のフル受験をしています。全科目勉強すれば、科目を絞ったときよりも手が回らず、平均点としては下がります。それでもフル受験させているんです。もちろん、国公立大学の志願者が多いというのも一つの理由ではありますが、学校教育は受験のためにあるわけではないということを信じているからでもあると思っています。特に震災を経験した私たちは、偏差値よりも大事なことがあることに気づいてしまいました。先が見えない時代と言われているんですけども、先が見えなかったのは今始まったことではありません。その中で、今後子どもたちを救うのは、不易と流行を見極めて、高校でつけるべき力をきっちりつけて卒業させるということだというふうに思っています。

こちらは、最後のセンター試験の受験者の割合をグラフにしたものですが、センター試験を利用しないのに受験している層が12万人もいます。この子たちは恐らく推薦などで合格は決まっているけれど、高校の学習の総仕上げとして受験させているのです。効率や合理性の世の中で、保護者に理解を求め、平均点を下げてでもせめて共通テストを、受験できるレベルの力をつけて大学に送ろうという、高校教員の気概だというふうに私は思っ

ています。

高校が間違ってきたことの2つ目は、高校教育についてあまり私たちが発信してこなかったということです。教育界で著名な方々の多くは、小中の義務畑の先生方です。大抵は、耳障りの良い、寄り添い系の母性的な教育愛で語られます。でも、高校で必要なのは、その子の個性が社会に着地できるように、自立を目の端で見届けるような父性的な教育愛だと思います。だから、高校の先生は厳しいとか冷たいというふうに言われます。もう、今社会に出ようとする人間を手厚くサポートするのは優しさではありません。このことは高校教員にとって当たり前のこと過ぎて、言語化をなかなかしてこなかったんじゃないかなというふうに自分自身も思います。小学校や中学校で寄り添われて育ってきた子どもたちを、3年で社会人の卵くらいには育てなければならぬのが高校なんです。

それに、高校教員には不言実行の美学があるなと感じるんですね。言い訳は格好悪いから、黙って実績出しますというタイプの先生が進学校には多いように感じます。加えて、教科や科目、勤務高によって状況が異なってしまうので、一枚岩の議論が難しいということも上げられます。だから、対話による理解が進まなかったんじゃないかなというふうに感じています。

高大接続改革が頓挫した今、感じている2つの違和感についてお話しします。まずは、何とんでも、「情報」の共通テストへの導入です。正直「まだ増やすんかい」と思っています。それでなくても、対話型の授業、探究活動、キャリア教育、特別活動、校外ともつながれということで、私たちが高校生だった頃よりも明らかにやるが増えています。落ち着いて教科の勉強ができないという状況の中、情報担当者は人材不足で、学校によっては系統立てて責任をもって指導することが難しい非常勤講師や、1年契約の常勤講師の

先生方が担当されるケースもあるので、学校間格差が生じることは必須です。しかも、現在のカリキュラムでは、情報の単位が1年生に位置づけられている学校が多いはずなので、3年での学び直しをするということになれば、現在の受験科目の時間を削ることになります。情報という科目の重要性は、現場はよく理解していると思いますが、教育課程に位置づけることと入試に課すことは別という発想でないと、全部入試でというのはこれ以上無理なのではないかと思っています。数学Ⅱや理科の平均点の低さを見ると、間に合っていない生徒が多い印象です。新課程では数学Cの負担増の状況もあって、これ以上どうなるんだろうというふうに思っています。本当にぎりぎりの中で現場は走っているなというふうに感じています。

第二に、共通テストはあくまでも共通ということで、個性の部分は各大学の評価軸をもって個別試験で問うてほしいと思います。現在約9割の私大が共通テストを利用していますが、大学側に作問の余力が残っていないことをよく表していると感じます。でも、だからといって、作問力のない大学のために共通テストの設計を変えるのは本末転倒だと思います。日本は先進国の中では大学進学率の低い国です。今後、進学率を上げるということが必要なはずなのに、経済力も大学の研究教育機関としての力も落ちてきている原因は何なのでしょう。世界と出会わせて、学びの価値を伝えられていない国であることの方が問題だなというふうに感じています。

今日は倉元先生に「好きなことを言え」というふうに言われているので、最後に、「御上」にお伝えしたいことをお話します。

まず、1つ目ですけれども、「変更するなら早く言って」ということです。6年一貫校で6年後の入試がどうなるか分からないままスタートせざるを得ないというのはとっても厳しいことでした。闇雲に手当たり次第の探

求をさせられた感が否めません。

次に、「狼少年になっちゃっていますよ」ということです。結局、何も動かなかった教員が振り回されずに済んだという経験を我々に与えたことになったので、次はますます動かなくなる可能性があります。それでも多様性重視ということは、いろいろな人にマッチする教育を提供しなければならないということです。理念としては美しいけれども、やる方は大変です。万年人手不足のところに、コロナ禍でICTの波がやってきました。普段の学校運営にどのくらい上乘せになっているんだろう、何時間上乘せになっているんだろうと感じます。まず、フィージビリティの検討を十分をお願いしたいです。

3つ目です。「まず、データを真ん中に置いてお話ししませんか」ということです。各自が自分の受けた教育のルサンチマンをぶつけるイメージ議論はもうやめて、データを見ながら、現場と専門家を交えて客観的に議論し合える場をつくってほしいなと思っています。教育の効果測定は海外のものが主流です。もっと専門家を信頼して、日本人や日本社会にマッチするエビデンスベースの教育や入試にシフトする必要があるんじゃないかなと思います。学力の高い子ほど自己肯定感が低いのは、日本人に関しては自分に厳しいからじゃないかなと思います。日本人は謙譲の美德を持っていますし、自分を駄目と思ってなくても、自分大好きな回答はしないのじゃないかなというふうに思います。

もちろん数字の危うさも重々承知の上ですが、今回の改革で散見される各自の思い込みや各自が受けた教育へのルサンチマンの議論は不毛です。単なる数字の「公開」ではなく、数字と現場との対話による現状理解がサーベイフィードバックの基本だと思っています。国家百年の計を日本文化の特質や発達段階も考慮に入れて、力を合わせて設計していったらいいかなと思っています。

4 つ目です。グローバル人材とは、多様性を受容できる人のことです。他者の靴を履くというエンパシーの力は、本来つながれない相手とつながるための力だと思っています。文学は実用文よりも軽視されているようですが、私は日本という国がエンパシーを問う国だということを誇りに思っています。共通テストの小説問題は、「自分だったら」では解けないんです。共通テストを受験する日本の18歳の半数以上の高校生たちに、「この時代の、この立場の、この人だったら」と考えさせる。問題を解いていないと気づかないことかもしれません。日本は単なる自己主張にとどまらない、対立を超えるマインドを持つ子どもたちを育てる国なんだと思うんです。入試問題は、単なる知識を問うだけじゃなくて、何を学んできてほしいかのメッセージでもあります。

5 つ目に行きます。学校は共通言語の獲得の場です。学校というところは、良くも悪くも他人とつながるための共通項を学ぶための場なので、これまでの自分を壊し、自分の外部を内に取り入れるための痛みを伴う場でもあるんです。だから、とっても怖いし、仲間が必要なんです。中には、こういう言い方は良くないかもしれないんですけども、他人に頼らずに幼い頃から自分をしっかりもって行動できる人もごく少数います。どうやらそういう方々が御上や研究者の方々には多いようなんですけども、ご自分たちが特殊ケースだということを自覚してください。自分とは違うタイプの子どもたちを想定し、それぞれに伸ばすことを学校教育は求められています。学校での学びは、知識習得が全てではありません。学び方を学び、世界と向き合うマインドや生きる哲学を学ぶ場でもあるんです。そして、子どもたちは生き物です。理想どおりには動いてくれません。高度に理想化された教育が、子どもたちと現場にめっちゃめっちゃのしかかっています。御上の思いも、高大接

続も、コロナ対応も、現場はそれらを丸ごと引き受けて日々走っています。ここにいる多くの高校教員仲間が、生徒とともに誰に見られていなくても、時に理想を打ち碎かれて涙したり、生徒の成長に胸を熱くしたりしながら、教師としての自分の花を静かに咲かせて生きています。現場の体温を感じていただき、心ある行政マン、大学人とともに、日本の子どもたちのためによりよい教育、よりよい入試をつくっていったらなというふうに思っています。

拙いお話でしたけれども、お付き合いいただきましてありがとうございました。

久保沙織准教授（司会）：

延沢先生、ありがとうございました。ご質問等につきましては、ウェブ上での入力をお願いいたします。

現状報告 延沢恵理子（山形県立東桜学館中学校・高等学校）

第36回東北大学高等教育フォーラム 現状報告

地方公立高校の現場から

山形県立東桜学館中学校・高等学校
教諭 延沢 恵理子

山形県立東桜学館中学校高等学校



開校7年目
（今春1期生が卒業したばかり）
山形県初の公立中高一貫校

最寄り駅「さくらんぼ東根駅」



現在、6年目の2期生の学年主任を務めています。

震災後、自分に力をつけたくて始めた研修の場

- ◆全国女性進路指導研究会
- ◆山形若手・中堅進路指導研究会
- ◆環日本海進路指導ネットワーク大会
- ◆山形県高等学校国語学習指導改善研究会（作問研究会）
- ◆もがみ国語の会（小中高大連携の国語教育の会）

本日のメニュー

- 1 高大接続改革にどう対応したか。
- 2 学ぶ中で気づいたこと。
- 3 現状への違和感。
- 4 「御上」にお伝えしたいこと。

本日のメニュー

- 1 高大接続改革にどう対応したか。
- 2 学ぶ中で気づいたこと。
- 3 現状への違和感。
- 4 「御上」にお伝えしたいこと。

「本気だ」と感じたのは、平成27年1月

平成24年 8月28日 高大接続特別部会スタート
平成25年10月31日 教育再生実行会議
平成26年12月22日 中央教育審議会「新しい時代にふさわしい
高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学
教育、大学入学者選抜の一体的改革について」答申

平成27年 1月16日 高大接続改革実行プラン

①個別選抜改革②新テストの立ち上げ③高大の改革

平成27年3月～平成28年3月 高大接続システム改革会議
平成28年3月 最終報告

現状報告 延沢恵理子（山形県立東桜学館中学校・高等学校）

[illegible]

R3.3.27@名古屋 バンクシー展にて

まさに「リビングにいる象」

明らかに問題が目の前にあるのに、誰かが「編集」して届けてくれるのを待っているだけ。

大きすぎて全体像が見えない

見えないものを見るために情報集めを始めた

- | | | |
|-----|--|------------------|
| 2月 | 地元大学の入試センターの先生方に話を聴く。 | |
| 3月 | 10人ほどの教師仲間と東京へ外出き情報収集。
・高大接続システム会議に参加している企業人に講師依頼
・文部科学省の事務次官に講師依頼 | |
| 5月 | 第22回東北大学高等教育フォーラム参加
「大学入試改革にどう向き合うか」 | できるだけ
一次情報にあた |
| 5月 | 校内(前任教)で研修会の実施 | |
| 8月 | 自主研修会での意見交換 | |
| 11月 | 高大接続システム会議の高校からの代表者との教育座談会参加
試行テストの予想問題を作成し合う | |
| 12月 | 自主研修会での情報交換 入試担当者の講演等 | |

できるだけ
一次情報にあたる

「新テスト」に対応する「思考力」の正体が知りたくて

- ◆映画「Most likely to succeed」を見てオールPBLの授業を知る
 - ⇒年間4回の東京でのPBLの基礎講座に参加
 - ⇒問うことの大切さを感じ、「ハテナソン」の会に参加
 - ⇒SDHの留学経験者を囲む勉強会をオンライン実施
- ◆SDG s のエデュケーター資格を取得



「新テスト」に対応する「思考力」の正体が知りたくて

- ◆「学習者主体」「個別最適化」とは何か
 - ⇒『Blended Learningの衝撃』の翻訳者主催の研修会に参加
 - ⇒エビデンスベーストの学校運営を知り、高校版IR (Institutional Research) に着手
- ◆大学入試がどのような発想で設計されてきた（いる）のか。
 - ⇒各大学の入試設計に携わる先生方や大学入試センターの先生方を囲んでの勉強会実施
- ◆「新テスト」の問題を予想しながら国語の作問研究会の実施。



見えないものを見ようとして

シゴトの合間を縫って、参加した会 7年間で100超。



高大接続をスタートにした私の探究ノートの一部

現状報告 延沢恵理子（山形県立東桜学館中学校・高等学校）

学校の中では

- * 「e-ポートフォリオがないと出願できない？」と
B社の「Classi」を導入する動き ⇒年間3600円ずつ保護者負担
200人の学年で72万円計上
学校単位200万円超
- ⇒万ーに備えておかねばならないという発想から逃れるのは難しい

- * 英検受験料（希望制）2級8,400円 準1級9,800円 1級11,800円（R4）
GTEC受験料（本校では中1から高2まで毎年受験）1回5,980円（R4）
低学年からスピーキング練習のために、
B社の「オンラインスピーキング」中3一人1回800円×3回＝2,400円

学校の中では

- * 理解を深める対話型の授業
⇒時間がかかる。
理想は分かるが、現実には受験日というリミットがある。
- ⇒考える以前の段階を育てる必要性もある。
例 顔を上げてコミュニケーションをとる
聞こえる声で話す
学校の外のことを教室に持ち込まない（上機嫌の作法）
教科書を共通言語として理解する などなど
- * 新テストに対応する問題集への変更

本日のメニュー

- 1 高大接続改革にどう対応したか。
- 2 学ぶ中で気づいたこと。
- 3 現状への違和感。
- 4 「御上」にお伝えしたいこと。

独自性の発揮

- + いきいき学ぶ
- － 他者への開かれ弱
独りよがり

共通性の指導

- + 他者と繋がる
新たな視座の獲得
- － 時に窮屈

自分をよりよく成長させるマインドづくり

入試研究での気づき

- ①「多様性」の名の下に、評価のモノサシが増えれば増えるほど、
「全部できる」バランス型の生徒が有利になる。
- ②大学はGPAを中心にPDCAを回しているの、高校が推薦したい生徒
（意欲や人柄）というだけでは合格できなくなっていく仕組みがある。
⇒「学力以外の指標も」とはいえ、「学力不問」ならもはや「大学」
じゃない。

「人を育てる」とは「寄り添う」ことだけじゃない

高校の何を変えなければならなかったのか

現状報告 延沢恵理子（山形県立東桜学館中学校・高等学校）

「義務教育までの成果をつなぐ」という発想

◆小中はうまくいっている???

⇒具体と抽象

⇒腹落ちのスピード

◆発達段階が違う高校教育に「義務教育」の論理をねじ込むことへの危惧。

⇒「伴走してくれ」くんを育てていないか？

⇒「努力して得る自分は自分らしくない」？

高校は何を間違ってきたのか

◆合格至上主義で、「人を育てる」視点を失っていないか。 ⇒行事を減らし、多様な子が活躍できる場・リーダー育成 の場を失わせてきている？

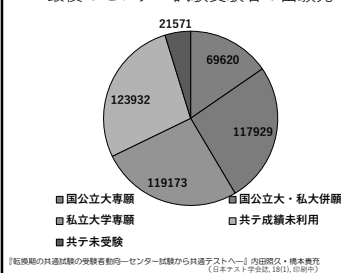
⇒入試で評価されるような「主体性」を持たせようとする？

⇒入試に必要な教科は勉強させない？

2022年度入試	データネット参加者数	5教科総合受験者の割合
山形県	3392人	75.1%
東北地区平均	26425人	71.8%
東京都	47781人	34.3%

⇒「地方は平均点が低い」の意味。塾がないから、だけなのか？
「高校でつけるべき力をつけて卒業させる」という気概。

最後のセンター試験受験者の出願先



国公立専願 約7万人
国私併願 約12万人
私大専願 約12万人

成績未利用 約12万人
出願なし 約2万人

*成績未利用者は
得点分布の下位に

*共テ利用私大（2022年3月）
86.8%（534/615大学）

発信を避けて（諦めて）来なかったか？

◆発信力のある教員は、ほとんど小中の先生方。 耳障りの良い「ありのまま」言説の危険性

高校は、社会性と独自性の折り合いをつける発達段階
受験勉強＝自己コントロール力をつける場でもある

◆「不言実行」の美学

⇒「言い訳」はカッコ悪い。黙って実績出します！

本日のメニュー

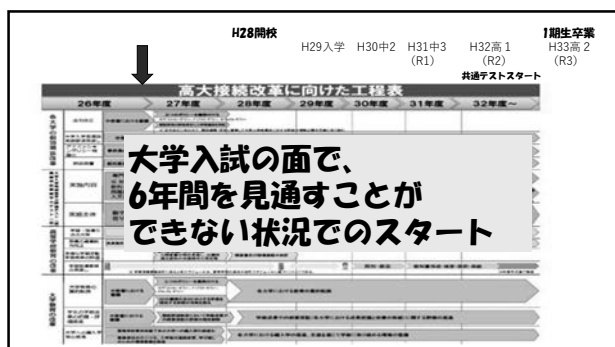
- 1 高大接続改革にどう対応したか。
- 2 学ぶ中で気づいたこと。
- 3 現状への違和感。
- 4 「御上」にお伝えしたいこと。

現状への違和感

- ◆「情報」の共テ導入
⇒情報の教員が非常勤や常勤講師（1年契約）の高校もある。
それだけでなく、万年教員不足。格差大。
⇒「教育すること」と「入試に課すること」は別。全部はムリ。
- ◆共通テストはあくまでも「共通」
⇒多様性は大学毎の評価軸をもって個別学力試験で問うてほしい。
⇒大学側の作問力のなさを大学入試センターが尻拭い？

本日のメニュー

- 1 高大接続改革にどう対応したか。
- 2 学ぶ中で気づいたこと。
- 3 現状への違和感。
- 4 「御上」にお伝えしたいこと。



「御上」にお伝えしたいこと

- ①変更するなら「はやく」全体像をお知らせください。
- ②今後はフィージビリティの検討を十分に。
- ③日本人や日本社会にマッチするエビデンスベースの教育に。
- ④日本は「エンバシー」を問う国。入試は知識を越えたものを問う。
- ⑤「共通言語」の獲得は、他者と繋がり自分を高めるための痛みを伴う。「確たる自己」を持てていない子への教育も視野に。

学校での学びは知識習得だけじゃない。

学び方を学び、
物事や人と向き合うマインドを学び、
生きる哲学を学ぶ場でもある。

子どもたちは「生きもの」です。

天与の花を咲かす喜び
共に咲く喜び
人見るも良し 見ざるも良し
我は咲くなり

（武者小路実篤）

能力・適性の原則
公正・妥当の原則
高校教育尊重の原則

（1984年佐々木孝『大学入試制度』『大学入試の三原則』）

現状報告 延沢恵理子（山形県立東桜学館中学校・高等学校）



本校のマスコットキャラクター「桜雄（さくらっぺー）」



おつきあいいただき、ありがとうございました。

山形県立東桜学館中学校高等学校 延沢 恵理子

現状報告 2：入試をめぐる行政と現場との対話 ——高校入試と大学入試を比較して——

東京都立八王子東高等学校

宮本 久也 校長

〔講師紹介〕

久保沙織准教授（司会）：

引き続きまして、現状報告 2「入試をめぐる行政と現場との対話——高校入試と大学入試を比較して——」，東京都立八王子東高等学校校長，宮本久也先生，よろしくお願いいたします。

宮本久也校長：

東京都立八王子東高等学校の宮本でございます。今，延沢先生から，現場の本当に率直な声が報告されました。私のほうは少し観点を変えて，今日の副題であります教育行政と教育現場との対話というところに焦点を絞ってお話をしたいと思います。入試ということで，高校入試，それから大学入試，この 2 つを比較する中で，私自身が考えていたこと，体験したことを中心にお話をさせていただきたいと思います。

私自身の入試との関わりですが，プロフィールにもありますように，長く東京都教育委員会で仕事をしていました。その中で，高校入試の実施に関する実務も担当しました。都立高校では 2003 年に，全国に先駆けて通学の学区を撤廃しました。私はその仕事に 2001 年の準備の段階からずっと関わってきました。また，進学指導重点校と言われる学校等では，共通問ではなくて自校作成問題による入試を行う。このことの実務にも携わり，最終的には入学選抜業務の責任者も務めさせていただきました。また，現在は都立高校長として入学者選抜を実際に実施しています。

一方，大学入試に関しましては，2015 年



から 18 年にかけて，文部科学省等が主管をします大学入試に関する委員会等に高校の代表として参加をしました。高大接続システム改革会議や大学入試センターの審議会などに参加することなどを通して様々な制度設計に直接関わっていきました。こういった経験から 2 つの入試を比較していきたい。もちろん規模や仕組みは全く違いますから，同じように比較はできませんけれども，比較できるところを比較していきたいと思っています。

当たり前のことですが，入試というのは受験生の将来を左右する非常に大きな選択になります。特に入試制度の変更は，実際に受験生を指導する高校入試ですと中学校，大学入試ですと高等学校の教育に極めて大きな影響を与えます。したがって，制度の改革というのは，選抜をする側，それから入試をさせる側の双方が納得した上で行うべきだ，これは当たり前のことなんですけれども，このところがすごく大事で，そのためには双方で十分な対話が必要だというふうに思います。

私は，対話の中には我々普段もそうですが，

フォーマルな対話とインフォーマルな対話というのがあると思います。入試に対しても同じだと思います。いわゆる公的な審議会や委員会などあらかじめ設定されている会議での意見交換、これはフォーマルな対話、これに対してインフォーマルの対話はそうじゃないところで担当者同士で話をすることです。例えば都立高校でいきますと、パワーポイントに書いてありますように、東京都立高等学校入学者選抜検討委員会というのがあります。毎年5月に設置をされて、3か月間審議をして、翌年の入試の方法を決めていく、こういう会議です。それから、公立中学校長会の中には進路対策委員会という入試のことを専門的に考える委員会があって、一方、都立高校長会の中には入選検討委員会という高校入試を専門に検討する委員会があって、それぞれの代表が年に何回か協議をする。これがフォーマルな対話です。一方、大学入試におけるフォーマルな会話は、現在は大学入学者選抜協議会と呼ばれるような会議があって、ここで実際に次の入試をどうするかということを考えていきます。

私はこの双方の会議に出ていましたけれども、やっぱり感じますのは構成員のバランスの違いなんですね。都立高校の検討委員会の場合は全体で委員は27名です。構成員はパワーポイントに書いてあるとおりです。有識者、あるいは都教委の関係者や保護者を除きますと、中学校サイドの方が8名、高校サイドの方が10名で若干多いです。ただ、そんなに大きな違いはありません。また、有識者の2名の方も極めてニュートラルな立場です。一人の方は入試の情報の専門家ですし、もう一人はもともと役所で入試を担当した方ですから、全体を俯瞰する、こういう中でいろいろと考えていくわけです。

一方、大学入試はどうでしょうか。現在の大学入学選抜協議会は17名のメンバーです。構成員はこうなっています。有識者は全て大

学の関係者です。入試センターや保護者を除きますと、大学側が10名、高校側が5名です。かつて私が出ていた高大接続システム改革会議は、大学の方が18名で、高校側は私を含めてわずか3名です。当然、入試に関しては大学側の声が大きくなっていく。高校側の声というのはやっぱり少ないです。

それから、先ほど延沢先生が言ったとおりで、広い視野に立った議論にはなりにくいです。ほとんどの委員の方はご自分の経験で発言をされがちになります。自分が今日の前に見ている大学生、あるいは自分がお勤めになっている大学のこと、そういうところから話をしていきますから、当然広く大学入試制度全般について全体を見て話をできているか。残念ながら、私はそうではない部分が多いと思います。私は、全国高等学校長協会の代表として会議に臨んでいましたけれども、会議の前には必ずほかのメンバーといろいろ話をして、地方の校長先生方のお声、場合によっては延沢先生のような地方で頑張っている先生方の声を聞いて、そしてそれを含めて会議で発言をするように心がけていましたけれども、全体的にはそういうふうにはなっていません。特に地方などで状況の厳しいところの声というのは、非常に反映されにくいです。そういった状況で、実際には議論が進んでいたというふうに思います。

それから、インフォーマルな会話はどうでしょうか。高校入試については、日常的に公立の中学校や、あるいは都立高校から事務局にどんどん情報が入ってまいります。また、必要に応じては事務局と中学校、あるいは事務局と高校、あるいは中学・高校同士で情報交換をします。非常に風通しもいいわけです。大学入試については、大学の方と事務局との関係は私にはよく分かりませんが、私ども高等学校関係者については、事務局との間の会話は日常的にはまずありません。重要な案件については、文科省の事務局の方が校長協会

の事務局や高校側から出ている委員に事前に説明をして意見を聞くということはありますけれども、普段はなかなかインフォーマルな会話というのはできないです。ただし、私は大変幸せだったのは、今日最初に浅田所長がお話になっていますけれども、浅田所長が当時文科省や大学入試センターで大学入試改革の担当だったということもありまして、私がお会長のときには文科省や大学入試センターの担当者の方と私たち校長協会の役員が非公式に意見を交換する場というのを何回も設けていただきました。また、個人的に浅田所長や事務局の方にいろいろとご相談をしたり、逆に相談をされたりというふうなこともあったわけですが、これはあくまでも例外的なことであって、基本的にはこうしたインフォーマルな会話はほとんどありません。つまり、フォーマルな対話は、これは仕組みの中でつくられているものですが、インフォーマルな対話というのは、これは担当者の人柄とか、担当者のスタンスによるんですね。だから、いつもいつもあるわけじゃありません。ですから、例えば文科省の担当者が変わると、突然インフォーマルな会話ができにくくなるという状況もこれは実際に起こっています。その点は強く感じています。

なぜそうなのかということですが、今の話もそうですが、高校入試については事務局と現場の対話できているんです。学校間の対話もできている。しかし大学入試に関しては行政と現場、特に高校現場との対話は十分ではない。しかし、例えば地方の高校とその地方にある大学との間では結構対話ができているところもあるようです。定期的にそういう話し合いをするという場を持っていったりする地方の大学もいくつも聞いています。ところが、残念ながらそういう声は中央にはほとんど届いていません。その中で話で終わってしまっていて、それが中央に届くということとはほとんどないということでもあります。

その最大の理由は何かということ、結局、事務局の構成員の違いだというふうに思います。都立高校入試の場合は、事務局の大部分が公立の中学校や高校の教員の経験者です。事務局のトップが高校の経験者ですと、必ずサブは中学校の経験者、逆の場合もあります。ですから現場の状況を熟知していて、その経験や情報を基に事務局の案をつくっていきますし、いわゆる瀬踏みをして、こういうことやりたいんだけどどうだろうかということ現場との間で状況に応じて行いながら、落としどころを決めていく。また、事務局と現場との距離が近いので、現場の反応や声が非常に入りやすいということもあります。

一方、大学入試のほうは、これは私の偏見かもしれませんが、高校の状況を分かっている方はいらっしゃる方はほとんどいらっしゃらないように思います。また、大学入試を所管するのは高等教育局ですから、日常の業務の中で私も高等学校との接点はほとんどありません。高等学校は初等中等教育局との関係がありますけれども、高等教育局はありませんので、普段はない。つまり、事務局の方々にとっては高校の声や反応というのは、普段の業務遂行に影響はないということなんです。ただ、高大接続改革が始まった初期の段階はそうではなかったです。共管ということで、小中局と高等教育局が連携をしてお仕事をされてました。私たちが小中局に入試に関係する話で行くと高等教育局の方が来てくださったし、逆の場合もありましたが、今はそういうふうな状況にはなっていないと思います。

先ほどからいろいろとお話が出てきていますが、昨今の入試改革における行政と高校との対話というところですが、高校側が最近反対ばかりしているじゃないかというふうに言われるわけですが、改革の必要性について我々が反対しているということは一切ありません。英語の件もそうでした。記述式の件もそうです。それから、先ほど延

沢先生がおっしゃった「情報」のこともそうです。これは必要だと思いますよ。だから、入試で問うていくということも、やることに對して絶対にこれはいけないということを私どもは言っているわけではありません。ただ、導入に對しての課題、あるいは不安について、納得のいく説明や解決策が示されないということが残念ながら多いと思います。導入をするというのが前提、スケジュールがありきという形で進んでいくということがたくさんあると思います。先ほど延沢先生がおっしゃったような声というのが施策をつくる行政の方に届きにくい。我々もそういう声を集めてお話をしようと思いますけれども、なかなかお話をする機会もないし、お話をしたところで、「それはそうですね」というところで終わってしまいそこから先には行かない。結果的にやはりうまくいかないというケースがあります。

「情報」に関してもそうです。地方の状況を見ていきながら、地方の県の校長会と地元の国立大学の中でいくつもの大学とのお話をさせていただきました。結果、「どうでした」と聞くと、「いや、よく分かりました」と大学の方におっしゃってくださいました。でも、最終的には国大協で決めることですからというところで、そこでやっぱり終わってしまう。実際にはそういうふうな形で進んでいる。これもやはり、丁寧な対話不足が原因だろうというふうに思います。なかなか行政と現場、特に高校現場との対話ができいてませんし、私の感覚でいくと、最近その対話ができない状況というのがまたひどくなっているのかなというふうに思います。

最後です。よりよい入試を行うためにということで、これは当たり前のことなんですけれども、やはり行政と現場、あるいは現場同士、大学入試でいきますと高校と大学の間での対話が必要です。これはフォーマルな場でもインフォーマルな場でもということで、や

はりそういうような場をたくさん設けていく、あるいはそういった場の設け方、さっき言ったような構成員のことも含めてそうですし、あるいはインフォーマルに自由に話ができるというそういうような状況をつくっていただきたいと、強く思います。つまり、受験をする側の理解が得られなければ入試改革は進んでいかないと、当たり前ですけれども、理解を得るためにはやっぱり対話をするということです。お互い理解をして、この辺なら仕方がないねということというのはあると思うので、完全に納得はしないけれども、お互いやっぱり理解をした上で進めていくという、そういうような形にぜひしていただけたらなと思います。

そして、大学のほうにもお願いなんです、やっぱり高校や受験生の声も聞いていただきたい。先ほど申しましたように、大学によっては地方の校長会との意見交換をしたり、あるいは受験者・入学者の多い高校にアンケートを取ったりして、そういうものを分析していろんな形で生かしているという、そういうふうな大学もあると聞いています。東北大学もそういうことを非常に熱心に取り組まれていると私どもは思っています。お願いしたいのは、そうした声をご自分の大学の入試改革に生かすだけじゃなくて、やっぱり行政にも届けてほしいわけですよ。あるいは国大協のようなところでも言ってもらいたいんですよね、結局、そういう声が上がっていかねければ、先ほど延沢先生がおっしゃったように現場でいろんな苦勞をしながら、それでも何とかしようという努力をしている、そういう努力が全然報われないような状況になっていってしまうということになると思います。ぜひ、対話をどんどん、どんどんしていくことによって、お互いの立場が理解できるようになれば、もっともっといい入試になるのではないかなというふうに思います。

以上で私の報告を終わります。どうもあり

がとうございました。

久保沙織准教授（司会）：

宮本先生，ありがとうございました。

ここで約 20 分の休憩を取らせていただきたいと思います。再開は，前方のデジタル時計で 16 時ちょうどとさせていただきます。

なお，基調講演及び現状報告の 4 名の先生方への質問等の受付は，15 時 50 分で締め切らせていただきます。来場参加の皆様はお手元の QR コードから，オンライン参加の皆様はオンライン参加者用ページより，あるいはスクリーンに表示されている QR コードから，ウェブ上での入力をお願いいたします。お手洗いをご利用の際には，密集・密接を避けるようご配慮いただくようお願いいたします。それでは，休憩に入ります。

[休憩]

東北大学
高等教育フォーラム資料
2022年 5月18日

入試をめぐる行政と現場との対話 ー高校入試と大学入試を比較してー

東京都立八王子東高等学校長
宮 本 久 也

1. 私と入学者選抜とのかかわり

【都立高校入試】

- ・ 都教委で高校入試の実施に関する実務を担当
（学区撤廃、自校作成問題等）、実務責任者も務める
- ・ 都立高校長として入学者選抜を実施

【大学入試】

- ・ 文科省等が主管する大学入試に関する会議に
委員として参加
（高大接続システム改革会議、入試センター運営審議会等）

2. 入試における対話の必要性

●入試・・・受験生の将来を左右する重要な選択

- ・ 入試制度の変更は受験生を指導する中学校
高校の教育に大きな影響を与える



制度改革は選抜する側、受検させる側の
双方が納得したうえで行うべき

*** そのためには双方で十分な対話が必要**

3. 対話

対話にはフォーマルな対話とインフォーマルな対話がある

【フォーマルな対話】

- ・ 都立高校入試
東京都立高等学校入学者選抜検討委員会
公立中学校長代表と都立高校長代表による協議
- ・ 大学入試
大学入学者選抜協議会
（かつては大学入学者方法改善に関する協議会）

3. 対話

【都立高校入試と大学入試の審議会の違い】

- ・ 最大の違いは構成員のバランス
東京都立高等学校入学者選抜検討委員会
（有識者2、区市教委2、保護者2、都教委5、
公立中学校6、都立高校10）
- * 有識者、都教委、保護者を除けば
中学校側8、高校側10で若干高校側が多い
- * 有識者もニュートラルな立場
進学情報の専門家、元都立高校入試実務責任者

3. 対話

【都立高校入試と大学入試の審議会の違い】

- 大学入学者選抜協議会
（有識者3、大学団体代表7、高校代表4、
保護者1、県教育長1、大学入試センター1）
- * 有識者は全て大学関係者
- * センター、保護者を除けば、大学側10、高校側5
（システム改革会議は、大学側18、高校側3、その他6）
- * 大学入試に関しては大学側の声が大きくなる
- * 広い視野に立った議論になりにくい。自分の経験で発言しがち
- * 特に地方など、状況の厳しいところの声が反映されにくい

3. 対話

【インフォーマルな対話】

- ・ 都立高校入試
 - 日常的に公立中学、都立高校から情報が入ってくる
 - 必要に応じて事務局と中学、高校。中学と高校で情報交換
 - ・ 大学入試
 - 日常的にはまずない。
 - 重要案件は、全高長事務局や委員に事前説明し意見等を聞く（私が会長の時は担当者と非公式に意見交換する場を設けてもらった。）
- * インフォーマルな対話は担当者の人柄やスタンスによる

4. 高校入試と大学入試における対話の違い

- ・ 都立高校入試
 - 行政（事務局）と現場（中学、高校）との対話がよくできている
 - 学校間（中学、高校）でも対話ができている
- ・ 大学入試
 - 行政（事務局）と現場（特に高校）との対話が十分ではない
 - 地方などでは学校間（高校、大学）での対話ができているところもある → 中央には殆ど届かない

4. 高校入試と大学入試における対話の違い

【最大の理由】

- ・ 事務局の構成員の違い
- ・ 都立高校入試
 - 大部分が公立中学校、都立高校の教員経験者
 - 現場（中学、高校）の実態を熟知、その経験や情報を基に事務局案を作成
 - 事務局と現場（中学、高校）との距離が近いので反応や声が入りやすい

4. 高校入試と大学入試における対話の違い

【最大の理由】

- ・ 事務局の構成員の違い
 - ・ 大学入試
 - 高校の状況を分かっている方は殆どいない
 - 大学入試を所管するのは高等教育局で、高校との業務上の接点は殆どない（高校の反応や声は業務遂行に影響しない）
- * 高大接続改革の初期の段階では高等教育局と初中局が連携して仕事を進めていたが今はそうではないようである。

5. 昨今の大学入試改革における行政と高校との対話

- ・ 改革の必要性については高校側も理解
- ・ 導入に際しての課題や不安について
 - 納得のいく説明や解決策が示されないこともある

導入ありき、スケジュールありきで進行

→ 結果的にうまくいかないケースも

【対話不足が原因】

6. より良い大学入試を行うために

- ・ 行政と現場、現場同士の対話が必要
 - （フォーマルな場でもインフォーマルな場でも）
 - 受験する側の理解が得られなければ入試改革は進まない
 - ・ 大学も高校や受験生の声を聞いてほしい
 - （地元の校長会との意見交換、アンケートの実施等）
- そうした声を自己の大学の入試改革に生かすだけでなく、行政にも届けてほしい
- * 対話により互いの立場が理解できれば
良い入試が行われる

ありがとうございました。

第Ⅲ部 討議

ーパネルディスカッションー

討議——パネルディスカッション——



久保沙織准教授（司会）：

お待たせいたしました。これより第3部、討議に入ります。ここからは討議司会の担当者にマイクを渡します。

宮本友弘教授（討議司会）：

皆さん、こんにちは。討議の司会を担当させていただきます東北大学入試センター宮本と申します。

阿部和久特任教授（討議司会）：

阿部と申します。よろしくお願いします。

宮本友弘教授（討議司会）：

4人の先生方、ご発表、どうもありがとうございました。これから早速討議に入らせていただきたいと思います。今回のサブテーマに

「対話」とありますので、できるだけパネリストの先生方同士の対話が活発化するように進められればと思っております。また、参加者の方々との対話も大事にしたいので、オンラインでいただいた質問も適宜取り上げながら進行させていただきます。

それでは、まず4人の先生方に、先ほどご発表した内容で、もし何か補足することがございましたらお一人ずつお願いします。宮本先生は先ほど終わったばかりなので、まず延沢先生から何かございますか。

延沢恵理子教諭：

先ほど、高校側がなかなか一枚岩になれないというようなお話をさせていただいたんですけども、PBLとか探究にうまく乗った先生方と、入試研究とかそういう受験畑の先

生方が、なかなかこう両方を見ていくという形に辿り着けていないような感じがしていて、どっちも思考停止しているような感じがすごいあるなと感じているので、私たち高校教員側も乗り越えなきゃいけないものがあるなということを共有できたらなと思います。以上です。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。

続いて、倉元先生、お願いできますか。

倉元直樹教授：

今の延沢先生のお話にコメントもしたいんですが、それより先ほど言い忘れた話です。それは、浅田さんのご発表の中の 21 ページ目のスライド、「言うべき人が、言うべきことを、言うべきときに言う」、非常に刺さる言葉だなあと思って聞いておりました。一つ、言いたいことは、「言う」ということ以外にも「書く」という方法があるんだろうなと思います。それはさっき持っていったご紹介しようと思って忘れていたんですけれども、これは浅田さんが書かれた本です。「教育は現場が命だ」、まさに今日の演題になっていますけれども、私、これ 1 冊読ませていただきました。大変辛かったです、面白くないから（笑）。けれども、ここから伝わってくるものはすごくあって、今日の日につながっているということが言えるかなと思います。

もう一つ、これはちょっと今見ると誤植があるようなんですが、チラシですね。東北大学大学入試研究シリーズというものの第 2 巻「大学入試センター試験から大学入学共通テストへ」、その第 1 章なんですけれども、これ、実は、当時審議をしていた中教審の高大接続部会ですか。その委員の京都大学の土井先生という方が、おそらくギリギリの表現

で内情を伝えようとしていただいたものを載録しております。もしよろしかったら、こちらもお読みいただければなと思います。「その場で言う」ということ以外に、「後で見てもらう」ということもあるのかなと思います。

これに関してもう一つ、「言うべきときに、言うべき人」というのがすごく大事なかなと。言い過ぎると「発言をする場」というのを与えられなくなることがあるのかなと思って、その辺もちょっと私は勉強させていただきたいかなと思います。「言うべきときに言うべきことを言っていない」ということもあるかもしれないんだけど、「そこはちょっと待ってよね」みたいなことを、浅田さんや宮本先生のような方、・・・延沢先生は無理だな（笑）、・・・からご指導いただければありがたいな、とちょっと思った次第でございます。以上です。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。

続いて、宮本先生、お願いいたします。

宮本久也校長：

大体言いたいことは言わせていただいたんですけれども、そもそもやはり先ほど延沢先生もおっしゃったように、高校といっても非常に多様なんですよね。同じように大学も多様なんですね。だから、高大接続とよく言葉がずっと出てきますけれども、どこの部分で接続するのかというところが、そこによって話が随分変わってくると思うんですけれども、非常に曖昧な形での議論が進んでいるからなかなかうまくいかないと思うんですね。だから、やはりその辺のところも意識しながら対応することが僕はとっても大事なのかなというふうに思いました。以上です。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。
浅田先生、お願いいたします。

浅田和伸所長：

言えることを言葉を選びつつ大体しゃべったつもりなので、今は特段ありません。また、ご質問や何かにお答えする形で発言したいと思います。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。冒頭で申し上げたように、できるだけパネリストの皆さんの対話を促せたらと思います。それぞれの発表に対して、お互いに質問やちょっと確認したいことがあるかと思うんですね。それで、現場と行政の対話ということで、延沢先生から特に浅田先生に対して何かご質問とかあったらお願いしたいと思います。

延沢恵理子教諭：

浅田先生は、現場と行政と両方を経験されておられるので、私たちの味方だと私は思っているんですけども、現場に足りないなというふうに校長先生をなさっていて感じられたこと、逆に行政に足りなかったなというふうに思っていること、あれば教えていただければと思います。

浅田和伸所長：

どうしようかな。何についてという設定によって、お答えすべきことが違うかなという気がします。現場に足りる足りない、良い悪いというような評価ではなく、やはりお互いに現状を正しく知ること、とりわけ行政が現場をもっと知ることが大事だと思います。そこに尽きるんじゃないでしょうか。

行政にも現場にもいろいろな課題や問題は

あるし、本当はこうしたほうがいいのになと感じることもあります。それを現場にこれが不足している、行政にこれが不足していると言ったところで、何か捉え方が違う気がします。足りる足りないというよりは、先入観や思い込みをできる限り排して、現状を正しく認識する、理解する、体で感じる。特に行政はね。そういうことをもってしていく必要があるんだろうと思います。

その後にそれを具体の政策にどうつなげるかということについては、今日も少し触れたつもりですが、これはまた別の力も必要で、その力を、特に行政は持たなくてはならないということでしょうか。

宮本友弘教授（討議司会）：

いかがでしょうか。今のを受けて。



延沢恵理子教諭：

授業を組み立てて授業を毎日している人間としては、計画を立てて指導案を書いて授業をやってみようと思うけれども、生徒が違ったように動くとか、思ったとおりにいかないということが日常で、それをうまく動かしながらか折り合いをつけながらやっていくというのが日常なものですから、行政の方々はそれを、下と言うとあれですけども、下々がどう動くか分からないところにメッセージを発

して、その動きをどういうふうに捉えてどんなふうにマッチさせていこうとされているのかなというのはちょっと聞いてみたいと思ったところだったんですけども。

宮本友弘教授（討議司会）：

お願いします。

浅田和伸所長：

学校は、子どもたちも先生もみんな生きた人間なんだから、誰かの思いどおりになんかなるはずがありません。授業に限らず、私たちの行政の仕事だってそうです。こうしていきたいと思っても、現実にはいろんなことが日々新たに起き、普通はそのとおりに進みません。だから、自分の最初の考えに固執するのではなく、相手や周りの状況をより大事にしながらきめ細かく柔軟に対応していくことが必要だと思います。

行政が現場をどう見ているかをお答えする力は私にはありません。私個人がどう考えているかを少しだけ述べさせていただきます。私自身は、今日の先生のお話でも近いことがありましたが、現場が元気であってほしいと願っています。そのためには、できるだけ現場が自由にできるようにすべきだというのが私の考えです。だから、ああすべきだ、こうせよなどとなるべく言わないほうがいい。現場が自由に判断、行動できる仕組みにしておいて、かつ仕組みだけでは動けませんから、人や予算などの条件、環境面で支援する。教育行政は、実際に教育を行う現場を縁の下で支える黒子です。行政が前面に出て目立つのはいいことじゃないと思っています。

宮本友弘教授（討議司会）：

よろしいでしょうか。

次に、倉元先生。倉元先生から他のパネリ

ストに対する質問等がありましたら、よろしく願いいたします。

倉元直樹教授：

さっき延沢先生が言われた話を拾いたかったですけれども、それをちょっとここで話をさせていただきます。「PBL 派」と「入試実績派」というふうにレッテルを張りましょうか。これは何かというと、要は伝統的な政策理念の「個性尊重」と言われている「その場で、その子たちの生きる楽しさみたいなものを重視しよう」という話と、「将来支える人材を作っていこう」という話に分けられる。ちょっと後者はきれい過ぎるんですけどもね。大学入試が間に入ってしまうので、「大学に入ってしまうば終わり」というパターンの人も結構多いので。とにかく、「本当の力はないんだけど、入試のテクニク的に入れてしまえばよし」、という向きはちょっと除くとして、そこの理念の対立なんだろうと思うんですね。

私自身はちょっといろんなことを考えてみて、自分自身どういう発想でいるかということ、おそらく「将来の人材をどう育てるか」という観点で考えているのでしょう。これは東北大学というところに立場を置いていることが一つ大きな背景にはあると思うんですけども、その観点から見たときのロジックのねじれがすごく気になるんですよ。申し訳ない、PBL、多分楽しいと思います。でも、先ほど延沢先生がおっしゃったように、積み上げていくのは非常に難しい。不可能ではないとしても、大変な時間と労力、そしてお金がかかる。現実的じゃないはずなんです。だから、申し訳ない、そこに逃げている先生たちは、私は信用できないです。

もう一つ、行政からのメッセージで、これは間違っていたらそうやって言ってほしいん

ですけれども、多様な現場というのは分かっている、でもメッセージとしては一色で一律で出さないといけないんですよ、おそらく。それを自分たちに100%向けられているものなのかどうなのかということを、本来は現場で判断してくれ、というところを許容してもらえないと、行政は厳しいと思う。問題は間に入る人たちですね。そこのところはちょっと「言うべきときじゃないときに言うべき人じゃない人」が「言うべきじゃないこと」を言ってしまうとまずいので、そこまでにしておきますけれども、そこはちょっと考えるべき要素はあるのかな、というふうには思います。宮本先生にお聞きしたいんですけどもね。

宮本友弘教授（討議司会）：

宮本先生いかがですか。

宮本久也校長：

そこをどう判断するかというのは、これはもう校長の力だと思います。やはりそういうメッセージが出たときに、そのメッセージを自分の学校としてどういうふうに教職員に伝えていくのか。そこそのところの判断をしっかりとできるかどうかというところが、今校長に問われているところだと思うんですね。そのまま下ろすと、先生たちもととてもたないし、教育の効果もないというものもある。

ただ、メッセージの核になる部分を、じゃあうちの学校としてはこれをどういう形なら生かせるかという、そういう判断ができる校長にならなきゃいけないなと思うし、そこがやはり学校を運営するという校長のすごく大きな役割だというふうに思っています。行政から来たものを全部そのまま学校に下ろしていたら、それこそもう学校はもっともっとパンクしてしまいますので、そこをどういうふ

うにしていくのか考え判断しながら進めていくということが今求められているのかなというふうに思っています。私もいつもそういう判断で、自分の学校の経営をしています。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございます。

今のを受けて、倉元先生どうですか。

倉元直樹教授：

私、浅田さんが話すのかと思っていたんですけども。

宮本友弘教授（討議司会）：

では、浅田先生、お願いします。

浅田和伸所長：

国に限らず教育委員会もそうですが、行政がメッセージというより、いろんなことについてこうしてくださいと決めたり示したりすることがありますよね。それって私の理解では、現場が何を求めているか、どういうふうにするのが現場の負担を軽くすることにつながるかを考えてやっているはずなんです。私も校長時代は、教育委員会やなんかがいろいろ言うてくるのをうるさい、そんなこと自分で判断するよ、決めさせろよと思うこともありました。一方で、現場に判断を任されても困ることもあります。そういうのは、国や教育委員会が方針や基準を決めたほうが、学校も楽になるし、関係者への説明もしやすい。それはまさにケース・バイ・ケースです。

一方で受ける側、教育委員会や学校としては、宮本校長がおっしゃったように、また私も県教委でも校長のときもそうしていましたが、こういうのが来たけれど、うちの自治体としてはこうする、うちの学校としてはこうするという判断を責任をもってすればいい。

そういう裁きを的確，迅速にして部下職員の無駄な負担を増やさないようにすることも，管理職や校長の責任です。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございます。改めて，行政と現場との関係性というものが，現状においてどうなのかというのが確認できたように思います。若干，対話が温まってきたところだと思うのですが，少し観点を変えまして，今度は参加者からの質問に答えるというような形でお願いいたします。

阿部和久特任教授（討議司会）：

それでは，いただいた質問の中からいくつか先生方にお尋ねしたいと思います。浅田先生とそれから宮本先生，延沢先生みんな含みますけれども，今日の話を聞いて対話が重要だということは理解できたんだけど，一体どういう場でその対話をしていけばいいのかという質問が，延沢先生のように先生のほうからとか，あるいは行政のほうからとか，どういう場があるんだろうという質問が何種類か来ていますので，まず延沢先生，その一次情報を取りにいくというのはすごいねというふうに書いてあるんですが，そのほかにどういうところで我々先生たちは対話の機会を持てるだろうか。

延沢恵理子教諭：

直接行く。

阿部和久特任教授（討議司会）：

直接行くのほかには。

延沢恵理子教諭：

直接行くのというのしか知らないです，私は。

阿部和久特任教授（討議司会）：

そうですね。じゃあ，直接行く以外も知っている人で，宮本先生はいかがですか。



宮本久也校長：

さっき私が言ったように，フォーマルな対話とインフォーマルな対話というのがあるわけで，フォーマルな対話のときには，そこに参加するときに事前に多様な声をしっかりと受けとめた上でその対話の場に臨むということがすごく大事だと思うんですよね。そうじゃなくて自分の経験だけで話をしてしまうと，十分な対話にはならないので，特にフォーマルな対話の場合，私もそうでしたが，周到な準備をしていくということを心掛けていました。準備なしに対話の場に臨んでしまうと，結局は自分の言いたいことも言えないし，十分な対話ができないというので，やはりそのところはすごく大きいと思います。

それから，インフォーマルの場の対話というのは，これはやっぱりまずお互いがそれぞれ意識をして，とにかくいろんな人の話を聞くというスタンスでいることがどういう場面でも大事なのかなというふうに思うんですね。これは学校の中でも多分そうで，先生方今忙しいからそんな対話している暇ないよと僕なんか言われそうですけれども，先生方が学校

の中でそういう話をする必要があると思います。今一つのことについて対話をする場面というのは、昔に比べると学校現場でもすごく少なくなっていると思います。もう言ってもしょうがないとか、学校の中でもそういう雰囲気が出てきているし、あるいはフォーマルな我々と行政の方との対話のほうも、行政に言ってもこれはしょうがないなというような感じで、言うことすら諦めてしまっているというような状況が出ているかなと私は思うので、そうじゃなくてやはり声を出してみる、あるいは出した声を今度は聞いてみるという、そのところから始めていくことが大事なというふうに思いました。

阿部和久特任教授（討議司会）：

ありがとうございます。

浅田先生はいかがですか。

浅田和伸所長：

対話自体は大事に決まっていますが、その前提として、学校現場は、大学も含めて、遠慮しないでもっと声を上げたらいいと思っています。今日も、小中に比べて高等学校は声を上げるのが得意じゃないというようなお話もあり、そうかなと感じるところもありますが、とにかく遠慮しないで声を上げればいいのに、というのが一つ。正直なところ、私から見ても、国がやる施策の中で、これは現場は受けるのが大変だろうなと心配になることもあるんですよ。だけど案外、私が心配しているほどには現場から反発や困惑の声が出なくて、えっ、本当にいいの、と拍子抜けすることもあります。奥ゆかしすぎるんですよ。個人の人間関係でもそうでしょう。言わなきゃ分からないことだってあるんだから、まず声を積極的に上げましょう。

2 つ目は、そうは言いつつ、教育に関する

いろんな人のご意見は、私も含めてですが、どうしてもたくさんある意見の中の一つになりがちなんです。あるいは、そう見られがちなんです。そういう意見もあるだろうけど、でも違う意見もあるよね、で片付けられてしまう。結局バラバラのままでは力にならない。力を持たないんですよ。そこに力を持たせるには説得力のある意見の示し方が必要で、一つにはたくさんの声を集めること。もう一つは研究や調査結果などと結びつけて、エビデンスで示せるものは示す。そうやって、ほかの人が聞いたときに、そういう意見もあるよねと流されるのではなく、それは本当に大変だなと理解してもらえるような根拠のある示し方をするのでしょうか。

さらに付け加えると、対話の当事者も一生懸命勉強して、お互いのこと、現場のこと、関連する分野のことなどを幅広く知っておかないと、客観的な判断ができにくいということがあります。ある意見や事例を聞いたときに、それが全体の中でどれくらいのウエイトを占めるのかとか、どれくらい信憑性を持つのかとか、そういう判断ができないと実のある対話にならないですから。審議会や有識者会議でも、構成員の方のご意見が必ずしも現場で多数であるかどうか、多数の支持を得られるご意見かどうかは分からないわけです。声の大きさや発言力で重みをつけるわけにいきませんよね。それが全体から見てどうなのか、どれくらい普遍性を持つものなのかを判断できる、考えられる知見は、やはりそれぞれの当事者が一生懸命勉強したり、あちこち見に行ったり聞きに行ったり感じたりして自分の中で育てていかないといけないと思います。

阿部和久特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。すごく分かりま

した。

倉元先生、何かありませんか。

倉元直樹教授：

対話には場が必要だと、私は思います。それで、これはテーマが「大学入試」なんですよね。最初に私の講演でも申し上げたんですが、大学入試というもののイニシアチブはどこが持っているかという、個別大学なんです。ですから、こと大学入試に関しては、大学が対話の場を用意すればいいと私は思っています。ただ、要は時間的・人的限界というのがあるから、すべからず遍く全ての対象からお話を聞くというのは難しいんですけれども、やはり主要なステークホルダーってあるじゃないですか。東北大学という立場でいえば、誰から話を聞けばいいのかというのは、おのずからある程度明らかなんですよ。ですから、そういう意味では、大学入試に関しては大学が場をつくればいいんだろうなと思います。

ただ、例えば行政に関していうと、私たちが場をつくることはできないんですよ。それはやはり行政のほうからお声がけがあったときに、自分の意見だけではない、ある一定程度自分たちも含む幅広い実情だとか、意見だとかというのを用意してお伝えする。その準備は宮本先生が言われたことと一緒にのかもしれないんですけれども、必要かなと。ただ、それに関しては、決めるのはそういう立場の方ですから、そこは自分たちでイニシアチブを執るのは難しいとは思っています。

阿部和久特任教授（討議司会）：

ありがとうございます。ちょっとさっきの話を先走って申し訳ないんですが、あらかじめ伏線を張っておいたほうがいいだろうと思いますので、宮本先生にきた質問で、教科情

報に関して、任用など東京都の現状や課題などについてお話をお聞きしたいということでした。つまり、田舎のほうの県と比べるとかなり恵まれているのではないかなというふうなことを踏まえての質問だと思います。

宮本久也校長：

東京都は、もう早い段階からいわゆる教科情報の正規教員も配置していますので、そういう意味では、教科情報についてはほかの教科と全く同じで、正規の教員がもうかなり早い段階から生徒に指導をしてくれています。私の学校でも専任の教科情報の教員がもうずっと前から定数として入っていて指導をしている。ただ、そういう都道府県というのは、全体から見ると少数なんですよ。ほとんどのところは正教員がまだ置けていない。

置けていない理由はいくつもあるわけで、やっぱり学校のクラスが少ないというのも一つの原因だと思うんですね。教員の持ち時数というのがあるわけですから、例えば私の学校は8クラスです。ですから、情報の授業を週2時間ずつやれば週16時間になって、担任を持って何やってという、大体1人の教員が担当すべき時数を確保できますけれども、これが4クラスしかない学校だと時数は半分しか出ないので、やっぱり正規の教員を置けないんですよ。だから、置いていないというのは、実はそういうような状況もあるので、そういう状況もしっかりと我々も伝えていかなくちゃいけないし、理解してもらわないといけないかなと思います。

ただ、教科情報について私はやっぱりすごく懸念をしているのは、つまり、今回初めてなんですよ、共通一次から始まる現在の共通テストの枠組みの中で新しい教科の入試が行われるということは。今まではもともとある科目が変わってということですけども、今

まで教科情報というのはこれまで試験やっていないんですね。それが今回共通テストの実施科目に入っていくということで、このことの重さということについては、もっと理解をしっかりともらいたいと思うんですね。つまり、教科情報は今まで全く試験がなかったわけですから、どういう内容のものがどういう形で出されるかということについての情報は全くないわけで、そういう中で、もう今本校でもその試験を受けることになる1年生が教科情報の授業をやっています。けれども、何の情報提供もない中で共通テストの準備をすることはとても難しいです。早く共通テストに関する具体的な情報は開示していただきたいと思います。ちょっと話がそれましたが、以上です。

宮本友弘教授（討議司会）：

情報に関してはたくさんご質問が来ておりますので、もう少し後で集中的に議論したいと思います。その前に、まずこれを考える前提として、倉元先生のご発表の中であったコンプライアンスというのが一つ大きなキーワードだったと思うんですね。それが結果的にリソースのないところにしわ寄せがいくとのことだったと思います。このあたりを含めて、もう少しコンプライアンスについて補足していただけるとありがたいのですが、倉元先生、どうぞ。

倉元直樹教授：

コンプライアンスということ自体は、言葉として新しいんですけども、法治国家であれば当たり前のことなんだろうと思います。ですから、規則があってそれに従う、それは当然なんだけれども、大事なものは倫理も含めた社会的規範ということが大事で、場合によっては有名無実化している規則みたいなもの

あり得ないわけではないと思うんです。そのときに、大変申し訳ないですけども、文部行政に関して私が感じるところは、我々のために環境、具体的に言えばお金を確保するというのがすごく大事で、これは要は財政当局とのやりとりになる。これは地方でも同じだろうと思うんですね。そこで認められるには「今、足りないんです」と言ってもなかなか難しいと。新しいアイディアを出して、「それはいいね」と言ってもらわなきゃいけないんだけど、そのときにスクラップ・アンド・ビルドですね。その代わりに何をなくしていくかということが今までできていなかったのかなと思うわけです。

これが要は、以前から、必修修の科目、「実際にはやっていないよね」ということは、分かっているわけじゃなかったんだろうと思うんですよ。それが、そういうことを許さないという時代になってきたときに、対応が遅れてしまったのかな、という気がします。ただ、これは現実的には非常に難しいことで、「引かれる」ということは「なくなる」わけですから、なくなるということは何がなくなるかということ、場合によっては、そこに携わっていた人たちの働く場がなくなるんですね。そこはものすごいせめぎ合いというのが多分あるんだろうと思うんだけど、もうそこにきちんとある種の議論を避けることはできない状況なのかな、と思うのです。

我々のほうは我々のほうで、入試ということに関していえば、繰り返しになりますけれども大学にイニシアチブがあるので、そこは対話の中で判断するのは個別の大学の責任だろうと思っています。

コンプライアンスということかというと、そういう感覚で考えているんですけども、答えになりましたでしょうか。

宮本友弘教授（討議司会）：

特に重要なことは、今お聞きして、何かを足すなら何かを引くと、そういうようなことを考えていく必要があるということだと思うんですが、浅田先生、そういった観点からいかがでしょうか。



浅田和伸所長：

私なりの解釈をすると、倉元さんが言っているコンプライアンスというのは、例えば必修科目、必修だから本来やらなきゃいけないはずなのにやっていなかったとか、そういう意味での問題を指摘されれば、それはやっていないわけだからやらなきゃいけなくなる、それで余計負担が重くなると、そんなことだろうと思います。

それについては、いくつか感じるがあります。ここから先は私個人の考えになりますが、そもそも高校で全員が必ずやらなきゃいけない必修科目がどのくらい必要なのかということから問い直してもいいんじゃないでしょうか。義務教育は全ての子どもたちに最低限これだけという性格ですから、みんな必ずやろうねという内容が基本になるのはある意味当然だと思いますが、高校は義務教育の後で義務ではないですし、進学率が高いとはいえ現に全ての子が行き卒業するわけではありません。そもそも一律の必修科目が

必要なかと私自身は思っているくらいです。義務教育の後には自由に、好きなこと、得意なことをいくらでもやれる場、伸ばせる場にしておいたほうがいいんじゃないですかね。コンプライアンス違反が起こるから必修科目を減らすというのではなく、そもそも高校教育ってどういう力を伸ばす時期なんだろうねということから考えたほうがいいんじゃないのかな。これはあくまで私個人の意見ですが。

もう一つは、高校に限らず、スクラップ・アンド・ビルドの話です。例えば学習指導要領ですが、本来は授業時数と学習内容とはバランスを取らなきゃいけないはずですよね。この時間数だったらこれぐらいは教えられるよね、こんなには無理だよと。そういう全体のバランスを見ながら組み立てるべきです。だけど現実には、授業時数はかつてよりも減っているのに、学習内容はそれに見合うようには減っていませんよね。どちらかというと、あれも大事、これも大事、新しく出てきたこういうことも教えなきゃいけないよね、だけれど前からやっているこれも教えなくていいわけじゃないよね、ということの積み重なりでどんどん盛りだくさんになっているのが実態じゃないでしょうか。

また、これはなかなか難しいことですが、同じ内容を子どもたちが学ぶにしても、生徒によって10時間で足りる子もいれば、30時間でもきつい子もいるわけで、そこは一律にはできませんよね。だから、そういうことも実際の現場を基点にして、現実はどうなんだから、その現実を見ながら仕組みも組み立てていかないと、良かれと思ってあれもこれもと求めた結果、肝心の現場が対応できない、ルール違反なんかしたくないけどそうなっちゃうというのは非常にまずい。ですから、難しくても言い続けなきゃいけないのは、スクラップ・アンド・ビルドを基本にすべきだと

いうことと、授業時数と教える内容のバランスをちゃんと見るべきだということでしょうね。

また、スライドの終わりのほうに岡本薫さんの、日本で教育の議論が噛み合わない理由を少しだけ引用しましたが、そこでも言われている、全ての子どもに必要なこととそれ以外のことが区別されていないという問題もあると思います。何々が大事だねとなると、じゃあ日本中一人残らず全員にやらせなきゃという短絡的な傾向が強い気がします。だけど、本当ですか、というのはやはり冷静に考えないと、学校も子どももパンクしちゃいますよね。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございます。

今の発言を受けて、延沢先生、どういったご感想をお持ちでしょうか。

延沢恵理子教諭：

いや、こんなに分かってくださっているのに、たくさんそういう方も行政の方にはいらっしやるんだろうなと思うのに、なぜそのままなんだろうというのがとっても不思議と思って聞いておりました。

浅田和伸所長：

それは、誰か特定の人が決められるものではないですから。特に学習指導要領は、さっき倉元さんが触れていたように、それぞれ自分のご専門の教科がすごく大事だと思っている人が大勢いるわけで、それ自体は否定のしようがないんだけど、それを全部足し合わせて学校に持っていく、子どもたちに持っていくとどうなるか。全体を調整する憎まれ役がいけないといけないと思います。

延沢恵理子教諭：

話し合っても、対話をして、そういうことが起きるということですか。

浅田和伸所長：

対話といっても、全ての人の意見がぴったりに一致するなんてあり得ないです。現実には、最大公約数的なところを見ていくというのが一つと、もう一つはものすごく困る人が出ないようにするということですかね。

実際に政策をつくっていく中では、基本的にはみんな自分の意見が正しいと思っているわけですよ。だから、正しいと正しいのせめぎ合いなんですよ。その中で実際にどれを政策として取り上げるかというのは、説得力や実現可能性、予算や定員措置などの裏付けといったことなども含めて、やはりある種の力が必要です。だから、それを持てるように組み立てていくことが必要なんだろうと思います。対話をしたら自動的にうまくいくというものではないように感じます。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございます。

倉元先生、いかがでしょうか。

倉元直樹教授：

「大学入試は妥協の芸術」というのは、私の造語ですけれども、教育現場はほかのところでもあると思うんだけど、絶対に互いに成り立たない筋と筋のぶつかり合いなんです。それって何かというと、対話じゃなくて、おそらく、実際はパワーゲームになっているんですね。本当はそれを上から調整できるという立場なり、そういうものがあればいいんだろうけれども、なかなかそうはならない中で、行政の人でも大変苦労しているということは、我々は理解しなきゃいけない。

その中で、多分、今、議論の外にあるのは研究の役割なんですけれどもね。研究者が、・・・これは私の偏見かもしれないんですけども、・・・大学入試を語るときに、ほとんどの人は自分の分野の応用だと思ってこれに当たっている。これは、非常に不幸なことだと思います。例えば、久保先生や私は「教育測定論」という分野で学んできた。その中で、今、例えば、共通テストの得点調整の仕組みなんかは不満があるわけですよ、例えばね。この不満を解消するには自己採点という制度をなくして、自動的に調整した得点を受験生に知らせれば良い、みたいなことはある程度分かっているんですけども、でも、それをその論理で貫いてしまうと、また別なところで不具合が出たりするわけですよ。だから、そのところは、多分、ある意味、学者のモラルというのが問われるのかな、と思います。

大学入試を専門にする研究者というのが出てきてほしいな、というのは私の切な願いだし、この場を借りて・・・「言うべきときじゃない」と言われれば、もしかしたらそうなのかもしれないけれども、・・・訴えろとすれば行政にそういう後押しをしてほしいな、と個人的には思うところです。



宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございます。エビデンスについ

ては、浅田先生も延沢先生も強調されていたと思うんですが、エビデンスって基本的には研究に裏づけられていることが含意されています。そのあたりについては、浅田先生はいかがでしょう。

浅田和伸所長：

もちろんそうです。また、研究だけではなく、教育現場の実態、実情といったものもエビデンスだと思っています。よく言われるように、教育については、何かを行ったとしても、その効果だけを取り出して示す、測るということが非常に難しい。だからどうしてもビッグデータを使って相関を見るとか、あるいは、これは説得力の面では弱いのですが、個別の事例を示すとかいうことになるんですよ。

だけど、ビッグデータはともかく、個別の事例が、理解しようとしなくていい人に対して説得力を持たないのは分かりきったことで、だからこそ、そこに理論的、学術的な裏づけが欲しいところです。一連の高大接続改革の議論の中でも、関係会議のメンバーの中に、数は少なかったですがテスト理論などの専門の方もおられて、それは我々が説明などをしていくときに非常に頼りになりました。恐らく関係者、世の中に対しても説得力を持つと思うんです。そういう意味では、研究との連携は、行政としても、また現場も欲していると思います。現場を良くすることにつながるような、いい形での連携がもっとうまくできないかな、と思います。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございます。

お時間も少し迫ってきましたので、先ほど申し上げた情報を含む令和7年度入試、それについてお話を進めたいと思います。これに

については、先ほど倉元先生のご発言の中で、大学入試に関しては個別大学が責任を持つとありましたので、それを踏まえて、倉元先生、最初に行きますか。それとも宮本先生から行きますか。

倉元直樹教授：

令和7年度入試ですか。

宮本友弘教授（討議司会）：

に向けてですね、新学習指導要領対応ということですが、はい。

倉元直樹教授：

東北大学に関して言うと、今、議論を進めているところなので、私の立場で今言えることは特にないです。ただ前提として言えば、一つは情報という分野が重要だということは、少なくともコロナ禍を通じて非常に浸透したことは浸透したと思うんですよ。ですので、東北大学でも、教育の中で情報を非常に重視した教育を行うということ始めていますし、高等学校でも体制は整備してほしいというのは大学からの要請としてはある。問題は、大学入試のところでどうかという話に関して言うと、これからそれこそ対話を重ねていくという必要があるのかなというふうには思っています。以上です。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。

宮本先生、お願いいたします。

宮本久也校長：

今年の1年生からですけれども、今高等学校はどの学校も教育課程が2本に分かれていますよね。2、3年生はいわゆる前の教育課程、1年生だけ新しく学習指導要領が変わ

って教育課程が変わった。新しい学習指導要領は、今までの学習指導の改訂のものとは全く違うんですよ。つまり、今回の改訂は教える内容だけでなく指導法や評価のあり方など質的な改革がものすごくされています。ですから、これまでのものとは全く違うと言ってもいいと思うんです。例えば国語なんかにしても、もう科目名からそもそも違ってきますし、いわゆる学力の定義自体が、学力の3要素に示されているように大きく変わっているし、それに基づいて教えていく、評価をする。

だから、今の1年生が受験をする令和7年度入試は今までと同じじゃないんだよということを、まずは大学の先生方に理解をしてもらいたいと思うんですよ。つまり、我々はそこで教え方を変える、あるいは子どもの学びを変えるというところで今試行錯誤をしているので、そのあたりのところを早い段階からぜひ大学の先生方にはしっかりと理解をしてもらいたいと思います。そうした理解がなく、今までの科目のものをちょっとこう変えたぐらいの入試で評価をされると非常に困ります。だから、どこがどう変わっているのかというのを、しっかりと大学の先生方にはぜひ理解をしてもらいたいと思います。

同時に、やはり2年前には変更の内容をある程度を示していただかなければ困ります。そんなにもう実際時間はないんですよ。ただ、学習指導要領自体はもう何年も前に出ているわけですから、教科書だってもう今はどんどん出てきているわけですから、大学側も準備はできるはずなので、ぜひそのところはしっかりとお願いをしたい。そうじゃなければ、高等学校がせっかく今学びを変えようとしているのに、その変えようとしている学びを入試で評価してもらえないのであれば、結局また学びが元に戻ってしまいます。ですか

ら、ぜひそのところは大学の皆さんにお願いしたいと強く思います。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございます。

延沢先生がご発表の中で無理と思いきりおっしゃっていたんですけれども、これまでの議論を踏まえて、どうぞ。

延沢恵理子教諭：

無理ですよ。ていうか、量が多過ぎませんか。それでなくてもやっぱり生徒たちにちゃんと、何ていうんですかね、授業の中でそれぞれの教科が、例えば私、国語ですけれども、国語の世界と繋がるというか、そういう学びをさせていきたいじゃないですか。数学の世界と繋がる、理科の世界と繋がるというのが多分授業の中での本質だと思うんですけれども、そこから始まって学問の世界に入っていく子どもたちになっていくんじゃないかなと思うんですけれども、それができる余裕がないというのは何かおかしいなってやっぱり感じます。

先ほど宮本先生おっしゃったように、育てたものを測ってほしいとは思いますが、子どもたちは受験のために生きているわけじゃないので、その後も続く学びというか、自分で学んでいける力というか、そういうところをやる時間が欲しいなあと、国語面白いなと思う生徒を育てたいなと思います。

宮本友弘教授（討議司会）：

その背景として、倉元先生がご指摘していた飽和したカリキュラムというお話があったんですが、倉元先生、どうでしょうか。

倉元直樹教授：

大学というか、東北大学というところの立

場では、・・・私がこういうふうに言っているのかどうか分からないんですけども、・・・最終的には将来の社会を支える人を輩出する必要があるんですよね。そこは譲れない。だから、いろんなメッセージが出ている、そのターゲット、中心がどこにあるのか、ということは考えたい。将来にわたって活躍できる人を育てることに反しているんだったら、これちょっと私たち中心にしたメッセージではないのかもしれない、というふうには考える必要がありますよね。

当然、現場でできることは何か、そこは先ほど申し上げたように、これは多分非常に大事な原理だと思うんですけれども、高校時代にその場を充実した形で、生きる希望をそこで得るというようなことが必要な子ども、いると思うんですよ。そのメッセージなのか、どうなのか。それとも将来の社会を支える人はこういう形でないと育たない、という話なのか。私自身は、先ほど講演のところであらうと言いましたけれども、多分、ねじれて発信されていると思っています。ですので、将来、日本の社会あるいは世界を支えていく人たちを出す大学だという前提で言えば、東北大学は、多分、そういうスタンスでメッセージを出すんだろうなというふうに思います。私が決めることではないので、そう思います。

宮本友弘教授（討議司会）：

今の踏まえて、浅田先生、ちょっといろいろ難しいところもあると思いますが、お願いします。

浅田和伸所長：

情報の扱い自体は、私は決めるところに全く関わっていないので、何とも言いようがないですし、言うべきでないと思います。国大協でも随分議論されたことも知っています。

ただ、この手のことは、報道で表に出ること以外にも、実際には当事者以外の目からは見えにくいことが多々あるものなので、それを知らないまま、はたから見たらこうだよねというようなことは、私の立場では控えるべきだろうと思います。

せっかくなので、今日は主に大学関係の方が多いと聞いていますから、投げかけてみたいことがあります。宮本先生から、大学入試についての対話では高校関係者と大学関係者がもっとイーブンに、五分五分ぐらいの割合で関わるといいなというお話がありました。大学側の本音はどうなのでしょう。私は大学入試センターや高等教育局にもいましたが、率直に言って、多くの大学関係者の方から非公式の場で聞いたのは、大学入試は大学のものであるから大学が決めるべきである、高校のものではないという声が強かったです。表ではそう言わないかもしれないですが、実際にはそういう感覚の大学関係者も多いんじゃないでしょうか。

大学入試が大学のものであるということ自体の正しさはさておき、現実に高校教育に大きな影響を及ぼしているのは確かです。そこは高校関係者と大学関係者との対話がもっとあっていいんじゃないかという気が私もあります。腹の中に別の本音を隠したまま、表面的な対話をしても仕方がないでしょう。この手のことは、本音で議論しないと進みませんから。

宮本友弘教授（討議司会）：

そうですね。宮本先生の発表にあったインフォーマルな対話も含めて、胸襟を開いて本音で語り合えると、そういうような状況をつくり出していくことはすごく重要だと思います。

さて、もっともっといろいろお話聞きたい

ところなんですけど、終わりが迫ってまいりました。最後に、今回のテーマも含めまして、参加者の皆さんに向けてメッセージをそれぞれ一人ずつ発していただきたいんですが、倉元先生、何かありますか、その前に。



倉元直樹教授：

私に振られるのは、最初に振られるとちょっと思っていなかったので……。

宮本友弘教授（討議司会）：

いやいや、先生、まとめに行く前に、何か先生のほうであればと思っただけです。

倉元直樹教授：

いえ、今日、私自身は企画者の立場もあって、そういう立場で言うと、結構、面白い話聞けたかなというふうに、一聴衆としては思いました、参加しながら。

宮本友弘教授（討議司会）：

ちょっと自画自賛も入っております。

倉元直樹教授：

そういうことじゃないんですけれどもね。

宮本友弘教授（討議司会）：

それでは、最後、参加者の皆さんに向けて

メッセージということで、延沢先生からお願いできますか。

延沢恵理子教諭：

「声を上げろ」というふうに言われても、大学の先生に囲まれて、高校の教員として、これ正解なのかな、これ言って大丈夫かなとかという中で話するという、今まさにその状態なんですけれども、それを言うというのはなかなかこう勇気が要ることだなというふうに感じます。でも、正解じゃなくてもいいかなとちょっと思っていて、今この場でも「馬鹿だと思われているかもしれない」とも正直思いますけれども、でも、そういうことを胸襟開いて話していく中で、大学の先生が下りてきてくださるというのを体験するのも一つかなんていうふうに思っているところです。

あわせて、私は中学生だった生徒たちに、「世界が100人の村だったら、大学に行く子は1人なんだよ」って話をして、「残りの99人の幸せを考えるのが大学に行く人間の使命なんだよ」と教えてきました。それを、自分自身も未熟者ですけれどもやっていこうかなと思って生きているので、ここにいらっしゃる先生方と一緒にやっていけたらいいなというふうに感じているところです。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。

宮本先生、お願いいたします。

宮本久也校長：

やっぱり対話って大事だなという、今日もこうやってこのテーマでお話をしていく中で、私自身も考えが深まったり、あるいはこういう考えもあるなと考えが広がったりということで、やはり思っていることを声に出して、

そこでお互い言いたいことを言えるような状況というのを、どういう場でも私は作っていくということが大事だと思います。もう一つはやっぱり会話の前提は想像力だと思うんですよね。相手はどう思っているのかなということをやっぱりお互いが思い合うということですよね。つまり、絶対自分が正しいということはあり得ないんで、多分私はこう思うけれどもというところがあって、じゃあ他の方はどう思っているんだろう。だから、やっぱりお互いそういうことで相手に対する想像力というか、そういうものを働かせながら対話をしていくということが、もっとももっといい結論が出るような対話になるのかなというふうに思いました。以上です。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。

倉元先生、お願いいたします。

倉元直樹教授：

どういうふうにまとめようか、迷いながら宮本先生のお話を聞いていたんですけども、対話に臨むためには、やはり自分の中にきちんとしたインプットが必要なんだなというのを改めて思った次第です。だから、多分、私は入試ということだと語れると思うんだけど、それ以外の雑多なテーマに関して語るだけの見識があるかというところじゃないということは、一研究者としては学者としては心に銘じておきたい。その上で、自分が分かっていることは分かっている、分からないことは分からないという形で対話に臨みたいというふうに思いました。以上です。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。

最後に、浅田先生お願いいたします。

浅田和伸所長：

ごめんなさい。私が最後というのは変だなと思うけれども、2 つ申し上げます。一つは、今日、私は主に高大接続改革の経緯の話をしました。その中でも申し上げたつもりですが、ごまかす気はありません。批判は受けとめなければいけないと思います。また、力不足を反省しなければいけないとも思っています。今後、ほかのことも含めてですが、こんなようなことにならないように生かしていかなきゃいけません。

2 つ目は、今日の話でもかなりの部分、私個人の見方や経験などを述べさせていただきました。特にこの討議の時間は、かなり自分の意見も言わせていただきました。一個人の意見にすぎないといえばそのとおりですが、現場や大学と同じように、行政もまた生身の人間がいろんな思いを持ちながらやっているのだということは、ほんの少しでいいですけども、知っていただける機会になったかなと思います。どうもありがとうございました。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは、時間となりましたので、これで討議を終了させていただきたいと思います。

4 人の先生方、どうもありがとうございました。

（拍手）

閉 会 の 辞

東北大学理事・副学長

滝澤 博胤

久保沙織准教授（司会）：

それでは、最後に主催者を代表して東北大学理事、滝澤博胤より閉会のご挨拶を申し上げます。

滝澤博胤理事：

本日、あっという間に4時間経ってしまいました。高等教育フォーラム、今回は「教育行政と現場の『対話』」ということで、大学入試、高大接続、入試改革というものを題材に、現場と行政、これまでコミュニケーションどうだったかと、あるいはこれからどうあるべきかということをご議論いただいたと思っています。このフォーラム、いつもこの最後の討議がメインイベントのようなもので、大変盛り上がったと思っています。今日、ご講演いただき、そして討議、進めていただきました4名の先生方、大変ありがとうございました。

私も今、教育学生支援担当という立場ですので、いろんな難しさは理解しているつもりでございます。特に教育というのは100人いると100の意見があって、またみんな全員自分が正しいと思っているので、決してかみ合うことはないんだと思っています。ただそうした中でいかに最適解を見つけるかと、正解とは言いませんけれども、その最適解を見つけていくというのが私たちの仕事だと思っています。そのためにも、いろんな題材をポケットに詰め込んでいかなければいけない。それが対話の重要性だと思っています。これから、本学としても入試説明会、進学説明会の時期を迎えてまいります。高校の先生方あるいは高校生、保護者の皆さんともいろんな対話を



していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

最後、私、この高等教育フォーラムですね、毎回このポスターの絵に一言コメントして締めるというのがパターンになっていると勝手に思っているんですけども、今回この「大学入試政策を問う」ということでこのブロックの絵が出てきて、題材からするとこのブロックが大学入試なんだろうなと思いました。高みを目指して上へ上へ積み上げていくと、どこかで傾いて倒れちゃうよという絵のようにも見えるんですけども。よく見るとこの下の土台の部分、このブロックの基礎があって、その下の土台の部分がそもそもバラバラでガタガタになっていて、多分ここがきちんと平らに整地されていると、もっともっと高くブロックを積み上げられるんじゃないのかなあと思っています。ここの土台をきちんと整える、整備するというのが高校と大学と行政、その対話を通じて果たしていく役目なのかなと思った次第です。また、来年どういうテーマでこのフォーラムをまた迎えるかというのも楽しみにしていますが、私自身は来年はどういうポスター作るかなという

ころを気にしているところでございます。

今日はどうもありがとうございました。また、次回もご参加いただければと思っております。ありがとうございました。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

以上をもちまして、本日のフォーラムを終了いたします。進行の不手際で 10 分程度の遅れが出てまいりまして、申し訳ございませんでした。お忙しい中、最後までご参加いただき、誠にありがとうございました。

講評

講評 1：第 36 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

八戸学院大学

学長補佐 一戸 利則

(前 青森県立八戸高等学校校長)

1. はじめに

東北大学高等教育フォーラム事務局の久保沙織先生からご連絡があり、今回のフォーラムの講評のお話をいただいた。久保先生の母校に校長として勤務していた時には講演等でお世話になっており、及ばずながら喜んでお引き受けすることにした。

大学入学共通テストの初年度を迎えるまでの数年間は、県の教育行政や県立高校長として共通テスト等への対応に追われ、特に学校現場では学校としての判断の難しさを痛感してきた。この期間、本フォーラムでは意欲的に「主体性とは何だろうか」、「大学入試を設計する」、「検証コロナ禍の下での大学入試」などのテーマを設定し、高校現場を勇気づけてくれるような示唆や提言を次々としていただいたことは誠にありがたいことである。さて、今回の「大学入試政策を問う——教育行政と教育現場の対話——」はとても楽しみなテーマ設定と感じた。何事にも対話は基本であり、大学入試政策を対話の視点から考えることは必要かつ重要なことだと思ったからである。これまでの自分の経験と突き合わせるとともに、御講演・御報告される方々が各々の立場で「対話」についてどのように捉えているかに興味を抱きつつ拝聴した。

2. 基調講演1について

浅田氏の基調講演では、最初に学校現場と教育行政が繋がるためには相互の信頼が必要であるという考え（願望）を示しつつ、文部科学省と自民党、そしてご自身の関わりなどを通じて政策決定の内側を紹介していただいた。大学入学共通テストが実施されるまでの

プロセスを時系列で整理していただいたことで、高大接続改革があまり時間的余裕のないまま進んで行ったことが見て取れ、その状況下で役割を果たしてこられた浅田氏の御苦労には頭が下がる思いであった。

今回のテーマである「対話」が、このプロセスの中でどのように行われたかについては気になるころであったが、浅田氏が「少なくとも大学入試改革では、そう単純なことではなかった」と話されたことから、大学入試政策における対話は、一筋縄では行かなかったように思われた。

対話を実現するには相応の時間と労力がかかることから、実際のところ簡単に対話ができるかといえばそうでもない。しかしながら、私のわずかばかりの行政経験の中では、ゴールの時期が決まっている作業であってもできる限り各方面との対話に留意してきた。つまり予想外のトラブルを回避するためである。国レベルでもきっと対話に重きを置いているだろうと考えてしまうのだが、浅田氏の「困難を最小限にという覚悟があった」、「たとえ薄紙程度の力しかなくても、異を唱えられる立場にいるなら体を張らねばと覚悟していた。」という言葉などから、想像以上に大きな課題があったものと推測した。

大学入試のあり方に関する検討会議提言からもわかるように、いわゆる「対話」の重要性や必要性が共通認識されたわけであり、対話は一筋縄には行かないことなのかもしれないが、これを疎かにすることによって教育行政と教育現場との信頼関係が揺らいでしまうことを避けなければならないと思った。浅田氏の講演から、信頼関係の維持のためにも教

育行政と教育現場での対話が重要であるという力強いメッセージを受け取ることができた。

3. 基調講演2について

大学入試政策を問う上で、コンプライアンスを切り口にした講演はとても興味深かった。率直なところコンプライアンスと大学入試との関係など考えたこともなかったのだが、講演が進むにつれてそれは解きほぐされていった。

倉元先生は、大学入試における個別大学と行政指導の関係は、令和3年度入試では大いに効果を発揮し、コロナ禍への対応では文部科学省のコンプライアンスが有効に働いたと話された。しかし、令和4年度入試では連携にほころびがあったと分析し、その原因として表層的問題点と構造的問題点に分けて説明された。構造的問題点の一つが未履修問題に端を発すると仮説を立てられ、ここで大学入試と未履修問題がコンプライアンスでつながることがよく理解できた。

振り返ってみれば、定年退職を迎える年度に実施された令和3年度大学入試は、高校を預かる身として、コロナ対応と並行して暗中模索の連続であった。教員人生の最後という感慨に耽っている場合ではなかった。学校現場が頼りとするものはやはり行政からの通知であり、校長としては進路指導部や学年が独自に収集した情報も合わせて、多くの判断材料が欲しかった。その意味でもコンプライアンスによって大きな混乱を防げたのは、本当に良かったと思う。

コンプライアンス問題の発端となった未履修問題は、多くの高校教員にとって苦い思い出であり、自分の高校はどうなのかと心配したものだった。大学合格のために（特に難関大学に向けた学力向上策として）良かれと思って行ってきた取組だったはずが突然違反行為として責められ、進学に力を入れている高校ほど厳しい目が向けられた。教科を担当した教員の表情がいまだに思い出される。確か

に表面的には高校のコンプライアンス違反なのだが、倉元先生はこれについて様々な観点から分析され、課題として高校現場の飽和状態等を挙げながら教育政策における問題点にまで言及して説明されたことには、まさにその通りだと頷いて聞いた。倉元先生の講演によって、飽和状態の緩和に向けて現場を熟知した教育行政と個別大学がしっかりと役割を果たしながら、再び混乱が生じないよう対話を深めていかなければならないと痛感させられた。

4. 現状報告1について

延沢先生の報告では、倉元先生の「今日は何を言ってもいい」という力強い後押しのもと、多くの観点から高校現場の声を代弁していただいた。

平成27年に高大接続改革実行プランが公表されてからというもの、全貌がよくわからないまま時間ばかりが過ぎて行き、延沢先生が見えないものを見える化するために積極的に行動を起こさざるを得なかった気持ちはとても共感できた。

ほとんどの高校の感想として共通テストへの英語民間試験と記述式導入は、驚き以上に困惑や焦りの方が強かったと思う。その時は青森県の校長協会としても、「e-ポートフォリオとClassi」、「英検とGTEC」、「英語スピーキングとリスニング」などを話題に意見交換が行われ、年一回開催される弘前大学との連携会議でも議論が活発だった。しかし、はっきりしないことが多すぎて具体的な方向性や解決策が見いだせないまま終わることが多かったと思う。

高校現場のストレスがピークに達した頃、まるでこれまでの努力を踏みにじるかのように英語民間試験と記述式導入を断念することが報じられ、全国の学校関係者は、徒労感と憤懣やるかたない気持ちでいっぱいになったのではないかと。どうしてこのような事態になったのかについては、「御上」にお伝えした

いことが的確に示していて、やはり教育行政と学校現場との距離が遠すぎたこと（「対話」が十分でなかったこと）が大きな原因であることは否めない。

延沢先生は、学びについても報告された。

「大事なことは手段ではなく、学びの価値を知り今よりもより良くしようと学び行動しようとするマインドを育てること」、「人を育てることは寄り添うだけではない」と話された言葉が心に残った。私は、学びをどう位置づけるかで学校の魅力が決まると考えている。学びを通してどのような人材を育成するかなどを示すことは、カリキュラム・マネジメントにも関連するものであり、生徒を軸にした学校経営の中で「学び」と「自立」をどのようにマネジメントしていくかが今後ますます問われると思っているからである。

延沢先生の報告には、多くの課題とともに解決に向けた宿題も提示されたと思っている。高大接続改革はこれからも続くことから、これまで以上に関係者同士が対話できる環境を作ってほしいと願う気持ちがますます強くなった。

5. 現状報告2について

「入試制度の変更は、受験生の将来を左右し、学校教育に大きな影響を与える。選抜する側と受検（受験）させる側双方の納得が求められ、十分な対話が必要である。」

本フォーラムの肝は、この言葉に凝縮されていると思った。宮本先生からは、大学入試でなぜ対話が難しいのかなどの問題点を報告していただいた。対話を真正面から捉えてお話しされ、私は一つひとつにそうですねと頷きながら聞いていた。

宮本先生はご自身の経験を踏まえて、特に大学入試に関しては対話が不十分であると話された。大学入試に関わるフォーマルな対話については、大学関係者と高校関係者の委員の構成人数がアンバランスであることによって、大学側の声が大きくなることや広い視野

に立った議論になりにくいことなどの悪影響を列挙し、これは会議の委員である宮本先生でなければできない分析としてとても説得力があった。

次に、大学入試においては、行政事務局の構成員に高校の現状を理解している人がほとんどいないことなどが説明され、対話が成立していない理由を示していただいた。行政事務局にも我々の知り得ない政策決定の論理や力関係などがあると推測するが、なぜ対話ができなかったのかという原点に立ち返ることが求められるような気がする。また、行政だけではなく大学の役割にも触れ、高校や受験生の声を大学にとどめないで行政にも届けてほしいという投げかけは、声を上げる場が限られている高校現場としてはありがたい言葉だと感じた。

生徒の将来のためには教育改革は必要であり、高大接続改革も重要である。宮本先生が述べられたように教育改革を実行するには高校現場の理解が大事であることから、意識的に公式・非公式な場の対話について考えていかなければならないと思った。

6. 討議について

大学入試政策における行政の在り方については、浅田氏と宮本先生から具体的な発言があり、いっそう理解を深めることができた。基本的に行政には、現場を知る力やコンプライアンスなどで不足している部分があることを指摘され、それを改善できるかどうかは今後の課題になるのだと推察した。行政に教育現場を知る人がいない（少ない）ことは致命的であるような気がするのだが、人事面はどうにもならないとしても、対話によって広く意見を収集する必要があるのではないだろうか。

今回のフォーラムを通して対話をしなければならないことは十分理解できたが、その手段について悩むところである。遠慮しないでとにかく声を上げればよいとは言うものの、

延沢先生が「声を上げろと言われても大学の先生に向かって言うのは勇気がいる」と述べたように、特に地方に住む者にとっては声の上げ方がよくわからない。その意味でも、倉元先生が話されたように大学や行政が積極的に対話の場を作ることが必要なのだと実感した。

参加者の皆さんに向けたメッセージでは、今回のキーワードと言って良い「対話」について率直な考えを述べてくださった。相手に対する想像力を働かせることが対話、対話には自分の中にきちんとしたインプットが大切などの言葉が印象的であった。

7. 終わりに

聞きもらさないようにと集中していたら、あっという間に時間が過ぎた。基調講演、現状報告、討議のすべてが有意義であった。物事を決めるために必要な対話について、大学入試政策を軸にして行政、大学、高校それぞれの立場から考えを伺い、教育行政と教育現場の関係をじっくりと考えたり、また見逃してきたことに気づかされたりと自分にとっても貴重な経験であった。これは高等教育機関に軸を置くフォーラムではあるが、高校関係者にとっても質の高い研修の機会となっているに違いない。

最後に、御講演・御報告された先生方、事務局・関係者の皆様に心より御礼を申し上げて講評を終わります。ありがとうございました。

講評 2：教育行政と教育現場の「対話」について

岩手県立盛岡第一高等学校

教諭 立野 浩

1. はじめに

第36回東北大学高等教育フォーラムにご招待いただき感謝いたします。この2年間は、オンラインでの授業や会議に慣れることを余儀なくされ過ぎてまいりました。久しぶりに東北大学を訪問し、発表者の方々の表情を見ながらその空気感を味わい、お話を聞くことができました。今フォーラムのテーマでもある「対話」の重要性、必要性について勉強させていただきましたことに心より感謝申し上げます。

2. 基調講演1について

文部科学省国立教育政策研究所長の浅田和伸氏は「教育は現場が命だ」と話された。2021年1月に始まった大学入学共通テストは、結果として受験生と高校現場と大学側に混乱を招いた。大学入試改革が簡単ではないことを物語っているが、その原因の1つとして現場と政策と研究が繋がっていない、つまり「対話」ができていないという点を指摘していた。文部科学省は、大学入試改革の実現のために精一杯の対応をしてきたはずだが、実現の可能性については検証が不十分であった。「対話」を怠り、制度設計の専門家や、批判的な研究者の声を軽んじていた。文部科学省内部には内部の逡巡があり、言うべき人が言うべきことを、言うべきときに言うことがいかに大事か、また、言うためには難しさと覚悟があることが、浅田氏のお話から伺えた。

今回の大学入試改革の目玉でもあった数学・国語の記述式問題導入や英語民間試験の利用といった改革も、学校現場の感覚では意義を見出せず、実現不可能と思われた。今後同じ過ちが繰り返されないように、学校現場と

教育政策担当者の「対話」を重ねていく必要があると考える。

3. 基調講演2について

東北大学高度教養教育・学生支援機構の倉元直樹氏は、東北大学における東北地方出身者の合格比率について取り上げていた。東北大学はAO入試の比率を拡大し、東北地方の受験生に有利な改革を行ったと認識していたが、現在の合格比率は以前より大幅に低下している。特に、2006年の未履修問題後の低下が大きい。2006年に表面化した必履修科目の未履修は、地方の高校現場における長年の慣例であった。高校現場は運用で授業時間を調整して受験科目に配分し、生徒の大学受験での合格につなげていた。さらに、現在は少子化により学校規模が縮小し、教員のマンパワーは減少している。また、生徒の進路は多様化し、それぞれへの対応が必要になっている。一般に、事業内容の膨張は、リソースがない弱いところにしわ寄せがくる。すでに飽和している学校現場が、未履修問題や学力低下に伴う東北大学合格比率の低下を引き起こしていたのではないかと指摘していた。

倉元氏は未履修問題が起こった時期と東北大AO合格率を取り上げ、学校の授業時間や課外時間が生徒の学力維持と関連していることを述べた。当時も現在も、生徒が塾や予備校に通うことが難しい地方では、勤務時間外や休日を返上して課外授業を行い、時間を作り、受験指導をしなければならないという認識は残っている。ただ、昨今の働き方改革や、コロナ禍での課外授業の縮小など、学校が生徒の時間を拘束し、また生徒側もそれを当然だとしてきた考えを変えていかなければならな

い時期に遭遇しているのではないか。現場の先生方の「時間が足りない」という考えをいかに変えていくか、手立てはあるのかなど、現場での「対話」が求められていると感じた。

4. 現状報告1について

山形県立東桜学館中学校・高等学校教諭の延沢恵理子氏は、「東日本大震災を通して、偏差値よりも大切なものに気づいた」と話された。高校は、大学へ合格する学力をつけることが大切だが、社会で生きていくための力を身につけることの方が大切である。そのため、自ら考え答えを導き出す力や、理不尽なことに耐える力をつける必要がある。小学校や中学校は生徒に寄り添う母性的な教育の場だが、高校は父性的な教育の場であり、このような力が養われる。また、他者と共存できるようになるのも高校である。現在の高校生は、我々が高校生時分よりも忙しく、やらなければならないことが多い。そのうえ、新課程入試では教科「情報」までが追加になる。時代の必要性による大切さは十分理解できるが、すべて大学入試に課すのは違う。落ち着いて指導ができるようになるには、学校現場と教育行政との「対話」が必要である。また、地方の高校は現場で全てを引き受け頑張っているが、教員同士が一枚岩になれない面がある。

これらを改善していくためには連携が必要である。その第一歩は「対話」であると考え

5. 現状報告2について

東京都立八王子東高等学校校長の宮本久也氏は、「大学入試は高校教育に大きな影響を与えるからこそ双方での『対話』が必要だ」と話された。高校入試と大学入試を比較すると、入試にかかわる構成員のバランスが大きく異なり、それは、受験生の居住地域による差でもある。地方の大学においては高校との連携が密に「対話」がうまくいっている場合

もあるが、そこで得られた意見のほとんどは国大協まで届いていない。大学側は、入学者の多い高校にアンケートを取るなど高校側の意見を聞き、その意見が国大協に届くシステムが必要である。

改革は双方の理解がなければ進まない。そのためにはやはり、「対話」が重要だと考える。

6. 討議について

「対話」とはコミュニケーションだと考える。この討議も「対話」である。ここではそれぞれの立場からの質問、意見に、真摯に耳を傾け応答しているのが印象的であった。意見は言いすぎると発言の場が与えられなくなり、「対話」以前の問題になる恐れがある。しかし、遠慮せず声をあげていかないと、何を思っているのかは相手に伝わらない。また、意見は多くあるうちの1つでしかなく、その声を合わせて初めて説得力が生まれる。だからこそ、意見を正しく判断できるように、双方向お互いに勉強しなければならない。自分の経験だけで話をせず、いろんな人の話を聞くことが大切である。

教育行政では、特定の人が政策を決めているわけではなく、最大公約数的に困る人が出ないように決定されている。そこでは、それぞれが自分の意見が正しいと思っているため、必ずしも「対話」でうまくいくわけではない。説得力を含めた力が決定力を持つ。互いに成り立たない筋と筋の戦いで、行政も苦勞している。しかし、入試制度の混乱による最大の被害者は生徒である。そのうえで、大学入試改革の背景や意義を理解し、高校教育に良い改革をもたらすように、「対話」をする必要があると考える。

7. 終わりに

閉会の辞で東北大学理事の滝澤博胤氏から「教育については百人百様の考え方があり正解が求めづらい。それでも広く意見を聞いて

最適解を見つけだそう」というお話があった。学校現場では、授業時間が減少しているにもかかわらずやらなければならないことが増え続け、その影響は東北地区の生徒にも及んでいる。教育の個別最適化が求められているが、すべての子どもに必要なこととそれ以外のことが区別されていないのが現状である。「対話」はこの状況を打開する、いわゆるスクラップ&ビルドのための第一歩だと考える。これからの学校現場のあり方を様々な立場の方々と「対話」を通して共に考え、国の将来を担う生徒の指導にあたっていきたいと考える。

今回はコロナ禍の中、対面での実施による貴重な機会を得ることができました。関係者の方々に深く御礼申し上げます。

講評 3：第 36 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

宮城県仙台第二高等学校

校長 高橋 賢

1. はじめに

高大接続改革の議論が始まったのが、平成24年ということは、今年で10年となる。この期間、改革に伴う入試制度の検討をはじめ、高校教育や大学教育の在り方など、様々な立場の人が様々な場面で議論し、この大きな変革期を通して、高校現場も大学現場も行政も子ども達の学びについて、よりよいものは何かを考えてきたと思う。しかし、社会全体として印象に残っていることは、本質的な部分ではなく、センター試験から変わった大学入学共通テストにおいて、公表していた英語民間試験や記述式問題の導入が見送られたことであり、結果として、高校現場は制度改革の情報だけに振り回された感がある。ただ、交わってきた議論や生徒のために準備に当たった先生方の苦労は決して無駄になったわけではなく、今後効果的な進路指導の糧として、生徒一人ひとりの進路目標の達成に生かされと考えている。

今後、同じことを繰り返さないためにも、次の課題となる新学習指導要領下で実施される令和7年度入試については、正確な情報の把握により、生徒に不安なく、目標に向かって努力させていくとともに、我々高校教員がしっかりとした実力を生徒につけていけるよう頑張っていきたい。

そのためにも、なぜこのようなことになったのか。何が足りなかったのか。私自身、この10年間、行政機関での勤務が多く、大学入試に関わる場面は少なかったことで、この課題が高校でどう捉えられているのか把握できていないところがある。今、私自身、改めて高大接続改革の重要性、課題に向き合う必要性を感じている中、今回のフォーラムに参加

したことは、非常に大きな意義があったと思う。

2. 基調講演1「教育の現場と政策と研究と——やはり「教育は現場が命」だ——」

浅田和伸氏（国立教育政策研究所長）

高大接続改革に第一線で取り組んでこられた浅田氏の話聞き、これまでの議論の経緯などがよく理解できた。浅田氏の著書やコラムを読むと、常に学校現場のことを第一に考え、どうすれば子どものためになるのかということが述べられており、大変感銘を受けていたが、まさに、この高大接続、大学入試の在り方についても、同じ考えを貫いていたことが印象に残った。特に、平成25年に発足した当時の教育再生実行会議において、様々な教育課題への対応が求められている中、世論が改革を煽っている状況でも、子ども達のためにも丁寧に議論することを考え、進めていたことには、改めて行政の苦労を感じた。

また、この改革で最初から目指していたものは、高校教育、大学教育、大学入試選抜の在り方についての一体的な改革であったが、記述式問題や英語民間試験の導入がとん挫した後の大学入試のあり方検討会議においても同じことが強調されていた。この高大接続改革の本質的なところは高校と大学が一貫した教育内容をもって、今後の社会の発展のために人材を育成することであり、そのための大学入試選抜であることだと思っているが、その部分が10年前と変わらず指摘されているということは、高校、大学、行政との間で十分な議論なされないままだったのか、浅田氏が述べているように、言うべきことを言うべき時に言うべき人が言わなかったことだったの

か。いずれにせよ、これからも何回も検討していく必要があることは間違いない。そのためにも今回のフォーラムのテーマでもある「対話」が大切であり、行政と現場との対話とともに、高校と大学との対話がもっと積極的に行われなければならない。

今回の問題でも感じたことだが、最後にふれた「日本で教育の議論がかみ合わない理由」については、その通りだと思う。このことは学校運営においても同じであり、学校現場でも難しい課題となっているのは、全ての子どもに必要なことが判断できていないことや皆が同じ気持ちを共有できていなければ進めないとの意識があることに気付かされた。高大接続改革という大きな教育課題は、全ての子どもたちが幸せな人生を送るために、豊かな社会を形成し、生き抜くために必要な力を、高校教育・大学教育で身に付けさせる一体的なものであり、大学入試選抜もその考えの中で改革していくことの必要性を改めて感じた。浅田氏の貴重な講演を拝聴できたことに感謝申し上げたい。

3. 基調講演2「大学入試のコンプライアンス——未履修、入試ミス、そして、コロナ対策——」倉元直樹氏（東北大学教授）

倉元氏の講演を聞き、大学入試選抜制度における専門的な知見に、これまでにはなかった見方や考え方に気付かされた。特に、未履修問題に端を発するコンプライアンスの意識が、現在と今後の大学入試に影響を与えていることには、大きな関心を持った。私自身、世界史が専門であり、未履修問題の時には、在籍していた高校が宮城県内で最初に新聞記事に取り上げられ、県教委との話し合い、生徒や保護者への説明、事後処理など、その対応に奔走したことが思い出される。今回の話の中であったように、その当時は、まさに、自校のカリキュラムは飽和状態であり、その中で受験対策をするために運用していたもので、学校では仕方がないものとして捉え、何

年もの間、当たり前のように続けられていたものであった。学習指導要領を遵守していないこの問題が、コンプライアンス重視の世論が大きくなったことで許されない問題となり、運用はコンプライアンス違反となり、高校側は一方的に非難されていたことが記憶に残っているが、なぜ今だったのかという疑問は当時残っていたように感じる。

この未履修問題の影響を受けて、大学入試政策に変化があったことにも気付かされた。高校教員の立場での大学入試は、全てが大学側で決められていることであり、その選抜試験に合格するために、生徒は自分の志望大学の入試制度、入試問題に合った学習を行い、高校もそれをサポートしている。もちろんその姿は変わらないのだが、高大接続改革の中での入試改革において、入試制度は高校教育に大きな影響を与えるという観点からも、高校側が入試に対して声を上げていくことも必要であることが分かり、今後高校と大学との意見交換や情報交換の場を積極的に設けていきたいと思った。特に、新学習指導要領下で実施される令和7年度入試については、新学習指導要領が始まった高校現場では、早く情報がほしいところであるが、大学側は現在検討中である。つまり、これまでは大学から出される入試情報を受け身で聞くだけであった高校側は、高校の現在の状況を大学に伝えることによって、大学側の検討の材料として活用できるのではないかと思う。ここに対話が生まれ、意義のある高大接続改革につながるのではないだろうか。倉元氏からは、高校からの発信を積極的に行っていく勇気をいただき、大変感謝している。

4. 現状報告1「地方公立高校の現場から」延沢恵理子氏（山形県立東桜学館中学校・高等学校教諭）

高大接続改革に対し、情報を待つことが多かった高校現場で、積極的に情報を集め、これだけ多くのことを勉強された延沢氏の報告

には、情熱とパワーが感じられた。具体的なものがみえず、生徒に情報をどのように伝え、新入試制度の対策を練っていくのか、大学進学者を抱える全ての高校で課題として持っていたが、情報が少ないことで、積極的な対策には至っていなかったのが現状ではないだろうか。その点で、大学入試システムに関することや新テストの内容に関する研修を積み重ね、学びの中で気付いたことの示唆は、大変参考になった。まさに、大学入試研究、探究活動による成果だと感じた。多くの高校教員に聞かせたい内容であった。

このような学びを全ての学校で進路指導担当教員等ができれば、大学と高校とのつながりがより強固なものになると思う。倉元氏も討議のところで、この入試改革においては、大学入試を専門とする研究者が必要であると話していたが、今後は、大学入試を、高校も大学も行政も皆で学ぶ場面があって、そこで議論を交わしていくことが必要であると感じている。最後に延沢氏が述べていた行政に伝えたいことについては、共感する部分が非常に多いが、このような内容を、皆で学び、議論している場面で話し合うことで、より具体化されるのではないかなと思う。是非、対話と学びの場が実現してほしい。

5. 現状報告2「入試をめぐる行政と現場との対話——高校入試と大学入試を比較して——」

宮本久也氏（東京都立八王子東高等学校長）

今回のフォーラムのテーマであった行政と学校現場での対話について、宮本氏からは、高校入試と大学入試を比較して、大変分かりやすく説明していただいた。確かに高校入試における制度改革の時には、フォーマルな場として、入学者選抜審議会で議論を進めながら、市町村の教育委員会や中学校に対し説明会を数多く行い、意見聴取をして検討を重ねた。この意見聴取がフォーマルかインフォーマルかは分からないが、いずれにせよ中学校

現場との対話は、頻繁に行っていたように感じる。

一方、大学入試については、その議論がどのような形で行われているか分からなかったが、宮本氏がふれた審議会や事務局の構成員の違いからも、高校入試と同じような進め方ができないことは理解できた。もちろん受験生が義務教育段階である高校入試と大学入試の制度は根本的に異なっているが、行政と現場とのお互いの理解が大切であること、それが対話によって深められるという点では、どちらの入試も同じだと考える。

今回の共通テストにおける記述式問題と英語民間試験の導入の見送りの問題も、実現可能性についての議論が不足していたことや、導入ありき、工程ありきで融通のきかない議論であったのではないかなと思われる。今後、同じことが起こらないように、高校、大学、行政が本音で話し合っていくことが求められる。

6. 討議

4名それぞれの基調講演と現状報告の後の討議は、大変有意義なものであった。高校・大学の現場と行政との間の相互理解のための方策が、主として話し合われたが、人間と同じで、お互いを尊重することが大切ではないかなと感じた。学校現場では、行政の出したメッセージを常に自分の学校で生かすためにはどうすればよいかを判断することが必要であり、行政は現場の負担を少なくするために、予算や人で支えることを第一に考えていくことが求められていると思う。対話の実現のためにはという質問に対しても、今はインフォーマルな場面で様々な人の話を聴く場面が少なくなっていることがあげられていたが、学校でも意見を出し合う場面は少なくなっていると感じられる。以前、浅田氏がコラムの中で、「言うべきことを言わない。言ったことしかやらない組織は腐敗する」と述べていたことを思い出した。最近、様々な場で結論あ

りきの議論が多くなっていることは、物事の本質を見なくなっているように感じており、フラットな状態での話し合いを行っていく必要がある。

また、今回の討議で、令和7年度入試に向けての意見はとても参考になった。行政と学校現場だけではなく、今度は大学と高校との対話が強く求められている。新しい学力を入試でどのように評価するのか、「情報」の取り扱いをどうするのか、高校では飽和したカリキュラムの中、入試対策を工夫して行っていかなければならないが、既に新学習指導要領はスタートしている。まさに、将来を支える人材育成のために、高大連携して大学入試を作っていかなければならないと感じた。

7. 終わりに

今年4月から本校に赴任し、県の校長協会の大学入試対策委員会の代表という立場になったこともあり、大学入試についてもっと勉強しなければならなかったと考えていた時に、このフォーラムの開催は、私にとってタイムリーだった。今回のフォーラムには、県内の校長先生方も参加しており、今後の大学入試を考えていく上では、このフォーラムで学んだことを、学校運営の面で生かしていく必要があると感じる。これから高校と大学との対話を積極的に行っていくために、様々なアプローチをしていきたいと思う。

フォーラムを開催するにあたり、ご尽力された事務局の方々をはじめ、貴重な講演や報告をしていただいた皆様に深く感謝申し上げます。多くの教育関係者が学ぶ機会として、今後もこのフォーラムが末長く継続することをお祈り申し上げます。今回は御招待いただき、誠にありがとうございました。

講評 4：第 36 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

秋田県立秋田中央高等学校

教諭 佐藤 幸士

1. はじめに

今回のフォーラムは、「大学入試政策を問う——教育行政と教育現場の『対話』——」というテーマのもと行われた。これまで、大学入試に携わる中で、教育行政政策に振り回される場面が多くあった。私自身今までの大学入試への対応を振り返るよい機会となり、そして何よりも新学習指導要領のもとの令和7年度以降の大学入試への対応を考えさせられるものとなった。

2. 基調講演1「教育の現場と政策と研究と——やはり「教育は現場が命」だ——」

国立教育政策研究所長 浅田 和伸 氏

浅田氏も述べているように、高校の現場感覚では、意義が見いだせないものや、実現不可能な教育政策が実施されることがある。大学入試改革や高大接続改革では、当時の萩生田文部科学大臣により、公平性の確保などの観点から、英語四技能評価のための民間資格・検定試験導入が延期され、大学入学共通テストにおける記述式問題の導入が見送られた。高校現場では胸をなで下ろしたことは記憶に新しい。このように、日本では、過去20年以上にわたり「教育改革」が叫ばれながら、日本の各界における「教育論議」の多くが「空回り」を続けている。岡本薫氏が述べているように、国・地方の政策や現場が、背景・原因を分析し、共有し、今回のテーマである対話をしていくことが必要だと考える。

3. 基調講演2「大学入試のコンプライアンス——未履修、入試ミス、そして、コロナ対策——」

東北大学教授 倉元 直樹 氏

倉元氏も述べているように、未履修問題は高校で履修すべき内容が非常に過密になったため起こった問題である。長年の慣習として、学習指導要領を大綱的に運用し、コンプライアンス概念が不在であることが原因だと考えられる。そして、高校は加害者でもあり、被害者でもあったと考えられる。今後、このような問題が起きないためにも、総量の見積もり、引き算の発想は重要である。今後は、何かを足すよりも何かを引くことが必要だという点に同感する。スクラップアンドビルドの発想である。しかし、このためには現状を把握する必要がある。地方では、少子化が進行し学校規模が縮小され、民間教育リソースは偏在し、家庭の経済力も高いものではない。また、大学入学者選抜の背景にある個性尊重の原則と人材育成という矛盾する理念も存在する。これらの背景を踏まえつつ、活力ある近未来の制度を、高校、大学、現場を熟知した教育行政が共通の価値観をもって設計していくことが望まれる。

4. 現状報告1「地方公立高校の現場から」

山形県立東桜学館中学校・高等学校教諭

延沢 恵理子 氏

高大接続改革への対応だが、私も当時勤務していた学校で、e-ポートフォリオ評価に対応するために、B社のClassiを導入した。また、英語四技能検定に対応するために、B社のGTECも導入した。まさに、見えないものを見るために情報を集め、教員で共有し、生徒が不利益を被らないよう準備を行った。前述のとおり導入見送りとなったが、現場は混乱した中で数年間を過ごした。

また、倉元氏も述べているように、大学入

試には個性尊重の原則と人材育成という矛盾する理念が存在する。その中で、我々現場ではその矛盾と立ち向かい、キャリア教育を行っている。10年後、20年後の生徒のよりよい未来のために。

そして、新学習指導要領のもとでの令和7年度以降の大学入試では、新たに「情報」が出題教科となる。サンプル問題も大学入試センターのホームページに公開され、国立大学協会は「情報」を必須とし、大学入学テストはこれまで5教科7科目としてきたが、原則として6教科8科目となる。地方では、「情報」の教員が講師や臨時免許状で教える教員であるケースが多く、大学入試としての「情報」への対応が難しいと考えられる。東京都のように、教員が充実しているのは、ごく一部の地域である。これらの現状を踏まえると、再検討の余地がまだまだある。今後、各分野間での対話により、再考していただきたい。

5. 現状報告2「入試をめぐる行政と現場との対話——高校入試と大学入試を比較して——」

東京都立八王子東高等学校長
宮本 久也 氏

宮本氏が述べたように、入試は受験生の将来を左右する重要な選択であり、入試制度の変更は受験生を指導する中学校・高校の教育に大きな影響を与えるものである。教育改革は選抜する側、受験させる側の双方が納得したうえで行うべきであり、そのためには双方で十分な対話をする必要がある。その対話を納得できるものにするためには、構成員のバランスをとることが必要である。一方に偏ると、その一方の声が大きくなってしまい、広い視野にたった議論になりにくく、経験則に基づきがちになる。

特に大学入試では、行政と現場との対話が十分ではない。そして、大学入試の事務局の構成員は、高校の状況をほとんど分かっていない。よりよい大学入試を行うためには、行

政と現場、現場同士の対話が必要であることに甚だ同感である。前回の高大接続改革のように、受験する側の理解が得られなければ入試改革は進まない。進んだとしても、一方的なものになる。東北大学のように、大学自身も受験者の多い高校の受験生の声を聞き、その声を自己の大学の入試改革に生かすだけでなく、行政にも届け、三者の対話による互いの立場を理解した、より良い大学入試が行われることが望まれる。

6. 終わりに

このような貴重な機会を与えてくださった東北大学高等教育フォーラム関係者の皆様、貴重な御意見をくださった発表者の方々に深く感謝申し上げます。また、今後もこのフォーラムが末永く開催されることをお祈り申し上げます。

講評5：「対話」の必要性について感じたこと

山形県教育庁高校教育課
指導主事 石黒 吉寛

1. はじめに

第36回東北大学高等教育フォーラムは、「大学入試を問う——教育行政と教育現場の『対話』——」というテーマのもとで開催された。東北大学高等教育フォーラムは、高校教員として現場で勤務をしていた際には、都合がある場合にたびたび参加していた場だった。今回については、招待参加としてのお声がけをいただき、今年2年目を迎えた指導主事の立場として参加することとなったものである。今回、招待参加者としてフォーラムに参加しフォーラムの講評を執筆する機会にめぐまれたことや、教育行政と教育現場の「対話」というキーワードについて深く考える機会を持ったことは、現在の役割を考えた場合に、自分の担当業務を果たしていくうえで、非常に重要な考えを身につける貴重な経験の場になったと感じているところである。

2. 基調講演1について

「大学入試改革について」「大学入試のあり方に関する検討会議」提言、「高大接続改革の議論・検討の流れ」についての各資料が示され、さらに、2012年以降の、中央教育審議会の高大接続改革の諮問（2012年）・答申（2014年）、教育再生実行会議の発足（2013年）、高大接続システム改革会議最終報告（2016年）から2021年の大学入学共通テストの初回実施までを時系列で示しながら説明が行われたことで、この流れを改めて整理することができた。

また、「当たり前のことを当たり前に行う」ために、「言うべきことを言うべきときに言うことがいかに大事か」という言葉に関する部分は、講演者である浅田和伸氏が、文部科

学省のキャリア官僚に加え、東京都品川区の公立中学校校長をつとめた経験に基づくものとして、自分にとって感銘を受けるものとなった。

3. 基調講演2について

はじめに、過去に行われた東北大学高等教育フォーラムを振り返った。開催時期によってテーマに特徴があり、高大接続を取り上げた「草創期」（2004年～）、東日本大震災の後に増加したアクシデント対応等を話題とする「転換期」（2012年～）、高大接続改革を論じた「改革対応期」（2015年～）等に区分することができるのとことであり、今回参加した高等教育フォーラムに関する歴史の流れを感じることができた。今回の高等教育フォーラムはこの流れのなかで大学入試における教育行政の役割を議論したいと考えたうえでの開催であることが理解できた。

個別の大学における最終的な責任と権限、文部科学省の緩やかな行政指導により入試を適正化していることを特徴とする日本型の大学入試について、また、そのような中で、近年は大学入試におけるコンプライアンスの意識が定着してきていることについての説明は非常に分かりやすいものであった。

以下の、コロナ禍における日本型大学入試への対応についてもこの2年を振り返るうえで興味深いまとめであった。令和3年度入試の場合は、可能な限り例年どおりの実施となり、コストは度外視した真摯な対応がなされた。これは共通の価値観とコンプライアンスの意識を背景とした文部科学省・大学入試センター・個別大学の絶妙な連携によるものといえる。一方で、令和4年度入試は、オミクロン株

による濃厚接触者の扱いについて混乱が生じ、この絶妙な連携にほころびが見られたとのことである。ほころびの発端が、以前の未履修問題と深い関係があるのではないかという見方は非常に興味深いものであった。当時の未履修問題で示されたように、教育行政と教育現場の関係には転換が必要であり、そのポイントとなるものがコンプライアンスであるということであった。未履修問題は、当時の教育の実態とコンプライアンス概念不在の体質が背景として起きた問題であり、現場の運用で調整していたものが、社会規範が変化してコンプライアンス重視にシフトするなか、時代の必然として社会問題化したものといえ、その影響から教育政策と教育現場の課題を整理するきっかけとなったといえるとのことであった。

今後取り組まれる事業については、何かを足すのではなく何かを引く考え方が必要となっていくのではないかという考え方について共感できた。特に、大学入試については、大学がアドミッションポリシーを示し、高校に求めることと大学で育成することを仕分けていくことが必要となっていくということである。

以上のように、日本の大学入学者選抜制度の特色とコロナ禍の入試の関係、そしてその対応のもとになったものが未履修問題であるという講演の流れはとても分かりやすいものであり、自分のなかで整理しながら拝聴することができた。

4. 現状報告1について

報告者の延沢氏が、高大接続改革に対応するために、情報集めに取り組み、さまざまな研修の機会や情報収集の場を設定した活動については、当時の自分自身を振り返りながら、その熱意を強く感じる事ができた。情報収集の結果、「独自性の発揮」「共通性の指導」はいずれも欠けてはいけないものであることを認識する一方、新しい大学入試では、多様性の名のもとにバランス型の生徒が有利にな

ることを感じた点については、一つの見方を提供していただいたと感じている。

そして、そのような経験をとおして感じた現状の違和感が、大学入学共通テストへの「情報」の導入が教育現場にさらなる負担を増やすという違和感であり、大学入学共通テストが「共通」テストと名乗っていないながら多様性を評価する可能性について適切なのかと感じる違和感であるとの考え方について、重要な指摘であると思われた。

最後に、延沢氏は、学校は生きる哲学を学ぶ場であり、子どもたちは「生きもの」であるとまとめられた。このことを含め現状報告の内容は、公立の中高一貫校の教員として、先を見通した一貫指導を行っていることに基づく豊富な経験がもとになっている、非常に興味深い問題提起と意見であったと感じている。

5. 現状報告2について

「対話」には「フォーマルな対話」と「インフォーマルな対話」があるという内容が非常に興味深いものであった。その上で、「フォーマルな対話」における都立高等学校の入試と大学入試における違いは、構成員のバランスであるとのことであり、大学入試における大学入学者選抜協議会では、大学側の意見が強くなりがちで、広い視野に立った議論にはなりにくいとの指摘であった。また、担当者の人柄やスタンスによって大きく左右される「インフォーマルな対話」は、事務局の構成員の違いが原因となり、都立高等学校の入試で教育行政（事務局）と教育現場（学校）の対話ができている一方で、大学入試においては十分に行われていないことが示された。これらの実態は、報告者の宮本氏がそれぞれの立場を経験されたことに裏打ちされたことによるものであることから、非常に説得力があり、興味深く拝聴することができた。

その上で、「フォーマル」な場においても、「インフォーマル」な場においても、よりよ

い大学入試を行うための方策は、教育行政と教育現場の対話が必要であることとまとめられており、どちらか片方だけでは対話は機能せず不十分であることについて、強い説得力を感じた報告となった。

6. 討議について

今回のテーマとなっている、「教育行政」と「教育現場」の対話をどのような場で行っていけばよいのかということについては、宮本氏が現状報告でも示された「フォーマル」な部分での周到な準備と「インフォーマル」な部分での互いを意識した情報収集という、「フォーマル」と「インフォーマル」とを使い分ける考え方が参考となった。また、浅田氏から示された、思ったことを伝えないと分からないため遠慮せずに声をあげることは、基本的なことでありながら実際には簡単にできていないという発言については、これが一番の基本であるはずのことでありながらできていない現実を知る証言であると感じた。

他に、教科「情報」が受験科目として新しく加わる令和7年度入試については、新学習指導要領が現在と全く異なるものであり学びが変わることから大学入試も変わらなければならないという認識を大学が持つべきであるという考えや、大学側の入試は大学だけのものという認識は大学が高校の学びに影響を与えている以上、高校と大学の対話が必要であるというものに変えていかなければならないとする考えが提示され、これらはそれぞれ非常に参考となるものであった。

最後にそれぞれのパネラーがまとめのメッセージとして、「声を上げることが大切だとしても勇気があるものであり、正解ではないとしてもまず言うことが大切であること」、「思っていることを声に出すこと、想像力をもって互いに思いあうことが重要であること」、「対話に臨むには自分にエビデンスが必要であり、語るに足りる見識が必要であること」などを示してくださったが、これらは

それぞれ肝に銘じていきたいと感じた貴重な言葉である。

7. 終わりに

日常生活でもそうであるように、教育行政と教育現場において「対話」が重要なことであり、それぞれの立場の人が、それぞれの立場でその重要性を認識していることは、今回のフォーラムをとおして理解できた。

しかしながら一方で、それができていない現状がある問題についても認識することができた。対話が行われることにより進展していくことがある一方で、対話が行われないうちに改善がなされず、不満が生じることが多々あることも、今回の各講演や報告から理解することができた。それらの問題をどのようにして解消していくのか、自分を含めてそれぞれの立場の人々が、相手を理解し、対話を行う環境づくりを心がけるようにしていかなければならないということである。

教育現場を経験し、現在は教育行政の一端を担う者として、「対話」を重視した対応を常に心がけていくことについて、改めて意識することができた機会となった。

講評 6：教育現場からみた大学入試 そして対話

福島県立福島高等学校

教頭 橋爪 清成

1. はじめに

本フォーラムには初めて参加させていただいた。今回は「大学入試政策を問う——教育行政と教育現場の『対話』——」というテーマであった。高校の現場しかこれまで経験がない私にとって、教育行政、特に大学入試という国全体の教育行政についてはあまりにもスケールが大きく、自身が関与する機会ほとんどなかったため、どのくらい話題についていけるだろうかと当初はかなり不安に感じた。とはいえ、貴重な機会をいただいたので、以下のような期待を持ちながら参加した。

- ・大学入試改革について、行政と現場、高校と大学という立場の異なる方からの意向や思いを伺い、改革の全体像を俯瞰することができる。
- ・対話という行為は高校教育においてもこれまで以上に重要なキーワードになる。対話について考える契機となる。
- ・大学入試や高校教育における様々な課題について捉えることができる。

以下、フォーラムでの内容を踏まえつつ、高校における状況や感じたことを5つの視点（大学入試改革、コンプライアンスと未履修問題、対話、探究活動、高校の履修科目）から述べたい。

2. 大学入試改革

浅田氏は大学入試改革の議論・検討の経緯について講演された。英語民間試験活用や記述式問題の導入の検討の経緯について、ご自身の現在の立場からは語り難い部分もあったと思われるが、誠実にお話をされていたことが印象に残った。

平成29年に文部科学省から示された共通テ

ストの方針はこれまでの入試システムを大きく見直す大胆な内容であった。英語の四技能評価や記述式の導入が行われれば、生徒たちの学びも大きく変わり、受動的な学習だけでも入試を突破できたところが、アウトプットする力や表現力をより強く求められるようになり、それが生徒の主体的な姿勢の獲得にもつながるのではないかと個人的には好意的に捉えていたことを思い出す。一方で指導の負担増や公平性が担保されるのかといった実務的な点を問題視する声も大きかった。最終的にはこの部分は頓挫してしまったわけだが、日本の大学入試に関する課題は解決されていない状態であり、ここで放置するわけではまいであろう。高校での学習はどうしても入試システムに大きく影響を受けざるを得ない。引き続き改善を望みたい。

延沢氏は、高校教員として大学入試改革をどのように受け止めてきたか率直に話された。共感するところが多く、また延沢氏自身の学ぶ姿、対応力に圧倒された。eポートフォリオや英語の外部検定の活用については当時勤務していた高校でも全く同じ戸惑いがあった。特定の教育企業に頼らざるを得なくなりそうな不可解な状況、前触れもない突然の通達、地域や家庭によっては重くのしかかる費用負担等、生徒や学校が翻弄される場面が多かった。さらに教員サイドでも、テストそのものの質の転換への対応だけでなく、準備段階でも間違いがあつてはならないという不安感、負担感が広がっていた。これらが頓挫し、振り回された感もあったが同時に安堵感を感じたところも大きかった。この経緯については我々でも気付くことのできる実現困難な部分について、文部科学省や有識者の方々がなぜ

そこまで思い至らなかったのか残念に感じた。

3. コンプライアンスと未履修問題

倉元氏は大学入試のコンプライアンスについて講演された。コンプライアンスを切り口にかつての高校未履修，コロナ禍対応，現在の入試への波及効果等，多様な事象についての考察がなされた。

未履修問題が発覚した当時，私は高校教員になって間もない頃であった。国や県の教育行政と現場の関係性についてほとんど理解せず生徒の指導にあたっていたが，この問題そのものが行政と現場の関係に目を向ける契機となった。今振り返れば大変なことであるが，当時は学習指導要領については，形式的な方針であり，いのように解釈することが可能であるという程度の認識であった。国の教育の方針についても，現在のような資質能力を明確にしていくというものではなく，「生きる力」という多様な解釈ができる方針であったため，自由裁量の幅が大きいと捉えていた。法令で決まっている以上はコンプライアンスの点で問題になるのは当然の結末であったのであろうが，国の学習指導要領によってどこまで教育の内容を規定するか，その線引きについては議論の余地はあるのではないかと感じる。後にも述べるが，必修科目の在り方や各教科の内容等，有識者によってほぼ決められていく内容について，現場からの意見をもっと吸い上げていくような仕組み，例えば今回のテーマになっている対話の場があるとよいのではないかと感じる。

倉元氏は未履修問題による波及効果として東北地方出身者の東北大合格者比率の低下について考察している。要因は多数あると思われるが，コンプライアンスの厳格化に伴う教員への負担が遠因となっているとの説は興味深いと感じた。教育現場は学校の特徴を出すために様々な事業が増えている。民間企業であれば増員等の策もありそうだが，それも公立高校では難しい。スクラップ&ビルドがで

きればよいが，スクラップする内容もなかなか見当たらない。とは言え，こういう意識をもって職務を見直す必要性があることは強く感じた。

4. 対話

宮本氏の現状報告では，高校入試と大学入試における行政と現場の対話の在り方について，ご自身の経験を踏まえた報告がなされた。大学入試では高校関係者の関与が少ないことや全般的に関係者の対話が少ないこと等，課題を明確にされた。また対話の在り方としてフォーマルな場とインフォーマルな場があり，この両方の存在が都立の高校入試ではうまく機能している印象を持った。

パネルディスカッションにおいても対話についての話題があり，どのように対話を進めるべきか，という点で大変興味を持った。共通テストのような国の規模の入試においては，我々のような高校現場の教員が関与できる場はほとんどないと感じているが，こういった状況に諦観を持たず，どのような関りの方法があるのか考える余地はあると思った。

また，議論や対話における課題として，有識者の意見はどれも正しく，その正しいことのせめぎ合いになってしまうこと，結果的には最大多数の意見に寄っていくこと，対話と言いながら主張の強いところに落ち着くようなパワーゲームになっていること等が挙げられた。これらのことは今回の入試というテーマに限らず，対話の進め方や物事の決め方についてありがちだと感じながら，そもそも対話という行為が自分自身を取り巻く環境にはそれほど多くないことが一番大きな課題ではないかと感じた。新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」という方針にも含まれているとおり，対話は高校の学習でも今まで以上に重要視されつつある。実際，本校のような進学校においてもグループワーク等の推進によって対話の場が頻繁に取り入れられるようになってきた。一方で教員側については

どうかと言えば、業務多忙もあり、なかなか対話の場を設定しにくい状況にある。またコロナ禍でインフォーマルな会話や対話の機会も減り、コミュニケーションの機会が減っている。このように内部の組織でも場を設定することには課題があることも今回のフォーラムの参加で再認識をすることができた。今後、この解決策を検討していきたい。

5. 探究活動

パネルディスカッションではPBLをはじめとした探究活動と受験に向けた教科学習の方向性に関する話題があった。新学習指導要領では、総合的な探究の時間の位置付けが今まで以上に重視されている。高校においても、開かれた学校づくり、学校の特色化等による地域連携、SSH等の特定領域の重点化等が進展し、探究活動が急激に浸透していることを実感している。探究学習は楽しいこともあるが、同時に生徒も教員も相当苦労をしながら実践していくことも多い。まず教科書がなく（最近は様々なガイドブックが出始めてはいるが）、生徒も教員も何から始めてよいのか全く分からない状態からスタートする。教科書や問題集のように与えられたものへの取組に慣れてきた我々にとって、全てを自分で決めなければならない取組に大きな壁を感じ、相当な負荷がかかる。予定調和の学習ではないためゴールもまちまちであり、うまくいかなかった内容を何とかレポートにまとめて完成させることがほとんどである。しかしその過程での学びは大変実りが多く、生徒は達成感や自己肯定感、自己有用感を高め、コンテンツよりもコンピテンシーを獲得している。生徒の成長を目の当たりにし、教員もこの活動の意義を認め、各学校で浸透してきたのではないかと感じている。

このような能力は入試ではどう評価されるのか。大学の一般選抜は教科書の学習を対象としたコンテンツベースの能力を評価するのに対し、総合型選抜ではコンテンツとコンピ

テンシーの両方、文字通り、生徒の総合力を評価していると理解している。大学入試の総合型選抜の比率が高くなっており、個人的には大いに賛同するところである。引き続きこのような方向性で進んでいくことを願っている。

6. 高校の履修科目

未履修問題や新しく共通テストに導入される情報科目等、今回のフォーラムでは高校の履修科目についての話題があった。現在の高校教育では学習指導要領によって定められた必修科目があり、それを全て履修する必要がある。また大学入試においても共通テストでは国公立大学を受験する場合には5教科の受験が求められるケースが多い。このボリュームは日本では長期に渡って維持されている。社会が大きく変容し、また高校では探究学習が存在感を増し、学びの質が変わっていく中で、本当に現状のような多くの科目が必要なのかどうか、考える必要があるのではないだろうか。例えば学習指導要領による必修科目の条件を大きく緩和し、各高校へカリキュラムの裁量を委ねるだけでも現場での工夫が進展するのではないだろうか。あるいは、共通テストも各大学で最低限のラインのようなものを設ける資格試験のようなものにし、あとは個別試験で評価する等すれば全ての教科に全力を出し尽くすこともなく、自分の専門とする科目に集中して学習を進めることができるような気がする（こういう仕組みの大学も実際に存在するが、ごく一部に限定されている）。もちろんメリットデメリットはあるが、このような国の入試システムといった大きなテーマについて、有識者だけでなく、現場の高校教育関係者や大学関係者も含めて検討する場があってもいいのではなかろうか。今回のフォーラムでも限られた有識者による方向性の決定について複数の方から話題があり、課題は共有されているようにも思われるため、今後の検討を望みたい。

7. 終わりに

今回のフォーラムを通じて、改めて様々な場面における対話の重要性、必要性を認識することができた。対話は、結論やゴールを求めるものではなく、出発点となる課題を共有し、その課題の解決に向けて多様な考えを認め合いながら、課題の本質に迫ったり、解決に向けた最適解を探ったりしていくプロセスであると考えている。結論が求められる議論も大事だが、結論を求めることを必ずしも必要としない対話も同様に重要だと感じる。また対話における重要な点の一つは多様性であると感じる。大学入試の在り方という大きなテーマについても一部の有識者に任せず、多様な関係者が参加できる対話の場がさらに増えていくことを期待したい。今回のフォーラムではまさにそのような状況が設定されていたと思われ、本フォーラムの今後の益々の盛会を祈念したい。

アンケート・参加者統計

第36回東北大学高等教育フォーラムアンケート

(回収数 90, 回収率 18.1%)¹

1. 御所属

(1) 高校：40名(44.4%) (2) 大学：44名(48.9%) (3) その他：6名(6.7%)

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。

(1) よかった：88名(92.6%) (2) どちらとも言えない：6名(6.3%)
(3) 改善すべき：1名(1.1%)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか。

(1) よかった：83名(87.4%) (2) どちらとも言えない：11名(11.6%)
(3) 改善すべき：1名(1.1%)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

(1) よかった：88名(93.6%) (2) どちらとも言えない：4名(4.3%)
(3) 改善すべき：2名(2.1%)

5. ディスカッションは如何でしたか。

(1) よかった：73名(79.4%) (2) どちらとも言えない：17名(18.5%)
(3) 改善すべき：2名(2.2%)

6. 時間は如何でしたか。

(1)短すぎた：4名(4.2%) (2) ちょうど良い：78名(82.1%)
(3)長すぎた：13名(13.7%)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

(後述)

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

(後述)

ご協力ありがとうございました。

¹ 多重回答、無回答は個別の集計から除く。

アンケート自由記述

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。¹

- 「高大連携」への理解が深まったと思う。これまでは、大学側からの出前授業や大学での講義受講による単位先取り予約などにより、高校生の勉学への動機づけや将来展望への窓の提供のためにあると思っていましたが、もっと広くとらえるべき課題であると思えるようになった。(大学, よかった)
- PR 効果強い。興味がわきました。(高校, よかった)
- ある程度の本音に近い議論となったこと (大学, よかった)
- かなり本音の部分で意見交換がなされており、現場の意見もよく理解できました。(その他, よかった)
- この春に入試広報課へ異動してきたため、基本が理解できておらず、話についていけなかったため。(大学, どちらとも言えない)
- これまでとは違った切り口で大学入試の真に迫る話が聴けた感があります。(大学, よかった)
- コンプライアンスに言及したこと。(大学, よかった)
- それぞれの立場における入試に考え方の相違点と確認できたこと (高校, よかった)
- それぞれの立場の課題意識が、理解できた。(高校, よかった)
- フォーラムのタイトル通り、行政と現場の対話の場面に出会えたため。(高校, よかった)
- やはり、最後の討論会が充実していました。(高校, よかった)
- 以前から、省、大学、高校の入試に対する対話を聞いてみたいと考えていたため、非常に興味があった (高校, よかった)
- 異なる立場の方から話が聞けた、ので。(大学, よかった)
- 学校現場で管理職である自分の立ち位置について日々考えさせられているので、大変刺激を受けました。行政 vs 現場, 大学 vs 高校, 管理職 vs 教員 などという二項対立で考えたくない、考えるべきではないと改めて感じました。(高校, よかった)
- 企図通り、政策と現場が語る場となっていたと思います。(大学, よかった)
- 教育行政と教育現場と教育研究の本音が聞けたので良かった。(高校, よかった)
- 教育行政と教育現場の双方のお話を聞けて有意義だった。(よかった)
- 現場が上手く回るためには行政に現場をもっと知ってもらう必要がある、といった方向性は良いと思いますが、大学入試と行政と現場がどこでリンクするのか少し見えにくかったなと思います。(高校, よかった)
- 現場と行政の在り方というものの理想形がチラリとだが見えた。(高校, よかった)
- 公立高校が直面している課題を取り上げていたから。(高校, よかった)
- 行政、大学、高校のそれぞれの立場からの現状について知ることができ、大変参考になった。(高校, よかった)
- 行政、大学、高校と忌憚の意見を出し合える場があったことが良かった。(高校, よかった)

¹ 末尾の括弧内は所属、選択された御意見。

- 行政・高校・大学の三者を交えて、互いを架橋するような講演・討論が行われていた。どうしても自分だけでいっぱいになりがちなところであるが、登壇者自身がそのことを十分自覚しており、それぞれの立場を理解した上での議論となっていたこともあり、大変勉強になった。(その他, よかった)
- 行政・大学・高校それぞれの立場から大学入試について語られる機会がなかったから。(高校, よかった)
- 行政と現場との対話の難しさ, 必要性を受け止めました。(大学, よかった)
- 行政と現場の対話という観点は魅力的であったが, さらに大学側現場の意見が入るとより充実した議論になったのではないのでしょうか。(大学, よかった)
- 行政と現場の抱えるリアルな課題感を議論する機会となりました。選抜主体となる「大学」も含めてですが。(その他, よかった)
- 行政と現場は噛み合わないと感じているので, お互いを理解する機会ができてよかった。(高校, よかった)
- 行政側のご意見も含めて聞けたこと。対話をテーマにして頂いたことで, 我々もディスカッションに参加する視点で聞けたこと。(高校, よかった)
- 高校, 行政, 大学のそれぞれの状況が理解できた(大学, よかった)
- 高校, 大学, 行政, それぞれの生の声を聞くことができた気がします。(大学, よかった)
- 高校, 大学, 行政からそれぞれ登壇者が参加し, 有意義な議論ができた(大学, よかった)
- 高校・大学双方の立場で意見されている。(大学, よかった)
- 高校現場に身を置いていると延沢先生のような思いを持つことになり, 大いに共感する一方で, 行政や大学側の高校教育に対する率直な考えを聴くことができて有意義だった。(高校, よかった)
- 高校側の先生方の発表に共感するところが大きかった。大学や文科省へ投げかけたい, 対話を期待する内容であったから。(高校, よかった)
- 今まさに求めているもの(高校, よかった)
- 昨今, 教育行政, 大学, 高校現場のねじれが著しくなっており, 良いテーマだと思います。(高校, よかった)
- 時宜を得たテーマだと思います。次は, 「次の学習指導要領はどうあるべきか」を期待したいです。(高校, よかった)
- 自分自身としても, 生徒への指導のためにも最も気になるテーマでありました。(高校, よかった)
- 数年間, 教育行政と現場に対立のような構図が作られてしまっており, 誤解も多く含むと感じていたため。また, 対話は生徒にも身につけさせたいし, 大人ができなければと感じていたため。(高校, よかった)
- 政策の裏側の一端を伺えた(よかった)
- 対立の時代ではなく対話による連携の時代に則したテーマだった点(高校, よかった)
- 大学, 高校, 行政から大学入試への影響に関する貴重な情報を得ることができた。(大学, よかった)

- 大学、高校の現場が声を上げていくことの大切さを実感した。(高校、よかった)
- 大学入試は「妥協の芸術」と倉元先生が述べられているとおりで、教育行政と教育現場との関係性で成り立っていることをコロナ禍の入試を経験して痛感したところである。そのため、このテーマは非常に良かったと考えている。(大学、よかった)
- 大学入試を巡る現場と行政の立場からの情報が得られ、新たな視点をいただきました。首都圏と地方の差の大きさもあらためて実感しました。(高校、よかった)
- 中々目に出来ない、教育界の仕組みが可視化出来たので。(高校、よかった)
- 内容に予測がつかなかった。(大学、改善すべき)
- 入試改革の経緯 課題 などわかった。(高校、よかった)
- 入試改革の経緯や課題が理解できた。(大学、よかった)
- 入試改革への混乱が続く中で、現状認識をするうえで有効だと感じた。(高校、よかった)
- 入試設計や構築の際に、現場のヒヤリング結果と検証の裏付けとなり、納得できた。(大学、よかった)
- 普段は直接聞く事の出来ない行政の話が聞けたので。また、高校側の訴えが直接届いている様子を見る事ができたので。(高校、よかった)
- 文科・大学・高校に一石を投じる機会が必要。(高校、よかった)
- 文科省、高大それぞれの問題提議をもとに、振り返ることができたのは良かったです。他方で、過去の話に終始しすぎた？印象もありました。振り返りをもとに、ではどうすれば高大接続をより一歩前進できるのか、後半のディスカッションでももう少し深められると良かったと感じました。(その他、どちらとも言えない)
- 立場の異なる教育関係者から大学入試に関する所感をお伺いすることができたため。(高校、よかった)
- 付度のない意見交換であった。(高校、よかった)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか。

- このフォーラムでないと聞くことができないような貴重なお話を聞くことができてよかった。(高校、よかった)
- このフォーラムの変遷が理解できた。(高校、よかった)
- これまでの流れとその問題点に関わる根幹にある部分を認識できたため(高校、よかった)
- コンプライアンスから何故今になって未履修問題を振り返るのか、理由が判然としなかった。(高校、どちらとも言えない)
- それぞれのお立場から互いに歩み寄ろう、生徒のために！という意思がよく見えた(高校、よかった)
- それぞれの立場からの話がきけるから → 誰も悪くしようとは思っていないが、かみ合っていない現状。(高校、よかった)
- それぞれの立場におけるお話が伺えた点。(高校、よかった)
- なかなか言いづらいこともある中で、言葉を選びながら主張されていたのがとても好感を持ちました。(その他、よかった)
- 共通試験作成の過程を垣間見ることが出来たこと。倉元先生のお話の後半コンプライア

ンスのお話が腑に落ちる部分が多かったこと。(高校, よかった)

- 業務が入ってしまい、ほぼ拝聴できませんでした。(大学, どちらとも言えない)
- 苦しいお心の内や、検討の過程の御苦労が伝わってきて、こちらも苦しくなりました。
(高校, よかった)
- 具体的な話が聞けたこと (高校, よかった)
- 後の現状報告者の発表との対比でいうと、どうしても迂遠な表現にならざるをえなかったのかもしれませんが、各お立場の理念と本音を感じることができました。(その他, よかった)
- 公表できるぎりぎりまでのところを話していただいたと思う。(高校, よかった)
- 考えたことがみえたこと (大学, よかった)
- 行政・大学それぞれの立場からの考えがきけたから (高校, よかった)
- 行政と研究の立場からの声を聴かせていただいたこと。(高校, よかった)
- 行政の動きや考え方がよくわかった。立場は違いつつも、子供たちを育てる立場として対話を重ねることは重要だと感じた。(高校, よかった)
- 行政責任者の苦悩が分かった気がします。(大学, よかった)
- 行政側のお話を聞く機会はなかなかないので、貴重な経験でした。(高校, よかった)
- 行政担当者の辛さは理解できる。しかし、誰が責任を取ったのか。取っていないのか。なんとなく垣間見えた気がした。(高校, よかった)
- 高大接続改革および入学者選抜の当事者からお話を伺えた。(その他, よかった)
- 高等教育政策の復習になった。(大学, どちらとも言えない)
- 今回は、みなさん立場が明確に違ってそれぞれの立場ならではの講演であったと考えます。(高校, よかった)
- 字が小さくて読めなかった。(大学, 改善すべき)
- 出来事と背景、対話のために必要な共通の視座を得ることができ、今回のフォーラムをわかりやすくしていたと感じた。(高校, よかった)
- 詳しい内容が聞けた点 (大学, よかった)
- 新しい入試制度がとん挫した経緯や世界史の未履修問題など、近年起こった事件について、より詳しい理解を得ることができた。(大学, よかった)
- 新任の入試担当なので、入試改革の経緯や日本の大学入試のことなど良い学びになりました。(大学, よかった)
- 政策の背景にある苦悩が聴けたこと。(大学, よかった)
- 誠実なご発表を聞き、自分ももっと勉強しなければならないと思いました。(高校, よかった)
- 浅田さん：時系列順にそのときの出来事を言うのではなく、どうすれば行政と現場が歩み寄れるのか(歩み寄れたのか)を伝えてくれると良かったと思う。 倉元さん：未履修問題から見ていく入試制度は面白かった。自分はちょうど未履修が問題になった翌年に高校生となったので、何もなかったが、その当時から学校現場は飽和状態で、最終的に学校側が咎められたのはやはり、違うと思う。どうすればお互いが理解できるのか知りたい。(高校, どちらとも言えない)
- 浅田氏からは、難しい立場にありながらも共通テストの迷走ぶりを説明していただいた点が参考になった。倉元氏との信頼関係があるからこそ講演をいただけたのだろうと考

えると大変貴重な機会だった。倉元氏のコンプライアンスと合格者数の推移の関係に関する考察は、これまで考えたことすらなかったものどうしの関連性を追究しているという意味で興味深かった。(高校, よかった)

- 浅田氏からは高大接続改革時の教育行政の現場を、倉元先生からは大学教育現場（及び入試研究の現場）からの話を詳細に伺うことができたため。(大学, よかった)
- 浅田先生から行政側、倉元先生から大学側のお話をお聞きできた点(高校, よかった)
- 浅田先生が引用された教育の議論がかみ合わない理由が大変示唆に富む(大学, よかった)
- 浅田先生のお話は教育行政の最前線で奮闘されてきた方の率直な思いを感じることができて胸を打たれた。倉元先生のお話にあった引き算の発想はずっと感じていたことで、現場のあり方を考える指針の一つにしたいと思った。(高校, よかった)
- 浅田先生の時系列にまとめられた資料は大変わかりやすかった。言うべき時に～の話は身につまされた。倉元先生のお話の発端は未履修問題というのも面白い視点だと思った。(高校, よかった)
- 浅田先生の抑えた物言いが興味深かった。(よかった)
- 浅田先生はマイルドに語りましたが、かなり踏み込んでいただいたと思います。文科省にとっても激動だったことが分かりました(だった、ではなくまだ渦中ですね)。(その他, よかった)
- 倉元先生 **report** が、具体的で、とても解りやすかったです。(高校, よかった)
- 倉元先生の講演で、高大接続改革が未履修問題の波及効果であったことは興味深かった。(大学, よかった)
- 倉元先生の観点は目からうろこでした。(大学, よかった)
- 多くを語れない中でも、一人の行政マンとして出来ること出来ないことでもがき苦しんでいることが伝わりました。(高校, よかった)
- 多様な捉え方があることを学べた(よかった)
- 対立軸から妥協点を模索できる内容であった。(高校, よかった)
- 大学、行政の現状や課題が少し垣間見えた(大学, よかった)
- 大学入試のこれからを考える上で貴重なお話しであった。(よかった)
- 当事者の意識が弱いと思いました。婉曲的なお話の仕方に違和感がありました。(高校, どちらも言えない)
- 特に行政という立場での思いが良かった。(高校, よかった)
- 特に浅田氏の講演は本当にすばらしかった。(その他, よかった)
- 特に倉元先生の大学入試のコンプライアンスについての講演は、時勢的に未確定部分の多い企画構築の際の着眼点となった。(大学, よかった)
- 日頃聞けない事項を挙げてご紹介いただいたこと。(大学, よかった)
- 表面的な部分も見られて残念。とてもおもしろい視点もあり良かった。(高校)
- 問題の解決がいかに難しいかがよく分った。(大学, よかった)
- 様々な立場からのお話が一度に聞くことができたことが大変良い。(高校, よかった)
- 立場と論点をはっきりしていて、非常に聞きやすかった。(高校, よかった)
- 立場上の問題があるのは理解できるが、もう少しつつこんだ話が聞けるとより価値があ

と思った。しかし、講演をいただけて大変貴重な体験だったので感謝している。(高校、どちらとも言えない)

- 両氏とも刺さるお話がありました。敢えて言えば、もう少し日本国内の何かしらの新しいデータや知見を期待していたのですけれども、あまり新しさは感じませんでした。現状の分析は簡単ではないわけですが、納得できる政策決定をするにはエビデンスが必要だと思います。(高校、よかった)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

- 本音のご意見をお聞きして共感できることが多々あります。延沢先生の発言する勇氣に感銘を受けました。(その他、よかった)
- 本音が聞けた。(高校、よかった)
- 入試実施の細かなテクニックにあまり興味は感じていないものの、大学教員として、現場の先生の率直な声に耳を傾けることの大切さを再認識しました。延沢先生のストレートな発表と発言は素晴らしかったです。中等教育を支えているのが、こうした現場の先生なんだと頼もしく感じるとともに、敬服しました。教育を広い視野で捉えるための重要な視座をいただいたことに感謝いたします。(大学、よかった)
- 日頃何となく感じていることを端的に分かりやすくお話していただき、改めてそうだなと気付かされました。(高校、よかった)
- 日頃、感じていることを改めて確認できた。(高校、よかった)
- 内容が具体的でイメージしやすく、問題の本質を上手く表現されていてわかりやすかった(高校、よかった)
- 特に延沢先生の現場からの率直な意見として心に響いた。取り組まれてきたプロセスをもっとお聞きしたいと感じた。(大学、よかった)
- 特に延沢氏の講演は良かった。何でもかんでも現場の意見を聞けばいいというものではないと思うが、延沢氏の意見は率直で血が通っていて正論。こういう意見を吸い上げていくことが必要だと感じた。(その他、よかった)
- 特に、延沢先生の現状報告は、迷いの多い日頃の自分のありようを後押ししてくださるような、そしてこれからさらに学ばなければならないという思いに至らせてくださるような、大変勇気づけられるお話であった。(高校、よかった)
- 都市圏および地方の新学習指導要領対応の現状を知れた点が参考になった(大学、よかった)
- 詳しい内容が、聞けたから。(大学、よかった)
- 出来ないものは無理して実施しない。生徒と先生ができることをしっかりと行い、最善を尽くし、成長することが大事であると感じた。(高校、よかった)
- 私たちの代表者からの報告に、肯かされる所が多々あった。(高校、よかった)
- 高校側の生の声を聴くことができた。(大学、よかった)
- 高校側の現状や課題が少し垣間見えた気がした(大学、よかった)
- 高校現場の話を具体的に聞けた。その通り。地方と都会の差は大きすぎ。地域経済の差がそのまま学力差に出てしまう改革はやめてほしい。」(高校、よかった)
- 高校現場の悩みがしっかりと理解できた。(大学、よかった)

- 高校現場の声をバランスよく伝えてくれたと思います。(高校, よかった)
- 高校現場の困り感を代弁してくれていた。高校現場が感じていることを伝えてくれた。
(高校, よかった)
- 高校現場が抱える悩みと疑問を率直に代弁してもらえたと感じたから。(高校, よかった)
- 高校教員としては共感することが多く, また, 地方と東京の違いも大きいと実感した。
(高校, よかった)
- 高校関係者による率直な意見を伺うことができ, 「貴重」と思えるほど「対話」が不足していたことを実感させられた。大学(とりわけ国立大学)が主催のイベントであるため限界はあるが, 「現場」の立場として高校関係者が報告者として扱われること自体が, 大学・中央行政と高校との距離を表しているのではないかと思えるところもあった(報告書による「御上」「下」という発言にもその意識を「現場」側が内在化してしまっていることにもその構造があらわれている)。(大学, どちらもとも言えない)
- 高校の先生方の置かれた大変な状況を初めて知りました。(大学, よかった)
- 高校の先生の生の声を聞くことができました。(大学, よかった)
- 高校の実情や, 大学入試に関する思いについて熱く語っていただいた。(高校, よかった)
- 高校のリアルな意見が聞けた(大学, よかった)
- 言いたい事が言える人を選んだことに拍手。(高校, よかった)
- 現状報告1が大変リアルな意見で共感を得られた。中々地方の公立高校のご意見を伺う機会がなく, 貴重なものでした。(大学, よかった)
- 現状をストレートにお話頂き, 非常に良かったです。(大学, よかった)
- 現場の話を的確に伝えられていた。(高校, よかった)
- 現場の多くの教員の思いをお話いただいた点が共感を得ていたと思います。(その他, よかった)
- 現場の先生方の強い意見を聴けたこと。(大学, よかった)
- 現場の声が反映されている。(高校, よかった)
- 現場の声がストレートに聞けてとても良かったです。(大学, よかった)
- 現場の生の声がとても参考になった。(よかった)
- 現場の取り組みがみえたこと(大学, よかった)
- 現場の高校教員の考えや感想がよく伝わってきた。(大学, よかった)
- 現場の高校教員が考えていることを知れたから。(大学, よかった)
- 現場の教員と管理職という違った立場で意見をうかがえたこと。(高校, よかった)
- 現場に即した生の声が聴けたのが良かった。同時に, 次の一步はどの方向へ踏み出すのかという問いを持った。(大学, よかった)
- 現場で抱えている問題点・認識を的確に発表し, クローズアップしていたため(高校, よかった)
- 現場で試行錯誤された延沢先生のご苦労と, 全高長の難しい立場から奮闘されてこられた宮本先生のお考えをお伺いできてよかった。(その他, よかった)
- 共感できる例が沢山あった(高校, よかった)
- 宮本先生の行政, 現場双方での経験や, 高校入試, 大学入試の比較は興味深く, わかりやすかった。(高校, よかった)

- 義務教育と高等学校での教育の差を言葉にいただき理解が深まりました。(高校, よかった)
- 延沢先生の話は共感させられるものばかりだった。(高校, よかった)
- 延沢先生の率直なご意見は胸に突き刺さりました。本日の講演内容を活字にいただき、拝読したいです。メモでは正確に書きとれませんでしたので。(高校, よかった)
- 延沢先生の発表は、改革に振り回された同じ高校教員として非常に共感できるものであった。このような公の場で心情を吐露していただき、ありがたかった。(高校, よかった)
- 延沢先生の発表は、よくぞ言って下さったと言う感じ。宮本先生のお話の高校入試審議会と大学入試審議会の比較も大変わかりやすかった。(高校, よかった)
- 延沢先生のプレゼンは、良かったと思います。高校の先生方のご苦労が伝わりました。(大学, よかった)
- 延沢先生のお話は現場の実感としてはまさにその通りというものばかりであった。(高校, よかった)
- 延沢先生のお話、高校の教員として共感出来るが多かった点。(高校, よかった)
- 延沢先生から学校現場、宮本先生から行政とその間の管理職側のお話をお聞きできた点(高校, よかった)
- 延沢先生が、非常に苦しい現場で戦っている高校教員の想いを代弁して下さり、溜飲が下がりました。(高校, よかった)
- 延沢先生：まさに高校現場の声そのものだった。書類仕事や総合的な探求の計画等に時間をさかれ、自分の教科の教材研究が減少し、本末転倒なんじゃないかと思うことが多々あった。子ども達にとって何が一番なのか、上を見るとキリがない。手を抜いていいとは言わないが、現場で実行する人間のキャパシティとのバランスは大事だと思う。 宮本先生：高校入試と大学入試との違いがよく分かった。大学入試において、何人の現役高校教員と意見交換がなされているのかが気になった。校長会で…というよりも各教科や分掌毎の高教研に大学関係者や行政が来て、実際にその教科を教える先生たちと対話すると、お互いに何を目的にどういう力を伸ばしていて、それに入試がどう関わるのか見えやすいのではないかと思った。ぜひ、意見交換の場を設けてほしいと思う。(高校, よかった)
- 延沢先生、宮本先生の内容ともに、とても現状を捉えていて良かったです。(高校, よかった)
- 延沢氏の新たな入試制度に対する研究姿勢は驚くばかりであった。また意欲的にネットワークをつくり情報収集をされている様子にとっても刺激を受けた。宮本氏の話は自らの経験を踏まえて、高校入試と大学入試の違いという切り口から課題を明確にされており、まさにエビデンスベースの話でとても分かりやすかった。(高校, よかった)
- 延沢さんの現状報告は、今回のシンポジウムに参加してまさに目からうろこの印象であった。現場の高校教諭の方々が、一所懸命に努力している様子とそれがなかなか報われないとか、行政や政策の迷走ぶりに振り回されている、現実とのギャップが改めて認識された。また、高校の教育界ではPBL派 vs. 受験指導・入試実績派のどちらが今求められているのか…との競争的な立場の違いがあり、その間にあって現場の教員たちの悩みがあるとの指摘があった。近年、「探求コース (PBL 派的?)」を設けた学校での (生

徒自らの学習意欲や探求心向上等の) 教育成果などの報道を見ると、これら 2 つの立場は対立的にとらえるべきものではないのではないかと思います、気になった。勿論、PBL だけで良いとは思わないし、基礎学力をきちんとつけることは大切なことです。新たに加えたら、何かを削ることにも賛成。また、宮本さんの現状報告からも、高校入試と大学入試の比較を通じて、これからの大学入試政策を見直す上で、大学側がもっと配慮すべきことがあるのではないかと提案され、それもそうかなと思った。(大学、よかった)

- 異なる立場で、かつ思いを同じくする方々のお話を聞け、今の課題を身近にかつ良い方向へ向かいたいと思わせてくれるものであったため。(高校、よかった)
- なるほどと感じるお話が多々ありました。教育政策の議論は、十分な議論を待っていてはいつまでも決まらない、スピード感をもって意思決定をすれば議論が尽くされない、というジレンマを抱えるものだと思います。現場の議論が停滞している間に誰かが先に政策決定してしまう、ということの繰り返しのような気がしています。(高校、よかった)
- なぜ延沢教諭がキャスティングされたのか、疑問に思いました。現場教員の声を代表される方というスタンスであろうと思われましたが、おそらく巷に多いであろう、同調する方々の思いを増長させるばかりでは、そこには対立しかありません。義務教育 vs 高校、都会 vs 地方、ひいては御上 vs 現場 という切り口では、そもそもの対話は生まれなないと感じます。行政の方にはその人の経験値という物差ししかないという御批判は、そのまま御自身に戻ってくるのではないのでしょうか。個人的には、PBL vs 大学入試に対応できる学力 という二項対立も、古いと考えています。少なくとも行政経験のある方ではないと、発言が一面的になりがちです。「無理」ではありません。(高校、改善すべき)
- どちらの発表者の方とも、忌憚のない率直な考え、意見をお話いただき、頷きながら聴かせていただきました。(高校、よかった)
- こちらも、上記と同様の意見です。(高校、よかった)

5. ディスカッションは如何でしたか。

- 話題を絞っても良かったのではないかな。(大学、どちらとも言えない)
- 様々な立場の先生方の考えを聞くことができてよかった。(高校、よかった)
- 面白かった。理解が深まった。(大学、よかった)
- 本音の部分が見え隠れして、そのニュアンスがうまく伝わっていた。(高校、よかった)
- 発表者それぞれの真意がより明確になりました。(大学、よかった)
- 特になし(その他、よかった)
- 短い時間でしたが内容が非常に濃く、充実していました。(その他、よかった)
- 浅田先生のご意見(私見)・・・全ての人に必要なモノと必要でないものの見極め・・・(高校、よかった)
- 紳士的な回答に溜飲が下がりました。(高校、よかった)
- 新しい発見があったから。(大学、よかった)
- 少々時間が短く、議論をより深く伺いたかった。(大学、よかった)
- 少し本音がお聞きできたと思います。(大学、よかった)
- 時間に限りがあったり、配慮しながら発言したりと、もう少しズバッと言っても良かった。(高校、どちらとも言えない)

- 時間があっという間に過ぎたと感じるほど、中身の濃い内容でした。(高校、よかった)
- 四者四様のお考え・意見を聞けて興味深かった。(大学、よかった)
- 司会は「どうでしょうか」と繰り返すばかりで、各パネリストの回答がかみ合わないところが多くみられた。もっと司会は討議者の話をまとめつつ、回答丸投げではなく、交通整理しながら議論を進めてほしい。(高校、改善すべき)
- 最初のパネリストどうしの質疑のなかで校長の役割の話題がありましたが、様々な現場の課題は現場から都道府県教委までの間の組織のデザインにあるのではないかと感じました。学校の管理職の割合は一般企業と比べて圧倒的に少なく、しかもわずか数年で異動するというしくみで、これが良くないのではないかと、思いましたがいかがでしょうか。それから、終わり際に浅田先生が述べた、大学と高校の対話はもっと対等に行ってほしいという意見はすごく納得です。(高校、よかった)
- 高校側の訴えが行政に届く様子を見れたから。また、行政の苦勞を知る事が出来たから。お互いの意見をぶつけながらもお互いを尊重して、共通の目標を求めることの素晴らしさを改めて感じた。(高校、よかった)
- 高校側の質問や意見に対する回答が少し的を射ていなかったような気がする(大学、どちらとも言えない)
- 講演者の先生方の立場と論点がはっきりしていた。対話することで妥協点を見つけていくところにとっても感動した。(高校、よかった)
- 講演や現状報告からさらなところを話していただいたと思う。(高校、よかった)
- 行政と現場の役割分担の話になるのかもしれませんが、様々な発信の場が増えることが期待されていますね。(その他、どちらとも言えない)
- 行政、大学、高校教員、行政側の経験をお持ちの高校校長と、様々な立場の方の意見を聞くことができ、勉強になりました。人選に偏りなく良かったと思います。(高校、よかった)
- 忌憚のない意見交換を拝聴できた。(大学、よかった)
- 学校はどのような人を育てるのか、何事にも対話が必要ということがとても印象に残りました。(大学、よかった)
- 隔靴搔痒な感じがしました。対話の必要性は、対話の成果で示すべきだと思いました。(高校、どちらとも言えない)
- 延沢先生が少しあきらかに似た境地に立たれている点が気になった。(大学、どちらとも言えない)
- 一部本音が見られて楽しかった。(高校、よかった)
- より具体的につっこんだお話がお聞きできた点(高校、よかった)
- やや話が噛み合わない所があったのでは？(高校、どちらとも言えない)
- もう少し聞きたかった。(大学、よかった)
- もう少し踏み込んだ議論でもよかったが、公共の場でそれぞれ立場のある方が自分が話せるぎりぎりまでお話されていたと感じたから。(高校、よかった)
- もう少し切り込んだ内容で深まりがほしかった。(どちらとも言えない)
- バランスの良い内容であった。(高校、よかった)
- パネラー同士の対話を入れて頂いたが、そのことにより議論や理解が深まったと感じた。

(高校, よかった)

- どの立場でも子供たちのことを真剣に考えていることがわかった。うまく噛み合うと思った。(高校, よかった)
- テーマとして対話を掲げて、司会者の方もパネリストの先生方もそのテーマに沿って頂いたことで、会場全体でディスカッションしている空気感になり、我々も主体的に考えながら参加出来たので。(高校, よかった)
- それぞれ異なる立場でも、子供たちのために対話を積み重ねる今回の趣旨を感じさせるディスカッションで、時間が短く感じた。(高校, よかった)
- それぞれの立場の違いが明瞭になったと思います。対話の重要性は認めつつも、高校入試と大学入試は明確に違うのだなと。(高校, どちらとも言えない)
- それぞれの立場からのご意見が聞けたこと。(高校, よかった)
- それぞれの内容に関する「対話」がこの場で行われたこと。(大学, よかった)
- それぞれの見解からの改善点を建設的に議論していたと考えるため(高校, よかった)
- かみ合っているようないないような感じでしたが、議論を面白く聴かせていただきました。(大学, よかった)
- かなり、それぞれの立場から本音を話されていたので、考える刺激をいただきました。(高校, よかった)
- インフォーマルな対話が大切と思いました。(高校, よかった)
- 4人のパネリストそれぞれの立場からの興味深い議論を聴くことができ、感謝している。倉元先生の発言にあったように、大学入試は、その大学における(あるいは目指す)教育に受け入れ可能(あるいは適切)な学生を選別するものであるから、大学入試の主体は大学側にあるとする立場は明快で、個人的には賛同する。ただ、「将来の世界&日本を担っていく人材をどう育てていくか?」という東北大学の立場での入試を実施することには異論はないものの、「PBL教育では学生は楽しいだろうが、積み重ねが難しい」とのやや否定的な発言が続いたことにはやや興ざめを感じた。かつての「追いつき追い越せ」の時代ではない 1980 年代以降の我が国にあって、これまでの教育では足りなかった部分を補える可能性を期待して PBL 教育が注目されてきたと認識していたので、積み重ねは難しくとも進むべき方向性としては、今後とも模索すべきではないか? 時間の流れが緩やかだった時代には、卒業論文に取り組んで初めて「学ぶことの面白さ」に気が付いても、社会は十分に受け入れてくれたが、今はどうだろうか。その意味でも、高校の段階から、何らかの取り組みがあってしかるべきだと思う。(大学, よかった)
- 「対話」という言葉がキーワードになっており、その重要性を改めて認識できた。(高校, よかった)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

- society5.0 本当に大学教育や高校教育が目指すべきもの(高校)
- web での参加が可能なのは大変ありがたいです。将来的には、新学習指導要領で育っていく方が、従来と比べてどのように成長していくかが検証される機会があると良いと思います。苦勞した分成果が出ることを期待して。(その他)

- オンライン（大学）
- オンラインはありがたいです。（高校）
- オンライン形式がよい（旅費や移動の時間が節約できる）（大学）
- オンライン配信は助かります。
- オンライン併用が有り難いです。（その他）
- オンライン方式は参加しやすいので、非常に助かります。現状通り平日開催で構いませ
んので、コロナ明け以後もオンライン方式を残していただければ、とてもありがたく存
じます。（大学）
- こてこての進学校の、旧来の大学入試に根差す受験指導にしがみつきたい教員が、受験
指導観を変えざるを得なくなるような、カウンターパンチとなる内容を望みます。（高校）
- ディスカッション形式も面白いと思う。（高校）
- ハイブリッド
- やはり、大学入試総論テーマ、その年度に合った各論テーマという現在の形式が望まし
いです。（高校）
- やはり入試は高校生を中心とした受験生が中心となるものなので、今回テーマになった
「現場」からの重要な声として高校生（や保護者）の意見も聴いてみたい。（大学）
- 引き続き、入試改革（大学）
- 学校現場、大学、行政のそれぞれの立場からのお話を聞いて勉強したい（高校）
- 形式は同じで良い。討論の時間もやはり必要と思います。（高校）
- 行政と現場をつなぐ管理職の役割（高校）
- 今回のテーマを更に掘り下げて欲しい。コロナ禍もあり、共通テストの在り方は引き続
き不透明に感じられ、現場視点では不安がある。行政の側の意図を聞く機会、また現場
の声を行政側に聞いて頂ける場として今回のようなフォーラムは貴重だと感じた。（高校）
- 今回のようなテーマで、高校現場の声を取り上げてもらいたい。（高校）
- 今回のようなハイブリット形式だととても助かります。（大学）
- 今回のように、リアルとオンラインのハイブリッド形式で実施いただけると参加しやす
いです。（その他）
- 今回の形式、対話の一環であれば良い。（高校）
- 今回の形式が望ましい。事後視聴も可能となっており、とても良い。（大学）
- 今回はオンラインで参加ができて、非常にありがたかったです。準備される方は大変だ
と思いますが、次回もできればオンライン参加を続けてくださるとうれしいです。（大学）
- 今後の日本の大学入試の流れ、コンプライアンスについて（高校）
- 出口としてのキャリアの問題と高大接続（大学）
- 初めて参加したのでよくわかりませんが、このような形式で良いのではないかと思います。
（高校）
- 新カリキュラムの中での真の生徒に身に付けさせる能力・試験に関する分析（高校）
- 新課程における大学入試について、大学と高校の具体的な対応（大学）
- 新課程について（大学）
- 新学習指導要領、入試業務や入試広報のデジタル化のメリットと課題、コロナ、進路指
導など（その他）

- 新学習指導要領と大学入試（高校）
- 生徒1人1台の端末を活用するICT活用が及ぼすメリットとデメリット。ICT機器を使わないという選択肢はないと思うので、最適な使い方や効果的な使い方や未来にどのようなつながっていくかという見通しなどを学びたい。（高校）
- 仙台まで行ってみたいですが難しいですので、今回の形はありがたいです。（高校）
- 総合的探究の時間の現実（大学）
- 大学の制約等がなければ、対面での参加を希望。（大学）
- 大学入試についての続編（高校）
- 大学入試の妥当性（大学）
- 地方大学の取り組みや行政との連携をテーマとしたフォーラム。
- 東北大学の考えを聴かせていただくことは、もちろんですが、大学が生徒を選抜するのと同様、高校も大学を選択する材料として近隣国公立の考えも交え、比較する場面をいただきたいと感じました。（高校）
- 本日のようなテーマについては、（教育）行政学のような関連する研究分野の知見を援用したようなある意味啓発的な要素も取り入れたフォーラムを期待したい。（大学）
- 令和7年度入試に向けての課題についてより掘り下げを図っていただけるとありがたい。また、高等学校で今年度から導入された観点別評価と大学入試、大学教育との連関についても示唆をいただきたい。（高校）

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

- 「6」の回答は「長いと感じた」程度です。（高校）
- youtube 配信だったため、事後に録画で視聴できたのがありがたかった。平日の午後は授業と重なるため、後からみられるの助かります。（高校）
- あまり大学入試政策に直結する話は多くなかったように思いますが、でも面白い話がたくさんありとても満足しました。（高校）
- いつもありがとうございます。いつも大変参考にさせていただいております。いつも次回を楽しみに思います。（大学）
- いつも勉強になっております。（高校）
- コロナ禍で今回の対面での実施ありがとうございました（高校）
- たいへん素晴らしい会議でした。後日に、もう一度聞けたり、同僚に見てもらったりすることができるように、アーカイブを利用できるようにしていただけるとありがたいです。（高校）
- とてもよかったです（大学）
- なし。（大学）
- パネリストの皆様方が、かなり本音に近い突っ込んだお話をされていて、とても良い刺激を受けました。将来的には、高校現場の進学指導に関する本音も聞いてみたいと思いました。（大学）
- はるばる静岡の三島から来た甲斐がありました。多くの新しい視点を学びました。職場に持ち帰り、得た経験を還元したいと思います。（高校）
- マインドセットの難しさを痛感しました。必要なのは、高校の教員が「耳を貸す」こと

だと思います。ありがとうございました。(高校)

- 遠隔で参加した。資料は4枚/PDF1頁で作成されていたが、画面表示がしづらいので1枚/頁が良い。A4用紙への印刷には4枚/頁が良かもしれないが、1枚/頁で作成されても印刷時に1頁あたりの枚数は自由に設定できる。(大学)
- 画面共有は解像度が低く読みにくい。(大学)
- 貴重なご講演等、大変参考になりました。(大学)
- 貴重なご発表、ご意見等ありがとうございました。来年度以降もよろしくお願いいたします。(大学)
- 貴重な機会をありがとうございました。(高校)
- 貴重な時間をありがとうございました。(高校)
- 行政及び大学、高校の先生方のお話から、大学入試や高校教育について考える貴重な機会をいただきました。たいへん興味深く拝聴いたしました。心より御礼申し上げます。(大学)
- 高大接続にはまだまだ課題があると感じました。高校現場は結局のところ大学が求めている学生像を理解しきれていないようにも感じています。意見交換の場がもっと欲しいと思っています(発信すれば良いのですが、日頃はどうしても時間が取れません)。(高校)
- 今回、行政・高校・大学の三者から大学入試についてのお話をお伺いし、とても貴重だったが、高大接続改革の重要なエージェントとして「政治」と「事業者」があったことは、忘れてはならないと思う。(その他)
- 今回のフォーラムを受けて、現場と行政が「乖離」しているとして、それはどのような状態なのか、それこそ肌感覚の議論ではないかと考えた。乖離しているとしてそれが問題である根拠は何なのか、その解決策としては「対話」しかないのか、ということは議論していく必要があるように思えた。また、対面参加者にも資料データを配付していただけるとありがたかった。(大学)
- 今回は、大学入試の行政経験者、高校入試の現場・行政経験者、高校現場、そして大学教員というみなさんの立場や経験が生かされた講演並びに現状報告だったと考えます。また最後の討論会も、この場で結論がでるような内容ではないですが、視聴する側が自分の考えを確立する上での参考となる示唆に富んだ話し合いでした。もっと、討論を聞きたいとも思いましたが、発表のあとの討論ですから、登場する方がたの肉体的、精神的エネルギー消費量を考えると限界を突破していたとも思います。とても、充実した内容でこれから自分の頭を整理したいと考えております。今回のフォーラムに関わった方、すべてにお礼を申しあげたいと存じます。どうもありがとうございました。(高校)
- 今後、共通テストの記述式採用の有無。また採用された場合の採点方法や採点基準については非常に興味があります。(高校)
- 今日の講演を聞いてますます大学入試は大学が主導権を握って、その大学で欲しい資質を二次試験で問えばよいと感じた。その意味では大学入学共通テストはその大学を受験する資格があるかを問う最低限のテストであればよいだけで、過度に作題にこだわる必要はないのではないか。情報も必要と考える大学が二次試験で課せばよいだけで共通テストで一律に貸して試験科目を増やす必要はない。増やすなら別の科目を減らすべき(たと

えば文系・理系ともに共通テストの理社は1科目にする等) (高校)

- 参考になりました。ありがとうございました。(高校)
- 生産性の高いシンポジウムであったと思います。ありがとうございました。(大学)
- 浅田先生の言葉「高校は義務教育ではない」が印象に残った。(大学)
- 倉元教授の熱を感じた。(高校)
- 倉元先生や司会の久保沙織先生や企画運営のみなさまお疲れさまでした。話し方もはきはきしており、配信のクオリティーも良かったと思います。ありがとうございました。(高校)
- 対話は重要。ただし文科省の審議会の中でさえもそれができていない。文科省の審議会では、委員が一人ずつ意見を言うだけで、議論になることはまれ。そして次の回には、事務局がどうまとめたのかわからない資料が出てきて、それに対してまた一人ずつ意見を言うという、初めて見る人はびっくりするナゾの会議。委員は自分の所属団体の看板を背負ってきているのでその立場からの主張が強く、「その団体には不利益でも全体として最適解が出る」という場面でも反対意見を言う。これでは対話にならない。(その他)
- 大学側に推薦入試が増え、大学が求めるから(合格したいから)という理由でボランティア活動や課外活動をする生徒が増えた。そしてそれを斡旋しなければならない教員側の仕事も増えた。大学は推薦入試で生徒に何を求めるのか。また、面接では専門知識やその専門に興味関心があるのか聞かれる。だから高校のうちから大学の講義を受ける。妙に専門性を追求しまくった視野の狭い生徒でいいのか。高校は広い視野で入試科目に関係なく広く学ばせたい。専門性は大学に入ってからで良いのではないか？(高校)
- 大学入試の改革に関わる立場として常に意識しているのは「主役は生徒・学生」であるということである。いわば入試制度の変更等については、選抜をする側、される側が納得して受け止めることである。双方の対話がなによりも必要であるといえる。そう認識を深めていても、ふと大学内で審議を重ねていく工程の中で、「いまどの立場で思考しているか」を自分自身に問う場面がでてくることがある。目の前にリアルがあるのに、俯瞰してみておらず、全体的に視野を広げず、見えていないのではないかとハッとさせられるのである。今回のシンポジウムでは現場との対話、現実課題への対応を進めていく上で、軸をブラさず、是非の境界線を意識しながらも、信念をもって臨めていける起爆剤となったことは確かである。このようなシンポジウムを企画・運営してくださった東北大学の関係者の皆様、ご尽力に感謝の念しかない。浅田先生、倉元先生、延沢先生、宮本先生、貴重なご報告、ありがとうございました。(大学)
- 大変、勉強になりました。(高校)
- 大変有意義なテーマと講演、報告、討議でした。ありがとうございました。
- 特にありません。(大学)
- 配布資料をいただけるのはありがたいのですが、パワポファイルの4分割ではなく、パワポのスライド1枚が1ページなったPDFだと、小さな文字も見やすく助かります。(大学)
- 発表の先生方、見えるところ見えないところに関わってくださった皆さま、本当にありがとうございました。(大学)

- 普段学校にいただけでは、行政および大学側の先生のお話をなかなか聞くことが出来なかった。貴重な時間をいただけたと思います。現在は教科教育以外に求められる力が広がっているように思います。この力をつけるためにはどうしても教科教育以外の時間が必要となり、これは引き算の概念とは相反することになると思います。この辺りをパネリストの皆さんはどのように思っているかをおききしたかったです。(高校)
- 本日は貴重なお話をありがとうございました。今日のことをきっかけにまた入試について考え直すいいきっかけになりました。(高校)
- 毎年ご準備等大変かと思いますが、引き続きよろしくお願いいたします。(その他)
- 毎年のことながら質の高いフォーラムを有難うございます。(その他)
- 毎年楽しみにしています。今年も参加して良かったと思いました。ありがとうございました。(高校)

参加者統計

1 参加者総数: 541 名

(講演者・招待参加者: 17 名, 大学: 270 名, 高校: 156 名, スタッフ等: 28 名, その他: 70 名)

1.1 来場参加者総数: 102 名

(講演者・招待参加者: 12 名, 大学: 16 名, 高校: 38 名, スタッフ等: 27 名, その他: 9 名)

1.2 オンライン参加者総数: 439 名 (参加申込者数)

(講演者・招待参加者: 5 名, 大学: 254 名, 高校: 118 名, スタッフ等: 1 名, その他: 61 名)

2 参加者地域別

宮城県内: 107 名

宮城県以外の東北地方: 84 名

(青森県: 19 名, 岩手県: 13 名, 秋田県: 19 名, 山形県: 24 名, 福島県: 9 名)

東北地方以外 350 名

(北海道: 29 名, 茨城県: 23 名, 栃木県: 8 名, 群馬県: 2 名, 埼玉県: 12 名, 千葉県: 7 名, 東京都: 91 名, 神奈川県: 11 名, 新潟県: 6 名, 富山県: 4 名, 石川県: 8 名, 福井県: 2 名, 山梨県: 3 名, 長野県: 7 名, 静岡県: 12 名, 愛知県: 12 名, 三重県: 2 名, 京都府: 11 名, 大阪府: 5 名, 兵庫県: 4 名, 鳥取県: 2 名, 岡山県: 7 名, 広島県: 9 名, 山口県: 10 名, 徳島県: 1 名, 香川県: 4 名, 愛媛県: 4 名, 高知県: 6 名, 福岡県: 20 名, 佐賀県: 1 名, 長崎県: 2 名, 大分県: 3 名, 熊本県: 3 名, 鹿児島県: 8 名, 沖縄県: 11 名)

2.1 来場参加者地域別

宮城県内: 57 名

宮城県以外の東北地方: 21 名

(青森県: 3 名, 岩手県: 6 名, 秋田県: 1 名, 山形県: 6 名, 福島県: 5 名)

東北地方以外 24 名

(茨城県: 1 名, 栃木県: 3 名, 東京都: 7 名, 神奈川県: 1 名, 新潟県: 1 名, 山梨県: 2 名, 長野県: 1 名, 静岡県: 3 名, 愛知県: 3 名, 大阪府: 1 名, 岡山県: 1 名)

2.2 オンライン参加者地域別

宮城県内: 50 名

宮城県以外の東北地方: 63 名

(青森県: 16 名, 岩手県: 7 名, 秋田県: 18 名, 山形県: 18 名, 福島県: 4 名)

東北地方以外: 326 名

(北海道: 29 名, 茨城県: 22 名, 栃木県: 5 名, 群馬県: 2 名, 埼玉県: 12 名, 千葉県: 7 名, 東京都: 84 名, 神奈川県: 10 名, 新潟県: 5 名, 富山県: 4 名, 石川県: 8 名, 福井県: 2 名, 山梨県: 1 名, 長野県: 6 名, 静岡県: 9 名, 愛知県: 9 名, 三重県: 2 名, 京都府: 11 名, 大阪府: 4 名, 兵庫県: 4 名, 鳥取県: 2 名, 岡山県: 6 名, 広島県: 9 名, 山口県: 10 名, 徳島県: 1 名, 香川県: 4 名, 愛媛県: 4 名, 高知県: 6 名, 福岡県: 20 名, 佐賀県: 1 名, 長崎県: 2 名, 大分県: 3 名, 熊本県: 3 名, 鹿児島県: 8 名, 沖縄県: 11 名)

多くの方々に御参加いただき、ありがとうございました。

第 36 回東北大学高等教育フォーラム運営スタッフ

統括責任者	倉元直樹	
企画責任者	倉元直樹	宮本友弘
事務局	久保沙織	

当日スタッフ

南 紅玉	末永 仁	阿部和久
石井裕基	加藤徳善	田中秀樹
鎌田裕子	熊井弘子	竹浪綾子
林 如玉	黄 思華	林 澄
朱 力行	加美山若奈	

共催：国立大学アドミッションセンター連絡会議
本企画の一部は、JSPS 科研費 20K20421 の助成を受けた

IEHE Report 86*

第 36 回東北大学高等教育フォーラム報告書

新時代の大学教育を考える [19]

大学入試政策を問う
——教育行政と教育現場の「対話」——

発行：2022 年 11 月

編集：久保 沙織

発行者：東北大学高度教養教育・学生支援機構

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

Tel: 022-795-7551

Email: ieheoffice@grp.tohoku.ac.jp

印刷所： 有限会社 明倫社

*No.55 以前は、CAHE TOHOKU Report として刊行

